

# ドリームマガジン

ED DREAM MAGAZINE

cover illustration by カグユツ

今号の特集

## 牝奴隷 オークション

連載&読み切り小説

高岡智空×からすま式  
 新居佑×sian  
 千夜詠×牡丹  
 酒井仁×キノコウタロウ  
 斐芝嘉和×あーや  
 清水勝治×夕霧  
 筆祭藤介×カグユツ  
 あらおし悠×未来電機

えっちマンガ&4コママンガ

### MISS BLACK

おおたたけし

ばふえ / 天海雪乃

ふみひろ / 柳原ミツキ

嘉納あいら

カラーピンナップ

ぼっしい

ピエール☆よじお

カグユツ

⚠ 電子書籍版にはDVD  
付録はついておりません

立ち読み版

表紙&ピンナップテレホンカード  
応募者全員サービス

vol.74

2014

02

DIGITAL EDITION  
デジタル版





# 姫奴隷オークション アンネローゼ

ふでまつりけいすけ  
小説 NOVEL 筆祭競介  
挿絵 ILLUSTRATION カグユヅ

今  
北奴隷  
オークション  
特集

革命で北奴隷に堕ちた姫の身体をかけ、  
恥辱のオークションが始まる！





場所はエクステルド王国の大会議場。

本来、国の政が話しあわれるその場所で、今、オークションが行われていた。

一階中央に円形の柵が設けられ、その周りを下級貴族や豪商などが立ち見で取り囲んでいる。

しかしオークションにかけられる王家秘蔵の品々は、二階席にゆつたりと座る有力貴族たちにその大半が落札されていた。

「それでは本日の、最後の品でございます」

そんな中、進行役の声に会場奥の扉が開くと――

「おおおおおおお……」

扉の中から現れたのは、この国の者ならば誰でも知っている妙齡の女性だった。

宝石のようにきらめく大きな瞳。

高く均整の取れた鼻筋に、桜色の瑞々しい唇。

そんな女性の顔を形作るパーツの一つ一つが芸術品のように美しく、しかも完璧なバランスでその小顔の中に配置されている。人の顔に黄金比があるとすれば彼女の美貌こそがそれだろう。あまりにその配置が完璧すぎて透明感が尋常ではない。

プロポーションも素晴らしく、全体的にはスラッとした細身なのだが、胸は大きく豊かに実り、ヒップはむっちりとした安産型。

こちらの方は官能的な黄金比というべきか。これ以上厚くなつたら下品になる、というギリギリの、男の欲情を最も掻き立てる豊かさで、胸も尻も美しく盛り上がっていた。

――それだけに。

彼女が身にまとっているポロポロのドレスや、その首に巻かれている首輪が、より一層、男の欲情を掻き立てる。

「それではこれより、アンネローゼ姫のオークシ

ョンを開始いたします」

会場に響き渡った進行役の声に、首輪を嵌められた美女――アンネローゼは不安そうにその美貌をひそめ、ビクツとそのセクシーな女体を震わせた。

エクステルド王国内で反乱が起きたのは、僅か一月前のことである。ここ数年、国王が長い病床に就いていてその隙を突かれた格好だ。

首謀者はスカラ大公――国王の歳の離れた腹違いの弟である。

大公は謀反の咎で他の有力貴族たちに討伐されたため、国王直轄の領地を彼らにも配分し、王家のお宝も一人占めせず競売にかけることにした。

それが今回のオークションだった。

※

「それでは姫の所有権、五株目はリーフ公爵家のアレックス様が落札されました」

カーン、と甲高く鳴った木槌の音を、柵の中心にいるアンネローゼは、茫然としながら聞いていた。

(……どうということなの、これは?)

アンネローゼは目の前の現実が信じられなかった。今、行われているのは自分の所有権をかけたオークションらしい。

これではまるで、自分が奴隷のようではないか。しかも、その権利が何故か六つに別けられていて、それぞれ別々の貴族たちに落札されていた。

(で、でも……私なんかを奴隷にして、いったいどうするっていうの?)

自分が奴隷としていたし労働力にならないことは、誰にも目にも明らかだろう。にもかかわらず、先ほどから上がっている金額は、一国の姫である自分が聞いていても尋常な額ではない。

「それでは最後の六株目です。この株の特典はお配りしている資料の通りです。尚、この株は千三百万

レニーからスタートいたします」

会場中が再び大きくどよめいた。これまでの五株は共に五百万レニーからスタートし、最終的には一千万レニーを少し超えた値で落札されていた。千三百万レニーは、それだけでこのオークションのレコードである。

「大公はどこまで金を掻き集める気だ」

「このオークションの売り上げは、全て国王の悪政に泣いてきた民に施す、と言っておりますぞ?」

「この場の誰も、そんなことは信じておるまい」

「そもそも悪政、とは聞いて呆れるわ」

「大公の浪費癖で、自国の領民たちはかなり泣かされておったそうすな」

「大方、今回の謀反に費やした軍事費や買収費の補填にあてるのであろう」

「一人に売るより、六人に売った方が確実に高くつきますしな。一人で六千万レニー以上の金は、払いようがなかるう」

「いずれにしろ狂気の沙汰ですな」

柵を取り囲む貴族たちがボソボソと話しあっている中、競りの最初の手が一階から上がった。

アンネローゼはすぐにそちらに視線を向ける。

(えっ?! か、彼は確か……)

いかにも生真面目そうな黒髪の青年には見覚えがあった。確か自分の親衛隊員だったはず。剣術や馬術に優れていて――しかし名前は何と言っただろうか? 下級貴族の出身であることまでは覚えていたのだが……彼の爵位すら思い出せなかった。

「それでは次に、千三百万レニー。一千三百万レニーはございませんか」

進行役が十万レニーに乗せして競りを続ける。と

「千四百万レニー」

二階席から、いきなり百万レニーに乗せした声が上がった。



「あつ。あれは……」

今度も見覚えのある者で、しかも一階の男と同様、自分の親衛隊員だった。今度の男はちゃんと名前も知っている。国内でも屈指の有力貴族——アガド候爵家のキールだ。何度か言葉を交わしたこともある。（あつ?! そ、そういうことだったんだ）

アネローゼは、己の親衛隊員がこのオーケションで続けて手を上げた光景を見て、ハッと気付いた。（皆で私を助けようとしてくれてるんだ……）

そう思うと全て合点がいく。先の五株を落札したのも、皆、アネローゼと関わりのある人物ばかりだった。つまり叔父のスカラ大公に監禁されている自分を、皆が協力して莫大なお金を払って助けてくれようとしているに違いない。

「い、千四百十萬！」

「千五百萬レニー」

「い、いいい一千五百十萬！」

「千六百萬レニー」  
 姫がこのオーケションの意味に気付いた間にも、一階にいる黒髪の青年と、二階席に座っているキールの間で、激しい競りが続けられていた。

「なつ……なら、一千七百萬レニー！」

「二千八百萬レニー」

「……いいい、一千……八百……ご、五萬……」

「二千九百萬レニー」

「そ、そんな……ッッ……い、一千……一千、き、九百……い、一萬……」

「二千萬レニー」

「……ッッッッ」

しかしアネローゼには、二人の親衛隊員が激しく競りあっていることが不思議で仕方がなかった。特にアネローゼが名前も知らない下級貴族にとつて、千五レニー単位の金など、それだけで家が潰れかねない額なのではないだろうか？

（ひよつとして……私を救い出す栄誉をかけて、二人は競っているのかしら？）

唯一、納得できる理由はそれぐらいしか思い浮かばない。とにかくどちらが落札しても、手の甲に直にキスをするを許してあげよう。

アネローゼはそう思った。

「さあ。現在、二千万レニーでございます。二十十萬レニーはございませんか？ ございませんか？ 本日、最後の商品です。ございませんか？」

進行役が会場を見回しても、手を上げる者は誰もいなかった。最後に一階の黒髪の青年に視線を向けたが、彼は力なく項垂れ続けていた。

「二千万レニーです」

進行役の木槌が、カーンと乾いた音を響かせると、会場から自然と拍手が湧き上がった。

結局、資金力で遙かに勝る、名門侯爵家のキールがアネローゼの最後の権利を獲得した。

「それでは姫の所有権が全て決まりました。落札者の方々は、当初の取り決め通り、この場で最初にその権利を施行してください」

進行役の言葉に従い、二階席から六人の男たちが一階の柵の内側までやつてくる。

「皆さん。私を救ってください、本当にありがとうございます」

「姫は王家思いの忠臣たちに、ボロボロのスカート

を軽く持ち上げて、膝を軽く折り曲げる礼をする。

「……あら？」

しかし六人の男たちは恭しく礼を返すこともなく、啞然とした顔をして自分を見ていた。

「先生、どうかされたのですか？」

アネローゼは自分の教育係りであった、大神官の老人に向かって首を傾げた。

「……姫。私は貴女を見るたびに神の力を感じておりました。これほどの容姿に恵まれながら、これほ

ど無垢で、これほど純粋な心を、この現世で保ち続けるなど……奇跡としか思えません。貴女が貴女のままであられる、王家という箱庭に産み落とされたのは、まさに神のご意志でしょう」

「あら先生。また随分と難しいことをおっしゃるんですね」

アネローゼが小首を傾げると、いきなり隣から爆笑の音が聞こえた。

「まあ、何ですか、アレックス」

アネローゼは行儀の悪い少年——リーフ公爵家の幼い領主を睨んだ。公爵家は王家とも縁が深く、彼とは幼馴染みで姉弟のような関係だった。

「だってお姉ちゃん、あんまり笑わせるからさ」

「こら、アレックス。あんまりお行儀が悪いと、後でお尻、べんべんよ」

アネローゼがいつも通り睨んでも、アレックスはさらに腹を抱えて笑うだけだった。

「おお。近くで見ると、本当に神々しいほどの別嬪さんやなあ」

そうしみじみと呟いたのは、でつぷりと太った中年男だった。名前は思い出せないが、その容姿はよく知ってる。確か元豪商で、貴族の地位を金で買った男だ。他国との貿易について父に助言をするため、何度も王宮に上がっていて、そのたびに異国の珍しい品を自分にも献上してくれていた。

「ひひひつ。姫って、本当に天然ですよ」

そんな中、正面から歩み寄ってきたのは自分を最後に救ってくれたキールだった。これまでにない砕けた口調に違和感を覚えたが――。

「ありがとう、キール」

アネローゼは改めて男に礼を述べると、左手をソツと差し出した。自分の親衛隊員ならそれが手の甲へのキスが許された行為だとわかるはず。

しかしキールは口元に薄い笑みを浮かべたまま、

「……あら？」

しかし六人の男たちは恭しく礼を返すこともなく、啞然とした顔をして自分を見ていた。

「先生、どうかされたのですか？」

アネローゼは自分の教育係りであった、大神官の老人に向かって首を傾げた。

「……姫。私は貴女を見るたびに神の力を感じておりました。これほどの容姿に恵まれながら、これほ

ど無垢で、これほど純粋な心を、この現世で保ち続けるなど……奇跡としか思えません。貴女が貴女のままであられる、王家という箱庭に産み落とされたのは、まさに神のご意志でしょう」



その場に膝をつこうとはしなかった。

「どうしたんですか？ 何故、そこに膝をついて、褒美のキスをしないのですか？」

アンネローゼが首を傾げると、アレックスだけでなく他の男たちまで笑い出した。

「姫。この手はもう、貴女自身のものではないのです」

そう言つて、横からソツとその手を取つたのは元教育係りの大神官だった。年老いた老人は、そのままこちらの手の甲にその萎びた唇を押し当ててくる。

「……せ、先生？」

「ああ。本当に美しい」

老人はやけに長いキスを終えても手を放さず、そのままこちらの手の甲をペロリと舐めてきた。

「きやああ!! な、何をなさるんですか!」

さすがのアンネローゼも、反射的に悲鳴を上げて手を引こうとした。しかしこちらの手首を意外な力強さで老人が掴み放さない。

「私はただ、自分が大金を払つて買った権利を施行しているだけです」

大神官はそれだけいとうと、鼻息荒くこちらの指にむしやぶりついてきた。目を血走らせたその姿に、いつもの彼らしい温和な知性は微塵も感じなかった。

「な、何を……何をおっしゃっているのですか先生。や、やめてくださいそんなこと——きやああ!!」

老人に掴まれている手を振り払おうと左手を上げたら、そちらもまた別の男に掴まれた。

「姫。私ももう我慢できないんですよ」

そう呟いた男の口に左手までもむしやぶられて、嫌悪感で背筋がゾゾツと震える。すると。

「うわー。やっぱデツケー」

その背中から幼馴染みの少年に抱きつかれ、ドレスの上から胸を鷲掴みにされていた。

「や、やめなさいアレックス! こんな破廉恥な真似をして、お尻ペンペンじゃ済まないわよ!」

こんな無礼を受けることなど、生まれて初めての経験だ。さすがに姫も頭に血が上り、激しく身体を捻りながら幼馴染みの手を払おうとした。が、その

両肩を名前を思い出せない元豪商に掴まれる。

「お姫さん。そんなことして、お尻ペンペンされるのはアンタの方やで」

「何を無礼な! 口の利き方に気をつけなさい!」

「無礼やない。これをよーみてみい」

でつぷりと太つたその男がかざしたのは、今回のオークションの出品リストだった。

「え? ええ!! こ、これは……」

その内容に、アンネローゼは両目を限界まで丸く見開く。先ほどのオークションで取引されていたのは、自分を反逆者の叔父から自由にするための権利

——いわば身代金のようなものだと思つていた。しかし実際は全く違つた。

アンネローゼを「性奴隷」として所有できる権利。それが六つの株に別けられて、競られていたのだ。そしてキールが落札した最後の株には、自分の処

女権——最初に犯せる権利が特典として付いていた。「う、嘘……でしよ……」

厳格だつた先生が、無邪気だつた幼馴染みが、命をかけて己を守るべき親衛隊員が、王家に忠誠を誓つていた上流貴族の男たちが——自分のことを性欲

の対象とみなし、あんな大金を払つてまでもそのおぞましい権利を買つたことが、ウブなアンネローゼにとつては何よりのショックだつた。

「ちゅーことや。だからワシも、お姫さまのこの綺麗なお顔を好きにできるちゅーわけや」

男はそれだけ言つと、アンネローゼの顎をいきなりその太い指でがっしりと掴んできた。

「い、いやッ! やめてください!」

一国の姫がそう哀願しても、男の指の力が弱まることはない。

「この美しさ。この気品。この透明感。ああ、ホンマたまらん。女神様や」

男は恍惚と目を細めながら、その脂ぎつた顔を急に近づけてきた。その唐突さに驚いて、アンネローゼの動きが止まつた時——むちゅうう!

唇がきつく重ねられた。

アンネローゼのファーストキスだ。

(う、嘘でしよ!)

将来の夫のために、誰にも許したことがない唇を、名前も思い出せない庶民出身の中年男に奪われてしまつた。

「姫、私はこちらを楽しませてもらいますよ」

新たな声が後ろから聞こえたと思つたら、ボロボロになつているスカートの上から尻を掴まれた。五本の指でしつかりと臀部の丸みを覆い、掌全面でヒップの形を味わつているそのいやらしい手つきに、

「ツッ!! い、嫌ッ! 今すぐ私から離れなさい!」

鋭い非難の叫びが口をつく。しかし自分に群がる男たちの蠢きは止まらなかつた。

手の指をかつての教師に次々としやぶられ、両胸は歳の離れた弟のように可愛がつつた幼馴染みに揉みしだかれていた。尻や足や脇までも名前も思い出せない男たちに撫で回され、きつく閉じ続けている唇も元豪商に舐めまわされている。

しかもそれを、大会議場を埋めた多くの人たちに見られていた。

(信じられない……。こんなこと……)

精神的なショックが大きすぎて抵抗の動きが止まつてしまつた姫の口内に——ぬるるん!

中年男の長い舌が入り込んできた。

その分厚い肉片はすぐにこちらの舌を舐め、ヌルヌルと巧みに絡みついてくる。

「んんんん!!」

その瞬間、今まで経験したことのない感覚がゾク



ツと後頭部から背筋まで駆け巡り、棒立ちになつていた全身がビクッと震えた。

「ひひひ。どうしたんですか姫？ 気持ちよくつて身体がビクビクしてますよ？」

「ち、違ッ!? こ、これは——んんんっ!?」

「んはあ。姫え。ワシがちゃあ〜んと、キスの仕方から教えてあげますわ」

（……い、嫌！ こんな嫌!）

我に返つたアネローゼは全身をムチャクチャに動かして、自分の身体に群がっている男たちをなんとか振り払おうとした。が、興奮しきっている男の群れに、女一人がどれだけもがこうとも無駄だった。

「いつまでお姫さまぶるつもりだ？ お前はもう、私たちの牝奴隷なんだぞ？」

「大人しくしてない、お尻ペンペンだよ？」

首輪から伸びている鎖を掴まれて抵抗を封じられながら、身体中を男たちに弄られ、服から露出しているところは、万遍なく舐めまわされる。

「皆、もう味見は済んだでしょ？ そろそろ僕にやらせてよ。ほら、そこに転がしてさ」

キールの声に男たちは顔を見合わせた。そして悲鳴を上げるアネローゼにお構いなく、金で買った姫奴隷を絨毯の上に押し倒す。

「許してください！ これ以上、酷いことしないでください！」

目尻に涙を浮かべながら哀願しても、自分を取り囲む男たちは手足を放してはくれなかった。それどころかアネローゼの涙を見て、その顔にますます色濃く猥欲と征服欲を滲ませている。

「ひひひひ。たまらないなあ」

すると足元の方から、一際下卑た声が聞こえてきた。視線をそちらに向けると、キールが下半身裸になつて、自らの股間から屹立するものを扱っていた。

「きゃあああああああ！」

初めて目にする勃起した男性器のグロテスクさに、脳天を殴られたような衝撃が走る。

「そんなに怖がらないでよ。今からコレで、姫をた〜つぷりと気持ちよくしてあげるんだからさあ。ひひひひつ。何しろ姫に尽くすのは、親衛隊員の役目だからね」

キールは絨毯の上に両膝をつくど、ポロポロのスカートを持ち払い中のショーツに手をかけてくる。

「ツツツツ!? だ、ダメ！ 嫌!」

絶望的な状況だということはおわかつているが、それでも必死に身体をもがかせ、逃げようとする。

「抵抗されるのもコーフンするなあ」

しかし六人の男たちの手から逃れられるわけもなく、あっさりとしョーツを脱がされて、両脚を大きく開かされてしまった。

「へえ〜。姫つておっぱいはこんなにおっきいの、こつちの方は随分と可愛いんだ」

キールの言葉にカッと顔が赤くなる。アネローゼの股間は、陰毛が淡く大陰唇もびつちりと閉じていて、見た目は子供のようだった。

その縦筋一本の女性器を至近距離から覗き込むようにキールが顔を近づけてきて、姫はあまりの恥ずかしさにガムシヤラに頭を左右にブンブンと振る。

「い、嫌！ 見ないで！ 見ちゃ〜つくひい!」

しかし突然、己の股間から稲妻のような衝撃が脳天にまで突き抜けてきて、激しく左右に振つていた顎を真上に大きく仰け反らせてしまう。

（な、何？ 今の……何なの？）

ウブな姫には、今、自分の身体を駆け抜けた衝撃が何なのか、すぐには理解できなかった。が。

「ああッ！ 嫌！ な、何コレ!? あああッ！ な、何してるの？ まさか舐めてるの？ ら、らめえ！ いったいどこを舐めてるのおおおおッ!」

クリトリスから迸ってくる衝撃——それは明らか

に快感だった。その初めて知る肉悦のため、拒否の叫びが露骨に震え、顎も仰け反りつばなしである。

「いやああ！ こんな嫌あああああ!」

この快感は、本来愛する人によつて与えられるモノのはず。そして自分が今、晒しているこの姿は、その愛する人しか目にしてはならないはず。

それをこんな場所で……。自分に仕えていた男によつて、国中の貴族たちの目に晒されている。

その現実を認識した瞬間、目の前が真っ暗になるほどの絶望感に襲われた。しかし——。

「んはあああああ！ らめえええ！ ああ！ こ、こんなの、らめなのがいいいい!」

その絶望感が暗ければ暗いほど、クリトリスから迸ってくる愉悦の閃光が輝きを増す。身体的全細胞が煮え立つような肉悦を感じてしまう。

「ひひひ。もうビッショびしょ。そろそろ二千万レニーのお宝をいただきたいちやおうかな」

そうキールが口にしたセリフも、クリトリスに対する一点集中の責めがやみ、やつと一息つけたアネローゼの意識には届いていなかった。が。

ぬぬぬつ。

「くひやああ!」

牝芽の下にある割れ目に、灼熱の肉棒が押し当てられて再び意識が引き戻される。

「クソおッ! キールみたいな奴にツツ!」

そんな中、一階席から一際大きく響いた声に思わず視線を向ける。と、先ほどキールと自分の処女権をかけて競っていた男が、悔し涙を流していた。

「私が……私がかろういしい家に生まれていれば……姫をその場からお救いできたのに……」

アネローゼが最初に考えた通り、彼だけは親衛隊員として自分を本気で救ってくれるつもりだったのかもしれない。しかし、現実はいかに残酷だった。



守るべき市民たちの前で  
公開輪姦される妖狐！

高气高き  
悦獄に墮ろ  
妖狐は

第四話  
背徳の妖狐公開屈服

あらいゆう  
小説 NOVEL 新居佑  
挿絵 ILLUSTRATION sian



登場人物紹介



綾辻藤香

最強の妖魔として君臨していた妖狐が転生した姿。現世では綾辻家の当主となり、前世と同様に圧倒的な力を持つ。



村里章伯

綾辻家当主だった綾辻章伯が現代に転生した少年。現世では藤香のお側付き兼恋人として支える。



妖魔側についた陰陽師。前世の頃から藤香に邪な思いを抱いており、いまだにつけ狙う。

前号までのあらすじ

章伯を救うため、再び法限のもとへ向かう藤香。しかし、巨大触手による陵辱で媚薬付けにされている彼女は、格下妖魔相手に犯されてしまい、屈辱の産卵絶頂に導かれてしまうのだった。

「桃尻の上からは、こちらも獣の尻尾が合計九本もふわりふわりと、悠然と宙を舞っている。『藤香様だっつ！ やったぜ、これで妖魔もおしまいだ！』  
「ああっ、いつもながらお美しい。さすが俺たちの女王様。今度こそ、俺、踏みたい」  
その切れ長の瞳や自身に満ち溢れた雰囲気、他を寄せ付けない圧倒的な戦闘力をして、藤香は人々から『女王さま』と『藤香様』と呼ばれ、絶大な信頼を受けている。  
「つい先ほどまで妖魔に恐れおののいていた民衆たちは、妖魔に殺然と立ち向かう藤香の背後から熱烈な声援を送っている。  
そしてまた藤香自身も、そんな声援に応えるように、女王然とした優雅で鮮烈な剣技をもって、妖魔を瞬殺する……それが普段の状態ならば。  
「くうっ、ふ……っ。この……っ！ ううっ……っ」  
椿の太木が化物と化した妖魔・古椿の攻撃は体中から生えた長い枝を、まるで触手のようにしならせてくるものだ。  
妖力自体も低級にランクされ、かつて九尾の妖狐として、妖魔の頂点に君臨した藤香とは、文字通り天と地ほどの実力差が存在する。  
しかし、古椿が仕掛けてくる何本もの触手鞭を、藤香は握った刀で受け止め、弾くのが精いっぱい、攻撃の糸口さえ見いだせない。  
「く……、どうだ？ 妖魔、そして退魔師の頂点から低級妖魔以下のレベルまで突き落とされた気分は？」  
脳内に響いてくるのは、憎き陰陽師・法限の声だ。男はどこか離れて、この現状を見つめながら、陰陽術によって、藤香の脳内への語りかけてくる。  
藤香の愛する少年・章伯を人質にとられ、あげく、藤香がその身に宿していた絶大な妖力を、妖魔の卵

時刻はちょうど真昼を過ぎ、降り注ぐ明るい太陽の日差しの下、街の中心地である繁華街は、大型連休を楽しむカッパルや家族連れ、友人たちの輪で賑わいを見せていた。  
繁華街には、市民たちの憩いの場である大きな公園が隣接している。そこでは、今まさに人々の感情を昂らせる、一大イベントが幕を上げていた。  
「ふん、たかが低級妖魔風情が凶に乗らないことね。この綾辻藤香様がいる限り、人々に危害を加えさせはしないわ！」  
当代最強の女退魔師にして、千年前に都を震え上がらせた九尾の狐の生まれ変わりである藤香。  
彼女は突如として人々の前に現れた体高三メートルはあろうかという巨木の妖怪・古椿。その前に颯爽と現れると、凛とした強い名乗りを上げた。  
その出で立ちは、誰もが見惚れるほどのムチツとしたグラマラスボディを、ピッチリとした扇情的な退魔スーツで包み込んでいる。  
ところどころ露わになった艶めかしい白い肌とともに、美麗な細面の頭部からは、ふっさりとした二つの獣耳がピンと立ち上がっている。  
ポリリウム感満点の美巨乳に全くひけをとらない、

を強制出産させられた際に、ほとんど根こそぎ奪われてしまった。  
下等な妖魔・狒々たちによる輪姦、そして非道な出産アクメ快感を連続して何時間も叩き込まれ、無様なアヘ顔を晒してしまった藤香。  
自らの汁まみれのまま、絶頂痙攣に震える身体を山中に放置されていた彼女は、時機を見計らって現れた陰陽師・法限によって街へと連れてこられた。  
そこで男は、自らの配下である雑魚妖魔を召喚し、手負いの藤香に、市民たちの前で戦うことを強要したのだ。  
（自分が妖力を奪って置いて、よく言うわ。それでも章伯を救うためには、私は負けられないのよ！）  
千年前、自らの野望を打ち砕いた藤香に対する復讐を、市民たちの前で敗北という形で果たしたいという法限の狙いは、悔しいほどにわかる。  
しかし一刻も早く憎い陰陽師・法限を殺し、囚われの章伯を助けたい。そのためには、法限の隙を見つけ、力を取り戻さなければならぬ。  
「頑張れ、藤香様！」  
「そんなやつに負けるんじゃねえっ！ 俺たちが応援しますよおっ！」  
退魔師・藤香を尊敬する人々の応援の声が届く。  
つい先日までは、人間に転生しながらも最強を誇る自らの実力を、奥手の章伯に認めさせるためだけに、人々の声援を利用して来た。  
しかし章伯に対しての愛情を、人としての感情を育むうちに、彼らもまた藤香の大切な、守るべき者となっていた。  
（そうよ、だから私は戦うわ。こんな、卑劣なことには屈するもの……あう、ですかつ！）  
人々の声援に、藤香は戦う意志を、身体に深く刻みつける。  
しかし、その表情はいつもの飄々とした余裕のあ

「ああっ、いつもながらお美しい。さすが俺たちの女王様。今度こそ、俺、踏みたい」  
その切れ長の瞳や自身に満ち溢れた雰囲気、他を寄せ付けない圧倒的な戦闘力をして、藤香は人々から『女王さま』と『藤香様』と呼ばれ、絶大な信頼を受けている。  
「つい先ほどまで妖魔に恐れおののいていた民衆たちは、妖魔に殺然と立ち向かう藤香の背後から熱烈な声援を送っている。  
そしてまた藤香自身も、そんな声援に応えるように、女王然とした優雅で鮮烈な剣技をもって、妖魔を瞬殺する……それが普段の状態ならば。  
「くうっ、ふ……っ。この……っ！ ううっ……っ」  
椿の太木が化物と化した妖魔・古椿の攻撃は体中から生えた長い枝を、まるで触手のようにしならせてくるものだ。  
妖力自体も低級にランクされ、かつて九尾の妖狐として、妖魔の頂点に君臨した藤香とは、文字通り天と地ほどの実力差が存在する。  
しかし、古椿が仕掛けてくる何本もの触手鞭を、藤香は握った刀で受け止め、弾くのが精いっぱい、攻撃の糸口さえ見いだせない。  
「く……、どうだ？ 妖魔、そして退魔師の頂点から低級妖魔以下のレベルまで突き落とされた気分は？」  
脳内に響いてくるのは、憎き陰陽師・法限の声だ。男はどこか離れて、この現状を見つめながら、陰陽術によって、藤香の脳内への語りかけてくる。  
藤香の愛する少年・章伯を人質にとられ、あげく、藤香がその身に宿していた絶大な妖力を、妖魔の卵

るものではない。

普段きりりとした細い眉は、わずかに垂れ下がり、どこか弱々しきを感じさせる。戦闘が始まってから、まだ間もないというのに、肉感的なボディラインの上には、大粒の汗が浮かび、流れ落ちている。

しっかりと地につけていなければならぬ、むっちりとした両脚も内股気味で、まるでなにかを必死に耐え凌ぐかのように、時折ブルブルと小刻みに揺れている。

「ギイイイッ!!」

すると、巨木の中心に大きな口を浮かび上がらせた古椿が叫んだ。同時に十本以上の触手を一斉に振り上げ、藤香目がけてギギュンツツ!! と叩きつけてくる。

「くっ、この程度の雑魚妖魔……っつ! うくっ、ひいううっ! んんんっつ!!」

握った刀に、最強であった退魔師・綾辻藤香の矜持を込め、ギンツツ!! ザヴツツツ!! と目の前の触手の群れに向け、美しい剣閃を描く。

しかしその力は、妖力をなくす前とは比べ物にならないほど弱体化していた。かつて撫でるだけで一掃できていたであろう触手たちは、わずかに怯んだだけで、ウネウネと不気味に蠢いている。

「ど、どうしたんだ。藤香様!!」

「いつものサービスタイトやってやつだろ? 俺たちの女王様が、こんな妖魔に負けるわけねえよ!」

周囲から飛ぶ楽観的な声を、藤香は軽く受け流すことなく、すでに肩で息をしている背中で、痛いほど真剣に受け止めていた。

「はあああ……っ。くっ、私がこんなやつに……っ。法限めえっつ……んおっ!? こ……ふううっつ!!」

ヴヴヴツツツ! ヴイイインンンツツツ!!

妖力の思った以上の減少に毒づいていると、突如、股間で生まれた甘美な違和感とともに、藤香の両脚

がビクビクと切なげにわなないた。

背筋がビクンツツ!! と大きく揺れ、まるで金縛りにでもあったかのように、藤香の肉体がその場で立ち止まってしまふ。

「ふふ、妖力に頼れないからといって、迂闊に身体に力を入れない方がいいぞ? そのパイプが余計暴れてしまうからなあ!」

「わ、わかっている……わよっ! こっ、ほおおっ……くっ、誰がこんなものに負けるもの……んふうっ、ですかあっ!!」

頭に響く法限の声に、苦悶の表情を浮かべながら言い返す。

「こ、この……パイプっ。さつきから私の感じるところばかり弄って……あんんっ、こんなんじや、脚に力が入らない。わよっ。んおおうっ!」

丈の極めて短い退魔スーツのスカート内側、陰部と肛門にまで侵入してきた魔性の淫具。それは囚われの藤香に、法限が埋め込んだパイプだった。

一般的な男根ほどの太さと長さを備え、まるで意思を持っているかのように、藤香の二穴の弱い部分を連続してまさぐってくる。まさに妖魔パイプとも呼ぶに相応しい玩具だ。

「こい、つつつ! ふうっ、はあああ……んくううっ!!」

何本も同時に襲い来る触手たちを、術を用いない剣戟だけで打ち払うしかできない。だが、体捌きで特に重要な下半身に力を含めれば、それだけ妖魔パイプを刺激してしまう。

しかも藤香自慢の退魔スーツの裏地にも、まるでイソギンチャクのような淫魔触手が、みっちり生えそろう、藤香の全身をウネウネサワサワ、ギチュギチュと淫らに愛撫してくるのだ。

（身体だけじゃなく、人のスーツまで好き勝手に……。こんなの、ただの変態スーツじゃないっ。

あっ、あううっ)

数時間前に受けた、法限による淫らな肉体改造によって、藤香の豊満な肉体の性感は何倍にも引き上げられ、常時発情させられている——当代最強の退魔師である藤香の強靱な意志でなければ、とくくに性奴隷に墮ちていても不思議ではないほどの状態にある。

藤香のプライドそのものといえる理性の枷によって、どうにか抑え込んでいた性欲を解放させるのかのように、二種類のいやらしい淫具は、法限の悪意によって、イボイボだらけの全身をブルブルと激しく震わせる。

そしてそれは、ただでさえ弱っている藤香の戦闘力を、さらに減退させることに繋がっていく。

ヴヴヴツツツ! ヴイイイイッ!

まるで肉棒を二本無理やり挿入させられているかのようにだった。しかも休まることのない強制発情によって、藤香の淫らな肉穴は、グジュグジュと膣と腸の牝壁をうねらせている。

ムチリとした両脚の付け根の股間部の蜜壺と菊穴に、ズッポリと突き込まれた妖魔パイプが振動し続けるたびに、滲み出る発情牝汁がとろりと、藤香の太腿を伝い落ちていく。

「はあああ、私のスーツが……っ。乳首を舐めて、ああっ……全身が、熱いっつ!」

退魔師としての理性とプライドだけが先走るが、すでにたつぷりと媚薬を練り込まれ、牝奴隷への下ごしらえを施された魅惑の肉体は、藤香の意思を反映させることができなほどに熟れ、情欲していた。

しかも淫らな責めを強いてくるのは、愛用の退魔スーツの内側からもなのだ。

ギチュギチュツツツ! スブンツ、ヌロオオツツ。

右手に刀を握りながらも、お尻をくんっつと後ろに突き出すような、官能的な姿勢をとってしまう。



「は、早く構えないと……っつ！ ああつ、でもパイプがこんなにすごいなん……っ。おおつ、くうつ、みんなが見ている前で……っ）」

退魔スーツの上からでもうっすらとわかるくらいに、二つの乳首が勃起し始め、美麗な唇から、甘く艶やかな吐息が間断なく漏れている。

「な、なあ。今日の藤香様、いつもよりやけにエロくないか？」

「あ、ああつ。けどそれがいいんじゃないか。最後はいつも通り、ピシッと決めてくれるさ」

官能を必死に耐える藤香の違和感は、市民たちにも伝わっていた。しかし誰もそのことを深刻には考えなかつた。それがこれまで藤香が築きあげてきた、民衆たちへの絶大な信頼だ。

その想いを背中に強く感じるからこそ、誇り高い藤香の羞恥心が、余計熱く燃え上がってしまう。

「くく、随分と信頼されているのだな。ほら、どうした？ 女王様がこれしきの快感に悶えていてもいいのか？」

「だ、黙りなさいっ！ うつ、くうつ！ 私は最強の退魔師……なのよ！ ひううっ！」

触手スーツは勃出した二つの乳首に、スライムのように張り付き、真っ赤に充血した乳頭はおろか、母乳が噴き出る乳腺にまで細い触手を無理やり侵入させて、女の快感を直接神経に伝えてくる。

股間のパイプも、初めよりさらに墜と尻の奥へと押し入ってきている。たった一歩ステップを踏んだら、身を捻ったりするだけで、肉棒を子宮に一突きされたかのような官能が、下半身全体に走り抜ける。

（ま、まるで犯されながら戦っているみたい……っ。こんなんじや、身体が疼くばかりだわ！）

もし法限が、市民たちがいなければ……藤香が退魔師でなければ、この全身を炙る官能の炎に、とっくに屈して、無様なアクメ顔を晒していただろう。

しかし、それだけではできなかった。この街を、市民を守ることが、退魔師の使命。それは愛する少年の願いでもある。

（私は負けない……。負けてたまる……おおつ、だめ……気持ちだが、昂らされて……ああつ！）

藤香の事情など気にする必要もない妖魔・古椿が、再び触手の群れを振り上げてくる。藤香は反射的に刀を振りかざした迎撃姿勢をとる。

だが、藤香がまどわされているのは被虐の退魔スーツだ。

普段は衣擦れにすら気にしないほどの動きでも、裏地全面を触手に覆われている状況では、脇や太腿腰などから、たまらないほどの快樂電流が迸ってしまう。

「しまっ……くつ、ううっ！」

振り下ろされる無数の触手に、発情を余儀なくされた過敏な身体が、わずかの抵抗もできず、無様に巻き取られる。

愛刀が、力なく地面に落ち、十数本もの触手枝が、藤香の豊満な媚態をきつく締め上げていく。元が巨木の妖魔のため、触手の表面には細かなさざくれが毛羽立っており、まるで柔肌全体をきつく愛撫されているかのような感覚に陥ってしまう。

しかも、自慢の美巨乳は両側から∞字に締め上げられ、細いウエストや股間にまで縄のように通つた触手は、まるで女性をいたぶる亀甲縛りのような緊縛を強いている。

ギチッ、ギチチイイッ！！

「こ、こんなこと……で……っ。ああつ、やめ……おおっ！」

むっちりグラマラスな肢体が、いやらしいミチミチとした音を立てる。

改造スーツによる内側からの愛撫だけでなく、拘束された枝触手がギチギチと女体を締め付けるだけ

で、全身に甘美な閃光が迸る。

ただでさえ豊満でエロティックな肉体を持つ藤香の緊縛姿勢と、それでもなお、どうにか抵抗しようとする姿は、市民たちの奥底に眠る被虐心を刺激するほどに、悩ましい姿を晒している。

（この私が、こんな妖魔になんて格好を……。く、悔しい……っ！）

藤香がいくらきつく歯を食いしばっても、妖力を奪われ、強制発情も追加された力の入らない身体では、低級妖魔の触手すら解くこともかなわない。

「と、藤香様!! もう苦戦するフリはいいですから、そんなやつ早くやつつけちゃってくださいよ！」

市民たちもいよいよ加減この苦戦が、圧倒的な戦力差からくる、いつもの演出ではないことに気づき始めていた。

それほどまでに藤香の肉体からは、隠しきれない官能が溢れ出している。

（ま、まずいわ……。これ以上みんなの前で恥ずかしい真似はできない。ここは無理をしても、こいつを倒すしか……んあつ、あ、あああつ!!）

リスクを覚悟で、弱小妖魔に攻撃をかけようと、パイプや触手の刺激が強くなるのを承知で、地面の刀に手を伸ばす。

ムチツとした太腿をギチイイッと沈み込ませる。触手に絡まれる中、苦悶しながらもしゃがみこむ姿は、その真剣さと比例するように、牡を虜にする魅惑的な輝きを放っていく。

ギチギチ、ピチピチという艶っぽい音が響き、股間や全身から溢れ出すより強い快感に、思わず淫靡な声漏れ出そうになる。

（あつ、あんつ！ 気持ちいい……けど私は、負けない……！ 負けないわよ！）

いまだ消えない退魔師としての誇りを力に、必死に嬌声を押し殺し、落ちた刀に手を掛ける。

だがその行為をあざ笑うかのように、古椿の触手の一本が、ブンッ！と大きくしなり、振り上げられたかと思うと、ようやく刀を手に取った藤香の背中越しから、股間へ向けて思い切り急降下してくる。パチッ！パチィィンンンッ！！

「なっ、まさか……ひいぎいっつ！ほ、おおおっ！！んおおっ……こん、なああっ！！」

まるで容赦のない触手枝の一撃が、股下で蠢く二本のパイプへと直撃する。

熟れた下半身からの甘い衝撃に、これまでギリギリのところまで快感を抑えていた藤香が、座った状態から一気に背筋を伸びあがらせ、悶絶したようにビクビクンッ！と全身を震わせる。

唇を思い切り噛んで声を絞るが、漏れ出た音にはもう隠しようのない情欲の野太さが混じり、退魔スーツの上からもわかるほど両の乳首がピンッ！と勃起する。

それまで乙女っぽくキュッと締め付けていた内股が、ガクガクと左右に震え出し、生暖かい本気汁が目に見えて両脚を垂れ落ち始める。

「こんな……パイプが奥までえっ！！攻撃、しなれば……ほ、おおおんっ！ダメよ、みんなの前で感じるなんて……っつっ！！」

ただ責められ、悶えさせられるのではない。守ると決めた大切な人たちが、自分を信じて応援してくれる人たちの前で、イカされようとしている。

「私はみんなの女王！絶対に負けてはいけないのよ……んおおっ、ああっ……絶対にいいっ！」

人々は自分を無敵の女王様として、認め見つけている。そんな市民たちの前で、こんな弱小妖魔に敗北を喫するだけでも、屈辱だというのに、このままでは……。

しかも触手は、どうにか快感を堪えている両脚を左右に引つ張り、後方の市民たちに藤香のスカート

の中身を見せつけようと、彼女の上半身を前へと倒しにかかってくる。

「な、なんだ……ア、レ……？」

「パイプが、二本も!?……ダメ、見ちゃいけませんっつ！」

首をひねってわずかに顧みた人々の顔は、湯気が立ち上がるほどに熱い本気汁を垂らしながら、不気味な妖魔パイプを深々と呑みこんだ牝穴と尻穴を向けた藤香への絶望と蔑みの表情だった。

「くく、いい格好だな藤香」

「あ……、そんな……。み、みんなに見られ……違うの……これは……っつ！」

これまでいかなるときも、高慢かつ尊大な態度を崩さなかった藤香の表情が、一気に恥辱の赤に染まる。

めくれ上がったミニスカートからのぞく、淫靡極まりない妖魔パイプの蠢きを、市民たちに注視される。

そのことが完全女王氣質だった藤香の心に、強烈な羞恥の感情を植え付けていく。

「ギンシャッ、キンシャアアアッ！！」

ズチヨズチヨツツ！ジュブウウツツ！！

真つ赤に頬を染めて、抵抗どころではなくなった藤香に、妖魔がこれ見よがしに攻撃を仕掛けてくる。肢体に絡んだ触手を一層強く締め付け、藤香の凹凸豊かなボディラインを、よりエロティックに強調し、市民たちに見せつける。

さらには触手で器用にパイプの柄を掴み、ジュボジュボツツ！と淫らな突き込みを披露し始める。

「んおおっ、そんな……こんな低級妖魔なんかにつみんなの前で、ほおおっ……見てはダメよっ。目をつむってなさい、くおおんっ！」

触手がもたらすパイプの淫らなピストン運動は、さらなる爆発的な快感を呼び、藤香の言葉はいやら

しすぎる牝の太い嬌声へと変換される。

二本のパイプが、充血し膨れ上がった肉花弁を押しつけながら、二穴の奥から入り口までを行き来する淫靡極まる様は、藤香の羞恥の命令とは反対に、応援していた人々の網膜へと焼き付けられていく。

「み、見るなって言われても……。藤香様……エ、エロすぎるぜ……っ」

「だ、ダメだつてわかつてるけど、目が離せないよな」



を民衆に向けさせられた屈辱にあつても、常時発情を強制させられている変態ボディは、藤香の誇り高い心に、より深いDMの快楽を植え付けていく。

つい数日前まで最強を誇った女退魔師は、憎むべき陰陽師、そして守るべき市民たちに、たつぷりと視姦されながら、弱小妖魔に嬲られ、感じていく。

「お前の痴女っぷりが、市民たちにも知れたところで、まずはその心に思い知らせてやろう。今のお前は最強退魔師ではない。一匹の牝狐だということをな！」

ヴィイインソングアアアアツツ!!

「なっ!? んほおおっつ! これ以上は本当に……ひぐうっ!!」

頭に響いた法限の声とともに、二穴に挿入されたパイプが振動を一気にはね上げる。退魔スーツ内の触手も、まるで吸い付くようにギュブギュブと乳首や臍、わきの下などを責め始める。

妖魔・古椿もさらに緊縛の力を強め、同時に藤香の両脚を思い切り開脚させ、尻を突き出させる。

「う、おっつ。藤香様のマンコが……丸見えにっ」「応援しなきゃいけないけど……ケツの穴までくつきりと……す、すごい」

これまで神のように崇めてきた女退魔師の決定的なエロピンチに、男たちの牡本能が強く激しく揺さぶられる。

その淫欲に駆られた視線は、快楽と戦う藤香の自尊心を侵食し、より性感を高めてしまう。理性では否定したいのに、膣と尻からくるパイプ官能が頭から離れなくなっていく。

触手に拘束され、ピチピチ、ギチギチといっている自身の身体が、とてもいやらしいものに感じられ、そんな敗北寸前の媚態を見られることに、信じられないくらい興奮していくのを自覚させられていく。

（ちが、ううっ。私はマゾなんかじゃないわっ。こ

んな情けない格好見られても、恥ずかしいだけ……気持ちよくなつて……えっ）

身体の奥底から湧き上がり、今や全身を覆い尽くそうとしている桃色の、倒錯した被虐感を払しょくしようと、首をブンブン振りたくる。

しかし同時にそれは余計緊縛を強める結果になり、触手縄で締め付けられ悶えている自分が、たまたらく淫靡な存在に思えてくる。

その墮ちゆく心を見透かすように、古椿の触手鞭が全身をきつく打ってくる。

バシイソツツ!! ピタアンピタアンソツツ!!

「ふうああっ。やめなさ……ああっおっつ、おっつおんんっ!!」

股間のパイプだけでなく、スーツを押しあげるように勃起した乳首に、張りつめた爆乳。大きく突き出して、甘美に震えるお尻や、肉厚の太腿などにもたらされる強い痛みは、すぐさま魅惑の快感へと変わっていく。

ぶたれた衝撃で、被虐退魔スーツがビリィイソツツ!! とところどころ破け散り、藤香のきめ細やかな肌が、完全に性欲によって上気した姿を、市民たちの前に晒してしまう。

そしてその背徳的な快感の誘惑に引つ張られる理性は、弱小妖魔に打たれ続ける自身の姿に、明らかに性的興奮を見いだしていく。

（気持ち……いいいっ。みんなの前でぶたれて、パイプ嵌めるとこ見られるのが……たまらないわっ。私、どんどん変態にされていくっ!）

自分の中にDMの官能が目覚め始めていることを意識させられた藤香は、すでに戦いに完全に集中することはできなくなっていた。

むしろこのまま敗北すれば、どれだけの人から馬鹿にされ、蔑まされるのかと思うと、妖狐のプライドを完全に打ち砕いてほしいという、屈辱的な考え

さえ脳内に浮かばされる状況に陥っている。

「ついに自分はマゾ牝狐だと自覚し始めたな。そろそろイクがいい、九尾の藤香。守るべき市民たちの前で、女王様のアクメ面を見せてやれ!」

ヴィイソツツ、ヴヴヴヴヴソツツ!!

法限の言葉が終わらぬうちに、これまで最高だと思っていたパイプの振動が、さらにもう一段跳ね上がる。まるでドリル掘削機のように、子宮口と直腸最深部を徹底的に刺激してくる妖魔パイプの前に、藤香の尻がエロティックに跳ねる。

「おっほおっつ! ぎいいいんんんっつ!!」

子宮と直腸を襲う鋭い衝撃は、脳天まで駆け抜けて、藤香の誇り高いプライドを粉々に打ち砕く。

（こんな……ダメよお。気持ちよすぎて、我慢できな……っ）

快楽の前に崩れ落ちそうな理性が、周囲で見つめる市民たちの視線を捉える。

「ほ、本当にイクのか!? 俺たちに見られながら? 嘘だろ!」

「人前でイクなんて、私には耐えられないわ。藤香様って実は真性のマゾだったのかしら?」

人々の視線は、冷たくそして黒い欲望に満ちていた。誰もがすでに正義の女退魔師の陥落を諦めと切望の眼差しで見つめている。

（ちがう、私は負けないわっ! 負けたら墮ち……ああ、墮ちたらもうっ! 気持ちよ……ダメダメ、そんなの許さな……あああっつ!!）

戦士の誇りが、マゾの快感に吞まれ、敗北する様を自ら想像し、感じてしまう。

決して認めたくない己の牡本能のあらわれに、しかし藤香の肉体はそれを我慢する限界点を、とうの昔に超えていた。

ドビュオオオツツ！ ドブドブツツ！

なおもギリギリのところまで粘る藤香の理性に引導を渡すように、妖魔パイプの先端から濃密な媚毒液が、子宮内と直腸に大量に噴射される。

瞬間、燃えるマグマのような爆発が下半身で炸裂し、菌を食いしばって快感に耐えてきた藤香の唇が大きく開かれ、我慢に我慢を重ねてきた絶頂敗北を、自らの言葉で宣言する。

「熱い！ 熱い！ だめええつ、悔し……んおつ つつ、ほおおおおおつ つつ！！ イクツ！ 私イクツツ！ みんなの前で、イッグウウウウウウツツ！！」

市民たちの前で完敗という屈辱が、感じたことのない快感に変わるのには、ほんの一瞬のことだった。「おおおつ、おほおおおつ！ ほおおおおんつ！！」

軽く白目を剥き、獣耳と尻尾を生やした姿に相応しい発情した牝の嬌声を辺り一面に響かせる。

ピンッ！ と逆立ち、ブルブルと震える九本もの尻尾も真下では、ウネウネと艶めかしく蠢く二穴の表皮が、大勢の市民たちの目の前に晒され、ゆだつた絶頂汁が、プシュプシュ！ と地面に噴出している。

「あ、あへ……あああつ。んおおおつ」  
触手に拘束されたまま、藤香は軽く白目を剥いて、野太い声を吐き出していた。

剥き出しのお尻、その二穴に突き込まれたパイプの隙間からは、ジュブジュブと絶頂蜜液が溢れ出し、地面に淫らな水たまりをつくっている。

「と、藤香様が負けた……。しかもあんな無様なアへ顔晒して……」

すでに触手の拘束を解かれ、まるでカエルのような無様な姿勢で、地面に投げ出されたまま、尻を高々と突き上げ被虐絶頂に酔いしれている姿を見つめる

市民たち。

そこに生まれた疑念と、牝の本能の昂りをさらに増長させるように、悪の陰陽師が姿を現す。

「ふふ、ようやく気づきましたか。そうです、この女は人間の退魔師のフリをしています、かつて都に仇なした九尾の妖狐の生まれ変わりなのです。善良なみなさんは、今までこの女狐に騙されていたというわけですよ」

藤香が知る声色とはまるで正反対の、怖いくらいにこやかな声で、法限は市民たちに声をかけた。法限は、洞窟でのサラリーマン風のスーツ姿ではなく、見るからに位の高そうな豪華な陰陽服を身にとっている。

何者かと驚く民衆たちに、法限は決して藤香には見せない、穏やかな表情で、自分は高名な陰陽師であると告げた。そしてこの戦いは、藤香を倒すために自分が仕組んだものであるということも。

市民たちも、突如現れた法限の、外見だけはそれらしく見える立居振舞に、強い説得力を与えられてしまう。

「お、お前……つ。くつ、法限。なにをいったい……んほつ、あひつ……やめ、んおおおつ！！」

強制アクメの余韻に晒されていた藤香が、善人ぶる法限を睨みつけようとする。しかし、法限に膣穴と尻穴のパイプを握られ、もう一度最奥まで突き入れられたかと思うと、そのまま一気に二本とも引き抜かれてしまう。

いまだ絶頂に震える肉壺に生えそろうた牝ヒダをズリユズリユウウ！ という淫らな音を立てながら、力任せに刺激され、藤香は再度、無理やり昇天させられる。

「イイクツ……あああつ。パイプうつつ。この……人をオモチャみたい……またイグウウウツ！！」  
プチュウツ！ と抜け出た二本のパイプからはプ

く〜ンツとした、藤香の濃いエクスタシーの臭いが染みついており、周囲の人たちに、藤香の感じっぷりを知らしめる。

「ふふ、本当の正義のヒロインが、こんなパイプを仕込んで戦いますか？ この女はこれまでずっとこうして戦いながら、あなたたちを自らの快感を高める道具としてきたのです」

「ちが……。ううつ」

自らのプライドを守るため、即座に違うと言いたかったが、なぜかその言葉を発するのをためらってしまう。

（私は戦いながら、みんなに見られて感じて……。くう、疼く。身体が火照りが……。収まらないわつ）  
正義の退魔師の誇りを完全に汚され、市民たちの前で淫らな女の烙印を押されているのに、なぜか胸がドキドキと高鳴ってしまう。

そしてそれに呼応するかのようになり、いつたばかりの膣と尻の奥がビクビクとわななき、下半身をツーンという、どうしようもない性的な疼きが再び襲う。発情状態の藤香が放つ、むわつとした強烈な淫気に、市民たちの顔に牝の気配が浮かび上がってくる。その様子が、藤香の心をさらに深い羞恥へと追い込んでいく。

「た、確かに……。これじゃまるで、ただの変態だ……。ゴクリ」

「ああ。拘束されてもイキまくってる姿なんて、発情期の牝狐そのものだけ。本当に藤香様は……」  
「まだ信じられない方もいでしょう。なにせ相手は九尾の妖狐ですからね。騙されたのに気づかないのも無理はありません。ですから……。ぬんっ！」

法限が陰陽の呪印を空中にきると、それまで妖魔・古椿だったものが、瞬時に、別の拘束具へと姿を変える。

「な、なによこれは……?! これじゃまるで本当の



罪人みたいじゃない?! んんっ、う、動けないっ!」  
藤香を新たに拘束したのは、木製の枷だった。まるでギロチン台の拘束具を思わせるそれは、退魔スーツが半ば破れた藤香の肉感的な肢体を、後背位のようなドッグスタイルで、がっしりと固定させる。  
拘束具に開いた三つの穴状の枷に、頭部と左右の首が繋がれている様子は、藤香の想像通り、処刑台に昇らされた咎人のようだ。  
藤香がどれだけ身体を揺り動かしても、ただの木製に見える呪詛の拘束板は、ギシギシというだけで、まるで解ける気配がない。  
「狐の本性を暴くには、その身体に聞いてみるのが一番です。さあ、みなさん。この女狐を……いや、まだ退魔師の綾辻藤香様でしたねえ。彼女を思う存分犯してください」  
「くっ、法限……っ。どこまでも私を愚弄して……っ。あ、はあはあ……くうっ」  
かつて倒した相手に、市民たちの前で貶められ、たまらない屈辱が募る。  
しかし男の恥辱的な提案に、藤香の理性ではなく、肉体を司る本能が、キュンっといやらしくわなないてしまう。  
（ま、まづいわ……。媚薬のせいで身体が、完全に発情しちゃってる。か、身体が熱い、アソコが疼いて、たまらないっ）  
法限の狙いは、転生し、愛する人のために人間であることを望んだ藤香を、いまだ妖魔・獣の類である九尾の妖狐だと認めさせることだ。  
人としての誇りである退魔師の使命……市民たちを守ることを捨て、肉欲に溺れる牝奴隷だと藤香自身の意味で認めさせる。  
（はあはあ、私は章伯に出会って変わったの。もう妖狐じゃない。人間の退魔師・綾辻藤香なのよ! だからこんな発情くらい……あはあっ!)

たとえ身体は快楽に支配されようとも、心までは決して屈しない。そう、藤香は心に誓う。  
しかし人間としての尊厳と、一匹の性欲の盛る牝の本能との間で、藤香の美貌が苦悩と苦悶の表情を浮かべる。  
突き出された巨尻の肉がブルブルと、快感を欲して震え、牝としての最大の悦びである牝に種付けされることを望む。それを必死に人としての理性で耐え凌ごうとする。  
「そ、そうか……。俺たちがいくら犯しても、藤香様が求めなければいいんだよね?」  
「ああ、けど本当に違ったときは藤香様に殺されるかもしれないな……。でも……ゴクリ」  
まるでギロチン台のような拘束具に捕えられ、爆乳を牝牛のように晒し、大きな尻を突き上げた姿勢している女退魔師を、周囲の男たちが見つめる。  
「んはあ、はあ……はあんっ。あ、くうっ」  
藤香が快楽欲求を耐えれば耐えるほど、その全身からは熱っぽい汗が噴出し、長く艶やかな金髪が艶やかに湿っている。ほとんど半裸状態のボディラインにピッチリと張り付いているのは、わずかに残った退魔スーツの裏地に生えた醜い触手の群れたちだ。民衆に丸見えになっているヴァギナとアナル、二つの性器は、抜き取られた魔パイプを名残惜しそうに、まだヒクヒクと淫靡な痙攣を晒し続けている。  
自らが地面に噴き出した濃厚なアクメ汁が伝う魅惑的な大腿は、柔らかい上に弾力のありそうな媚肉を蓄えたまま、時折ピクンッ! と大きなわななきを見せる。  
それらはすべて極上に艶っぽく、まるで男を誘う牝の発情ポーズにさえ見て取れる。そんな格好の正義のヒロインを前に、男たちの欲望が制止できるはずもない。  
「ぼ、僕は藤香様を信じています! ぐふふ、藤香

様がチンポに屈するわけがないんだ。だから僕が犯してもだ、大丈夫なんだっ!」  
法限の提案に納得しつつも、尻ごみしていた男たちの中から、みすばらしく、だらしない風体の若者が、拘束された藤香の前に歩み出る。  
男はすでにお腹まわりがピチピチのズボン脱ぎ下ろしており、藤香の眼前にその陰部を露出した。男の股間は、すでにきつく勃起していた。その大きさと太さは、生来の巨根である章伯や妖魔・狒々には及ばないが、平均値を上回る立派なものだ。  
しかし、それでいながら、起立した肉棒の全身は何日も風呂に入っていない黒ずんだグロテスクな逸物だった。先端にはぶくんと臭い立つ恥垢が汚物のごとく溜まっている。  
「あ、ううっ。お前、この藤香様にチ、チンポを見せるなんてっ。殺されたいの!?!」  
（な、なんて汚らしいチンポなの!?! 狒々たちといい勝負だわ。……この臭い、頭が変になって……）  
強権な女王らしい、高飛車で凶悪なセリフを、鋭い瞳とともに突きつける。  
しかし形の良い鼻先で、ぶくんと漂う男の汚物ペニスの異臭に、藤香は感じたことのない高揚を胸の内に感じてしまう。  
普段なら刀で一閃してもおかしくない肉棒だが、自然と顔を背けられず、汚いとわかつているのに、くんくんと鼻孔を動かしてしまふ。  
（はあはあ、本当に臭いチンポだわ。欲しいなんて思うわけない……チンポなんて、入れたらすぐに殺してや……ああ、アレをアソコにぶちこまれたら……くおんっ）  
卑猥な肉體改造による発情状態。つまり心でいくら否定しようとも、交尾したくてたまらない牝の本能は勝手に暴走し続ける。  
理不尽な淫獄裁判を受けようとしているのに、藤



香の膺がキュンキュンと熱く収縮して、止まらない。(オマンコ、狒々たちに入れられたきりなのよ。パイブじゃぜんぜん物足りない……ああ、ちがう、私は……正義の退魔師はこんなこと考えたりしな……ごくりっ)

顔のすぐ横から、こちらを見下ろす法限を睨み据えてやりたいのに、眼前の小太り男が掲げる汚物チンポの方が気になってたまらなくなる。

思わず生唾を呑みこんだ、細い喉がいやらしい音を立ててしまう。牝の生殖本能に自分に揺れる誇り高い理性が、湧き上がるたまらない羞恥心で侵されていく。

「ぐふふ、藤香様。あなたの本性を、僕のチンポで証明してあげますよ」

見上げた男の瞳には、明確な牡の情欲が浮かんでいた。ニタニタと笑いながら、囚われの藤香の背後に回ると、たつぷりと熟れた桃尻に、汗と脂肪でギトついた掌を、びつたりと乗せた。

「い、言ったでしょ!? あなたのチンポをスタスタにしてあげるって? それでもいいの? 女王である私に逆らえばどうなるか……っ」

ペニスを膺穴に近づけられて昂る情欲を抑えようと、囚われの身でありながら強気の言葉を續けてしまう。黙ってしまえば、身体の疼きに呑みこまれその感覚に包まれてしまう。

(はああ、チンポがくる……。こんなみずぼらしい男のチンポ、だめえ……。こんな衝動、はね除けるのよっ。章伯と一緒にいるために、人間に転生したんでしょっ!)

汚らしい逸物への嫌悪感よりも、たとえどんなモノでもいいから、早くセックス……。種付けしてほしいという欲求が、頭の中をグルグルと駆けまわる。

快楽に屈し、肉棒を欲しがるといことは、章伯のために妖狐であることを捨てた、自身の愛情を否

定するということだ。

そんなことは絶対にしたくない。愛する章伯の側にいるためにも、自分は凛とした退魔師でい続けなければならぬ。

「ぐひっ、ひひっ。藤香様の濡れマンコで、僕の童貞チンポを筆おろししてくださあいっ!」

ズブチュウウツツ! ズブツツ! ズンツツツ!! そんな乙女の想いが、極上の牝に対する牡欲を露わにした醜い男の肉棒によって、試される。

小太りの男の腰がパァンツツ! と勢よく藤香の巨尻に打ちつけられ、淫花の入り口にあってがわれていた肉棒が、ズニユリウツツ! と容赦なく藤香の膺壺の中へと挿入される。

男の完全勃起した不潔ペニス、藤香の膺内にびつしりと根付く快感粘膜をゴリゴリユウツツツ! と撫で上げる。

(チンポき、たあつっ! けどこのくらいなんともない……。気持ちいいなんて思うわけな……。おおおっ!)

最凶の九尾の妖狐という立場を捨てても、愛する人と人間として一緒になることを望んだ。その気高きプライドを守り抜くために、決して快感に溺れることはしないと誓った。

しかし悪の陰陽師によって、周到に媚薬肉改造を受け、粘着質なまでにまがい物の牡棒パイブによって昂り焦らされ続けた。結果、藤香の膺壁はすでに、牝の欲求を満たすためだけの快感神経の塊となっていた。

生の肉棒の感覚は、パイブとは全く別次元の牝の悦びを刻み、女退魔師の獣耳の先端まで突き抜け、藤香の理性に、あつてはならない感覚を教え込む。「ほおっっ、んいっつ!!」

(このチンポ、すごおおおっつ! 感じるっつ、たまんな……。ダメ。思っちゃダメ。こんな、くううう

ううっ!)

退魔師の使命と同時に、ひとりの男を想う恋する乙女の純粋な心が、与えられたたった一本の剛直からの快感に穢されていく。

生殖行為を潤滑にするために、快感を増大させる発情状態の藤香は、愛情などというものが、牝の性欲がもたらす官能の前には、とてつもなく脆弱なものだと、身をもって思い知らされそうになる。

(堪えるううっ! 私は退魔師、こんなチンポ快楽なんかに負けるはずがないの……。ほおんんっ!!) 今まで以上にきつく歯を食いしばり、下半身からの快楽に流されることを堪える。

けれど見ず知らずの冴えない男の逸物もたらす衝撃は、膺だけでなく全身の快感神経を膨張し、沸騰させるほどとてつもないものだった。

ゴツンツツツ!! ゴリユウウウウツツツ!! 「ふああっつ、藤香様のマンコすごいですっつ! 僕のチンポが、ああつ、気持ちよすぎて腰が……止まりませんよおっ!!」

「お、おおおっつ! ひぎいっつ、子宮まで……。ああ、くひいんんっつ!!」

挿入直後で、いきなり子宮の入り口を突き倒された藤香の、頭に真っ白い景色が一瞬にして広がっていく。

(イ……クウウツツ! まさか入れられただけなのに……。チンポがすごい、オマンコ、爆発するううっ!!) 挿入されただけで小規模の絶頂に押しあげられる妖狐。

木杵に嵌められた藤香の美貌が、大きく目を見開き、今にも漏れ出そうになった牝の言葉を、思い切り歯を食いしばって腹の奥へと押し戻す。

身体を斬りつけられた痛みを堪えるほどに、快楽に抗うという強い意志をもたなければ、この男根に

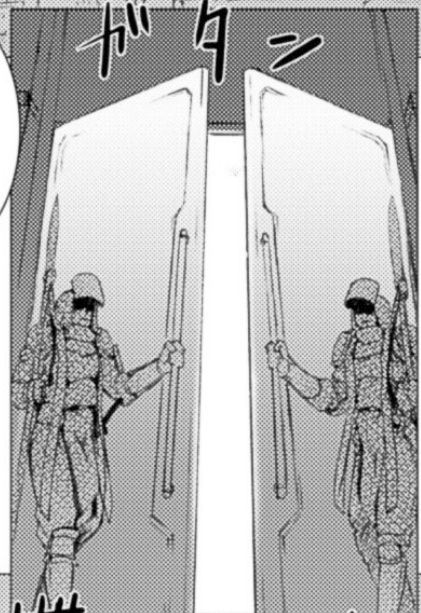


女勇者が  
囚われたら……

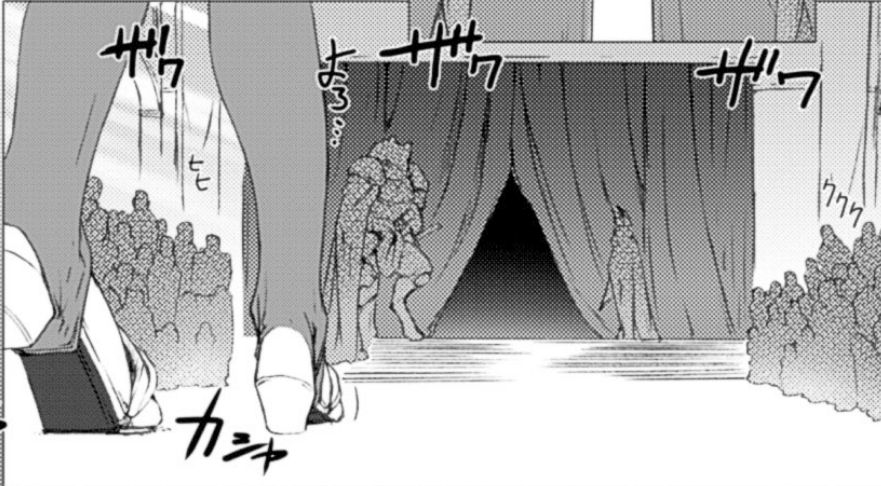


カ  
ク  
ク

そおら  
さささと歩け



くそ…虜囚に墮するとは  
勇者セラスタ・セリア  
一生の不覚!



ズシ  
ズシ

カッ  
カッ

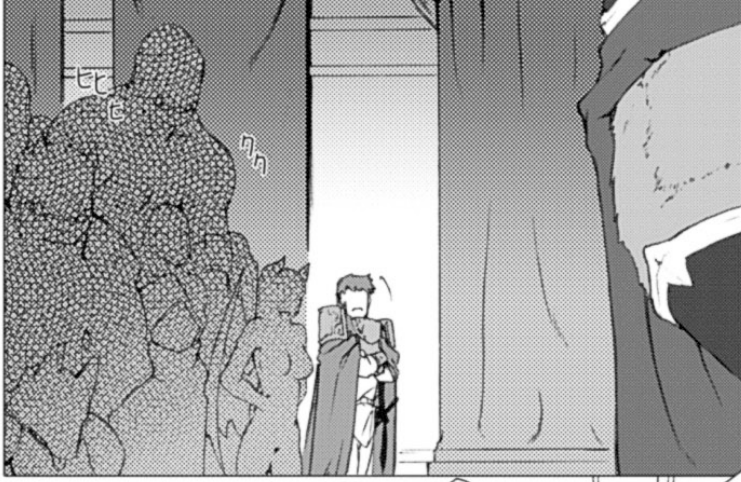


貴様が  
「西の勇者」か

うぐ!

聖教帝国の旗の下  
俺の可愛い手下どもを  
ずいぶん殺って  
くれたものよ





何ら恥も  
負い目もない

我ら断じて  
聖教帝国の  
支配はうけぬ!



さまで  
どうして  
くれようか

了ん、













セラスタは、くびをはねられた!



キラリ

えっ?!  
ちよ!  
まっ!



# Lust Resort II

ラストリゾート クイーンタプル queen:tuple

## MISS BLACK



魔王さまは お優しいですね

心も私に差し出せば 楽になるぞ

快楽にたゆたううちに すべて片付けてやろう

はい でもわたしがお願ひしたことです...から...

敵を討つのは 辛いか姫

ん?

フッフフ そうだな 契約は大事だ では今日も 契約を果たして もらおう

でも 契約にありませんから 心はお渡できません

!!

はい





いかがされました!?



女王陛下!



おねがいがあります  
衛士さま



ああの  
ごめんなさい



へ陛下?





ん味も匂いも  
こしも濃く...

はじめてなのかな  
...嫌じゃないかな

かっかん  
はなへん...



あ  
お我慢なさって...  
まだ続けたいのかな

このが  
好きなのかな  
DVD

強すぎるかな  
かっかん  
こっかん...



あむっ

うああっ  
へ陛下っ!







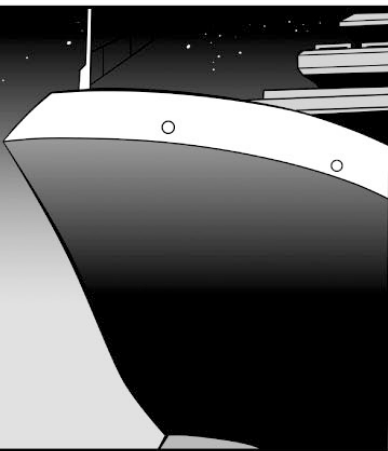


先には  
女捜査官が潜入した



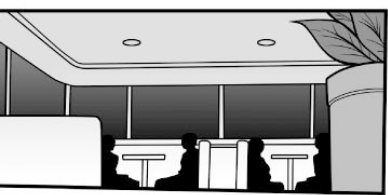
人身売買

ある組織が  
運営する闇の  
オークション



豪華客船の中で  
堂々とそんなことが  
行われていた  
だなんて...

だがそれも  
今更には



# 陵辱オークション

商品No.71 女刑事 白石恭子

漫画 ぱふえ  
COMIC



てっ  
テメエ





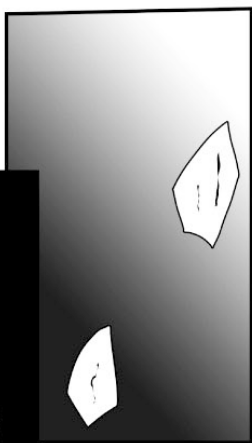
すぐ脱出  
して!!

警察よ!  
助けにきたわ



あつちだ  
急げ!

んだ  
今の音は!?



早く!  
ここは私に  
任せて!!



それでは  
次の商品

ご存じの方も  
おられるかも  
知れません  
白石恭子  
刑事

ご安心下さい  
とある事情で  
彼女は自ら  
買われに来て  
いるのです

残りの女を  
解放してやっても  
いいんだがな

お前が  
稼いだだけ

逃げた女の分  
その体で弁償  
してもらうぜ

!!

くッ  
断る!  
なぜ私が

……  
本当……で  
しょうね?

オイ  
アピール  
すんだよ

高く値が  
つかなきや  
他の女を……

くそ……  
我慢よ

組織を出れば  
逃げる機会が  
訪れるはず……



あー

おお

あら。

く...そ...  
調子に乗るん  
じゃないわよ

ご覧下さい  
このおっぱい

スーツの下に  
こんなエロい  
肉体を隠して  
いたなんて!

ああ...そんな  
胸を...裸を  
見られてる

100円

110円

120円

こんな...  
犯罪者ども  
なんか...



こらっ!  
触らないで

値を上げる  
ためだ

揉み心地も  
アピールして  
おくのさ

む

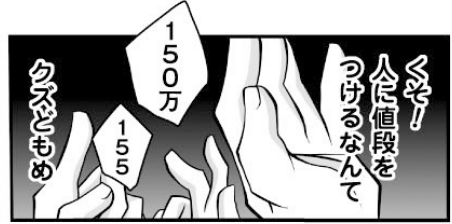
む

ごめん  
ごめん...  
我慢よ...



次はもっとエロいことしようか

フフフ 高値になりそうだな



150万

155

クズともめ

くそ 人に値段を付けるなんて



皆様 それでは あッ

恭子の： 奴隷の能力を確かめたい： でしょう？



希望者は ございますか



白石刑事の パイズリ権 10万で落札

ヌ



お試しに ご奉仕：

させて下さり …ませ…



グフフフ よおし！



ツ…！





んん…

しなくては  
ならないなんて



お買い上げ  
ありがとうございます  
ございます

うむ！

それ…では  
ご奉仕させて  
…頂きます

おのれ…  
私が風俗女  
みたいなこと



おほ  
見事な  
ボリューム

好き勝手  
言つて…

刑事には  
もったいない  
乳だ  
こうして男に  
媚びてるのが  
お似合いだぞ

こんなこと  
何が楽しい  
のよ…  
変態！

これは  
なかなか

もっちり  
してて  
おほおほ  
いいぞお

この乳は  
買う価値が  
あるなあ

ああもう  
刑事では  
なかったね  
がははは

おに  
おに  
おに



ちよっ…  
何するの!?



ん…  
まだぎこち  
ねえなあ

もっと気合い  
入れてやるよ



おおっ  
激しいな

ちよっとな  
待…んぶっ

そうそう  
体全体で乳を  
ゆすって

上手いぞ  
才能あるなり



や…  
やめっ

そんなっ  
やめ…て

クク…

くほっ  
こ…れえ  
止めてええ



あ…  
ああ

はうっ  
動…いて

ぶる  
あ  
ぶる





く...うッ  
あああッ

フフフ  
元刑事の  
パイズリ奉仕  
というだけで

そーら  
出してやる

高まって  
きよるわ

ありがたく  
頂戴しろよ

選択肢でいろんなエンディングが楽しめる分岐小説!

魔界皇女  
エカテリーナの  
Sufferings of  
Demon Princess  
Ekaterina  
受難

競売にかけられた魔界皇女!  
落札先は屈辱の奴隷生活!?

さかいひとし  
小説 酒井仁

挿絵 キノウタロウ  
ILLUSTRATION

ご注意

この小説には分岐が設けられています。シーンごとに1~7の番号がふられているので、シーンの小説本文末尾にある指示に従って、指定された番号のシーンをお読みください。



シーン1

「な、なんだこれは……おい、どうなってるんだ女アアアッ!？」

高級スーツに身を包んだ男が、怒りと困惑の表情で叫ぶ。身なりは上等だが雰囲気や口調は粗野で品がない。

男が焦るのも無理はない。

高級調度品の揃った高層ビルの一室にはあまりにも不釣り合いな、不可思議な文様——魔法陣。淡く光るその円陣から、じわじわと赤黒い不気味な肉塊が滲み出て、男を狙うように取り囲んでいるのだ。

「ひい! て、てめえがけしにかけてるこのバケモノを、なんとかしろって言ってるんだよ!」

焼けつくような男の視線を風のように受け流すのは、信じがたいほどの美女だった。

腰まで伸びた漆黒の長髪にシユツと一筋、鮮血のような紅が走る。美しい黒髪と強烈なコントラストを見せる白い肌は、同じく黒を基調としたゴシック風のロングドレスに包まれている。

見るからに手の込んだ刺繍に飾られたドレスは、彼女の曲線美を余すところなく見せつけ、特に目を引くのは見事なポリウムを誇る胸元。

そしてなぜか凶暴な肉食獣を思わせる、黄金の双眸だった。

「察しの悪い男ですわねえ……それでもあなた、大企業の役員でいらっしやるの?」

もつとも、と美女は唇を歪め、皮肉な笑みを浮かべる。

「〇〇製薬役員っていう立派な肩書の裏で違法ドラッグを横流しして汚い金を稼いできた悪党、それがあなた……あなたがバラまいたドラッグのおかげでいったいどれほどの若者が道を誤り、身を滅ぼしていったのかしら」

「そ、それがあなたの望みだったんだらう? サツの手が回らないように、魔術だかなんだかおかしな力で協力してくれたのは、お、お前じゃねえか、エカテリーナ!」

エカテリーナと呼ばれた美女は、かつかつとヒールの踵を鳴らしながら男に近づく。肉塊に怯えて動けない男の目の前で優美に身をくねらせると、そつと耳元で囁く。

「あなたはよくやってくれましたわ。この地には悪徳が栄え、治安が悪くなり、人間の怨嗟と血が染み込んだ、呪われた地となった。われわれ魔族にとっては願ってもないこと」

「だ、だろう? あなたは満足、俺も満足、何も問題ないじゃねえか」

美女の吐息は蜂蜜のように甘い。だが心を握め捕る甘い言葉からは美女の真意が読めず、そのことが逆に男の恐怖心を煽る。

ある日突然、セキユリティ万全の男の私室を訪れた美女エカテリーナは自身を魔族と呼んだ。

そして男がひそかに行っていたドラッグの横流しの規模を拡大するように

持ちかけてきたのだ。分け前を要求することもなく、官憲の目を魔法のように欺いて男の悪事に手を貸してきた謎の美女……彼女の真意も正体も、男は何一つ知らなかった。

「な、なあエカテリーナ。あなたの目的は金なんかじゃない。もつとでかいことだ、そうだろ? その目的とやらに俺は役に立つ。俺も一口乗せてくれよ、失望はさせねえ……」

「ええ、もちろんですわ。あなたにはちゃんと役に立つてもらおうつもり。これはあなたくらい汚れきつた魂でないといけないのですから」

ぼうつ……。魔法陣の輝きが強くなると、肉塊の動きがいつそう激しくなる。声を失う男の足首に触手状の肉が絡みつく、男は恐怖のあまり硬直する。

「ひい! な、何をやるつもりだ、やめろ、やめてくれええつ」

泣き叫びすがりついてくる男の指を一本一本はがすと、エカテリーナはくると身を翻す。

「我が名はエカテリーナ。偉大なる魔族の血統、カルデナクの皇女。我の名においてこの地に罪咎の楔を打ち込まん……さすれば竜脈は汚され、人間界はまた一つ魔族の勢力下におかれることとなるらう」

「うわああああ、たつ、助けてくれお願いだ! なんてでもする、あなたの下に僕にでもなんでもなる!」

「その必要はなくてよ。罪咎にまみれたあなたの魂こそがわたくしの求めるもの。さあ……」

肉塊は今や男の下半身を呑み込む勢いで脈動し、魔法陣は輝きを増す。エカテリーナが男の胸に手をかざすと、男は断末魔の絶叫を上げる。

「ぎやあああああああああ」

「ざず……ざずず……男の心臓に当たる部分から、黒曜石のような塊がせり出してくる。鋭角に尖ったそれはまさしく楔のごとし。

それが完全に抜けた瞬間、男はがくりとうなだれ絶命した。それを見届けるともなく、魔界の皇女が手を振ると、楔は魔法陣の中央に突き立った。ごごごご……楔が打ち込まれたところを中心に、墨のような漆黒が四方に広がっていく。それは男が魂に溜め込んだ罪過そのもの。この土地を汚し、竜脈を乱れさせるおぞましい力。

「やれやれ、人間というのは本当に愚かな生き物ですわね。欲に目がくらむと自分がしていることの意味さえわからなくなってしまう」

「ですが——そういう人間がいるからこそ、魔族が栄えるのでは?」

背後からかけられた声に、エカテリーナはびくりと片眉を上げ、ゆつくりと振り向く。

「あら、ずいぶん懐かしい顔……よくもまあ、わたくしの前に顔を出せたものですわね、パーリンンドン」

パーリンンドンと呼ばれた口髭の男は、慇懃に一礼する。

「パーリンンドンと呼ばれた口髭の男は、慇懃に一礼する。」

男はたつた今日の前で行われたおぞましい秘儀にも驚いていないどころか、エカテリーナを恐れている様子すらない。その態度に黒髪の美女は少し意外そうな顔を見せる。

「あなたがわたくしの前に現れた理由はわかりませんけれど、わたくし今上機嫌なの。だから、殺さないであげてもよろしくてよ？ 昔馴染みのよしみでね」

「それはそれは、痛み入ります。ですが私にも都合というものがありません。カルデナクの皇女エカテリーナさま。貴女には私の奴隷になつて頂きましょう」

「？」

皇女の美貌に呆れとも失望とも取れぬ表情が浮かぶ。

「気でもお狂いになったのかしら、パリーンドン？ たかが悪魔召喚師風情のあなたが、わたくしをどうこうできるとでも？」

パリーンドンは悪魔召喚師。人間でありながら魔族と通じ、かつてエカテリーナが何かと重用してきた部下。

だが野心家である彼は主人であるエカテリーナを逆に利用しようとして、彼女の逆鱗に触れてしまった。命を奪わなかつたのはせめてもの情けだったのだが……。

「さて、それはどうでしょう？」

さも面倒臭そうに片手を上げかけたエカテリーナの身体が、棒を呑んだようにこわばる。口髭の男パリーンドン

を完全に見下していたその顔に驚愕と憎悪の色が走る。

「どうして……あなたがそんなものを持つて……ぐ、うっ？」

その場がぐくりと膝を突くエカテリーナを見下ろしながら、パリーンドンは不気味に発光する「あるもの」を背広の後ろから取り出す。

それは宝玉のはまった、短いベルト状のもの。その宝玉の輝きがエカテリーナの力を抑え込んでいるのだ。

そしてそんな強力な魔導器を、ただの人間であるパリーンドンがおいそれと手に入れられるはずがない。立ち上がることもできないエカテリーナにパリーンドンが近づき、白く細い喉にそれを巻きつける。

「くっ……！」

「苦しいのはほんの一瞬ですよ。次に目を覚ました時、貴女は私に決して逆らえない、忠実な奴隷となつていて欲しい」

視界がかすみ、パリーンドンの声が遠くなつてゆく。残る力を振り絞り、せめてこの場から離脱しようと試みるが、魔力が拡散してしまふ。

（この……ままでは……済まさないわよ、パリーンドン……！）

そしてエカテリーナの意識は闇に呑み込まれていった。

そこは、オークション会場と呼ぶにはあまりにも異様な雰囲気だった。最高級ホテルのホールを貸し切つて

のオークション会場に足を踏み入れられるのは、特別な資格を有した者のみであることは言うまでもない。

いわゆる闇社会に通じたものでないと、このオークションの存在すら知られることはないだろう。ここで競売にかけられるものは、美術品や絵画といったありきたりなものではないからだ。

ここは「奴隷オークション」……すなわち取引されるのは人間、あるいは「それに準じた存在」であつた。

「落札」

カツーンとオークションハンマーの音と共に、落札者が決定する。それを理解しているのかいないのか、巨大な籠の中の「それ」は甲高い声を上げた。

「ケエ————ンツツッ！」

籠の中にいたのは、巨大な鳥……否、それは鳥身にして人頭を持つ異形の怪物。ハルビュイアと呼ばれるモンスターであつた。

女の顔を持ちながら獣でもある怪物を落札したのは、黒い背広を着た男。周囲の拍手を受けながら、満足げに会場を後にする。どうやら彼の目的はこの人面鳥だつたらしい。

無残にも売り飛ばされた人面鳥がどんな目に遭わされるかは誰にもわからない。いやそれ以前に、先刻の男が人間である保証すらないのだ。

「続きまして本日のスペンシャルです。出品者は、かの高名な悪魔召喚師パリーンドン氏。出品されますのはこちらでございます」

白髪のオーナーに紹介されたのは瘦せぎすな中年男。口髭を気取つてひねる仕草はお世辞にも紳士とは言えず詐欺師にしか見えない。

だが、彼のいかかわしい雰囲気は、舞台上に現れた「出品物」に一瞬でかき消された。その場にいる誰もが、おぞましい人身売買の舞台に引き出された一人の美女に釘づけになつていった。

「おお……な、なんという」

「う、美しい……」

彼女の容姿に誰もが息を呑む。

腰まで伸びた艶やかな黒髪に走る、鮮血のような一筋の赤。黒のゴシック風ドレス包まれた肢体は、トップモデル級に整っている。

くびれた腰、盛り上がった胸元、そして脂の乗つた腰回りと、死にかけた老人でさえ青春を取り戻すほどの色気を放っている。

彼女の完璧さはプロポーションだけではない。

何よりもまず目を引くのは黄金の眼差し——その瞳に人は魅了され、それから恐ろしいほどに整つた美貌に気付き、さらに引き込まれるのだ。

ただ、その完璧なる美に一点だけ不調和な部分があるとするれば、美女の首につけられた「首輪」だつた。

「彼女の名前はエカテリーナ・カルデナク。偉大なる魔族カルデナクの血統に連なる魔界の皇女にして、今は私の忠実なる下僕——」

パリーンドンの言葉に、美女は不快



そうに眉をひそめる。

「まったく、呆れ果てましたわ」

吐き捨てるような美女の一言に、会場は静まり返る。

「下等な人間風情がそこそこ集まって、奴隷オークションでこの高貴なるわたくしを競りにかけようだなんて、無礼にもほどがありませんよ」

鞭のような美女の言葉に、会場中が気圧される。ここに集っているのは裏社会に通じた百戦錬磨の悪党ばかりだというのに、ほんの小娘しか見えないうエカテリーナの、生来生まれ持った気品に圧倒されているのだ。

「さあ、その薄汚れた魂まで滅ぼされたくなければ、わたくしを今すぐ解放なさい、パーリンドン！」

きつと睨みつけられた口髭の男は、うすら笑いさえ浮かべ、底意地の悪そうな眼差しを向ける。そしてこれ見よがしにエカテリーナに指輪を見せると、指輪が妖しく光り始める。

「クッ、こ、こんなもの……ッ！」

指輪に呼応してエカテリーナの首輪の宝玉が光ると、黒髪の皇女は美しい顔を歪め、苦しみ始める。

「こんなおもちやでわたくしの魔力を封じたからといって、わたくしがあなたに屈すると思ったら大間違いですよ、パーリンドン……」

魔族の姫の精いっぱい強い強がりに、パーリンドンは芝居がかった仕草で大仰に会場の客に向けて両手を広げ、一礼してみせた。

「なんとという高潔さ、なんとという誇り高さ！ ですが、悲しいかな今のエカテリーナ嬢は私の奴隷……この哀れな囚われの姫君を、私から解放したいと思う方はいらつしやいませんか？」

その言葉に、会場は火がついたように一気にヒートアップし、エカテリーナは目を丸くする。

「さあ、見み麗しい魔族の皇女、落札なさったその瞬間から、彼女の身も心もあなたのもの！」

パーリンドンの言葉にどよめく会場。たちまち高額を提示する声が上がると、さらにそれを上回る額を叫ぶ客、さらに倍額と会場は熱気に包まれていく。エカテリーナのせめてもの抵抗と矜持は、却って彼女自身の価値を大きく喧伝する羽目になってしまった。

(パーリンドン……まさか、憎きゾナスに寝返るとは……！)

人間界で暗躍していたエカテリーナの自由を奪い、魔力のほとんどを封じ込めた魔導器、それが「隷属の首輪」。「かつての主人を裏切るのは、私も気が引けたのですがねえ……私もここで一稼ぎして引退でもしようかと思ひ、ゾナスのご令嬢のお誘いに乗ったのですよ」

「エレノラ・ゾナス……」

豪奢な金髪娘のことを思い出し、エカテリーナは悔しそうに唇を歪める。

カルデナクとゾナスは魔界でも有数の高位魔族の家系。中でもエレノラとエカテリーナは互いに相手を疎ましく

思う関係であった。

「さあ、魔界の皇女を落札するのはどなたですか？ 彼女は真正銘の生娘、しかもこの首輪がある限り、彼女はどんな命令にも逆らえない忠実なる牝奴隷なのです！」

煽る召喚師の声に、たちまち値が上り上がっていく。エカテリーナが魔族だと知っているにもかかわらず、否、彼女が高貴な魔族だからこそ、彼らのような「ただの人間」が魔族を従わせるといふ行為に、倒錯的な興奮を感じているのだらう。

(確かに、この首輪が外されない限り、わたくしがパーリンドンの手から逃れることは困難ですわ……)

だが、相手がパーリンドンでなければどうだろう。それこそ「ただの」人間相手なら、エカテリーナに残されたごくわずかな魔力でも、隙を突いて脱出することができるかもしれない。

(そう、むしろ『ただの人間』に落札してもらった方が、都合がいいかもしれませぬわ)

エカテリーナは会場を見回し、与しやすそうなる人間に当たりをつける。

(——あの人間がいいわ)

場内のほとんどの人間はエカテリーナの美貌に魅せられ、できればこの麗しの魔族の姫を我がものにしたという情欲に満ちた目でエカテリーナを見つめている。

エカテリーナはきつと顔を上げ背筋

を伸ばすと、残り少ない魔力を黄金の双眸に集中させ、よく通る澄んだ声でこう言った。

「ここにわたくしの伴侶としてふさわしい殿方がいるのかしら？ もしご自分がそうだと仰るなら、自らの全てを投げ打ちなさい。本当に気高き魂をお持ちなら、わたくしは喜んでこの身を捧げましょう」

その神々しささえ感じられる皇女の宣言に、会場中の誰もがどよめき、畏敬の眼差しをエカテリーナに向けて。

だが、エカテリーナが全魔力の全てをつぎ込んで、狙い定めた相手に魅了の魔術を施していたことに気付いた者は、誰一人いなかった。

(ふふふ……パーリンドンのもとから離れてしまえば、下等な人間の手から逃れるなど、この魔界皇女エカテリーナにはたやすきこと。高貴なるわたくしを競り落とした束の間の悦びに酔いしれるがよくてよ！)

そして、エカテリーナの魅了に掬め捕られた客がその場の最高金額を高らかに宣言する。オークションハンマーの音が鳴り響き、彼女を落札したのは

◆成金風の中年男に落札される

↓シーン2へ

◆落札されない↓シーン3へ

◆科学者風の男に落札される

↓シーン4へ

## シーン2

「闇の人身売買オークション」終了後……エカテリーナは高級外車に乗せられた。

豪華なシートの向かい側に座っているのが、彼女を落札した男。

でつぷりと肥え太り、脂ぎった中年男だ。彼は明らかに肉欲に染まった目を魔界の皇女に向けつつ、敢えて指一本触れようとはしなかった。

（ふん……車の内装といい、派手好きでいかにも成金といった趣味の悪さですわね。魔族の女を高級娼婦とでも思ってからしやるのかしら。だとすれば好都合ですわ）

ねつとりと絡みつくような視線を肌を感じつつ、エカテリーナは内心笑みを浮かべる。

「ぐうふふ……少々高くついたが、いい買い物できたよ。わしのはこれから『旦那さま』と呼ぶのだよ、エカテリーナ」

「……………」

あえて無視する黒髪の美女に男は怒るでもなく、ワイングラスを傾ける。

男の指に光る指輪は、パールリンドンが男に渡した魔道具。「隷属の首輪」と連動したその指輪がある限り、彼女は男に逆らえないと知っているのだ。

「そう硬くなることはない……わしは妻を亡くし、今は息子と二人暮らしでな。使用人がいるので生活に不便はないが、男所帯ゆえに潤いがなくてのう。

エカテリーナ、キミのような美女が仕えてくれれば私も息子も嬉しいのだよ（汚らわしい下等生物ごとときが、わたくしを意のままに操れると思つたら大間違いですわ）

いつかきつと訪れる逆襲の機会を待ちつつ、魔界の皇女は静かな怒りを胸に募らせるのだ。

男の屋敷はその巨大さに比してひっそりとして、使用人の気配すらうかがえなかった。パーティーでも開けそうな広間だが窓は少なく、防音設備が整っているように感じる。

（いえ……おそらくはこの屋敷そのものがこの男の特別な「趣味」のために作られたもの。そこかしこから嗅ぎなれた匂いがいたしますわ）

それは血の匂い、汗の匂い、そして……男女の濃厚な睦みあいが生じる艶めかしい交尾の残り香。

呆れたことにエカテリーナの嗅覚は死臭すら嗅ぎ取っていた。この男はこの屋敷でいったいどのような猟奇に耽っていたのだろうか。

「パパ！ おかえりなさい、パパ。またボクのために新しいおもちゃを買ってきてくれたの？ 嬉しいよ、パパ！」

よたよたと肥満した身体を揺すらせて現れたのは、男の見苦しいまでの粗悪コピー品だった。

には不潔な染みができている。「わあ、すごいや、なんてきれいなお人形なんだ！ 最高だよパパ！」

「んむうっ？」

ずかずかと近づいてくるなり、肥満息子は太い腕を広げ、エカテリーナに抱きついてくるや、たらのような唇で吸いついてきたのだ。

突然のことに魔界の皇女ですら反応できない。アイスマイルの唇をぶちゅぶちゅと押しつけられ、息が詰まりそうになる。

（く、臭いですわッ！ なんて生臭い口臭、それにじつとり湿った手のひらが、き、気持ち悪い……ッ）

肥満した脂肪の層が、曲線美を誇るエカテリーナの肢体に密着し、生温かい体温を伝えてくる。身につけているシャツは高級品のはずだが、肥満息子の不潔さで台無しだ。

「んぶっ、んむうううっ！ うっ、うげううっ」

異臭と不快さでエカテリーナは必死に男の腕の中でもがくが、男は無遠慮に舌で美女の唇を割ってねじ込んでくる。唾液とアイスの混じった液体が流れ込んで、エカテリーナは猛烈な嘔吐感を覚えた。

「むちゅ、ぶちゅっ。ぶひひ、甘くていい匂いがあるなあ、こいつ。それに……おっぱいもお尻もむちむちだよお」

「ほっほほ、早速せがれに気に入られたようだね。だがせがれよ、今回の人形はただの人形ではないぞ。見ている

がいい」

「えっ、どういふことだい、パパ？」

エカテリーナの「旦那さま」となった中年男は、息子を美女から引き離すと、これ見よがしに指輪を見せる。

「少しワインを飲みすぎてしまったようだな、手伝いをしてくれないか」

「は、はい……？」

男はエカテリーナを化粧室に連れ込むと、便器に腰を下ろすように言った。

意外と広い化粧室の中は隅々まで清掃され、芳香剤が香るが、目の前に仁王立ちになった男の意図が読めない。（こんなところにわたくしを連れ込んで、なんと無礼な……）

「ああ今にも漏れてしまうそうさ。ずまんがイチモツを出してくれないかね」

「こ……こうでよろしいかしら？」

ストラックスのジップパーを下ろして細い指を差し入れると、魔界の美女は男の陰茎を引つ張り出す。

暗灰色の肉のホースは勃起してはおらず、息子の体臭とはまた異なる異臭を漂わせている。

「さあ、その愛らしい唇を開けて、イチモツを啜えなさい」

男の言葉の意味が、咄嗟には理解できなかった。だが、次第にエカテリーナの眉が上り上がり、わなわなと肩を震わせ始める。

「は……はあっ!? わ、わたくしに何をしろと仰つたの？ 人間風情の、汚



らしいその生殖器をわたくしに啜えろと仰るの？」

だが、次の瞬間指輪が輝くと共に、隷属の首輪に魔力が注ぎ込まれる。するとエカテリーナの唇は本人の意志とは無関係に開いてゆき、目の前の肉ホースをばくりと啜え込んだのだ。

「んんんっ、んむ、うううっ！」

「うむ、温かくていい。これはなかなかの肉便器だ」

(に、肉便器ですって……?)

むくっ。むくむく……口の中で肉竿がわずかに反応した。だがそれは海绵体の充血、すなわち勃起によるものではなかったのだ。

「お、おお……こぼしてはいけないよ、エカテリーナッ」

「んうううっ!」

陰茎を勃起させるのは海绵体組織そこから放出されるのは男の子種が詰まった精液、そしてもう一つある。

尿道を膨らませたそれは、鈴口をこじ開けて勢よくエカテリーナの口の中に注ぎ込まれたのだ。

「んぶうおおっ、んっ、んぐ、んぐ、んくうううっつっつ」

たちまち口中いっぱい溢れるそれを、エカテリーナは便器に腰かけた格好のまま、懸命に飲み込んでいた。自らの意志ではない、男の指輪が「隷属の首輪」を通じて彼女の肉体を操作しているのだ。

熱湯のように熱いその液体は精液のような粘っさも生臭さもない。ただ

熱く、塩辛く、喉を焼きながら乙女の胃袋へを流れ落ちていった。

(ま、まさか……まさかこの男……!)

「パパ、この女に小便を飲ませてるのかい!? なんてこった!」

「ん……ふうおお……そうだ、せがれよ。この女は身分と気位の高い美女でありながら、わしの命令一つで喜んで小便を飲み干す肉便器なのだよ。もちろん、小便以外のものを飲ませても一向に構わんがね」

肥満父子の呆れた会話を頭上に聞きながら、エカテリーナは絶え間なく進む中年男の尿をこくこくと飲み続ける。嫌悪感と嘔吐感で頭がおかしくなり

そうだが、身体が拒否できないのだ。

「わーお、すげえや、パパ! ボクもこいつに小便を飲ませて……いや、パパの小便をうまそうに飲んでるこいつを見ていたら、ちんぼがムズムズしてきちゃったよ」

「ああ、もちろんお前の好きにして構わないぞ。だが肉便器を人間扱いしたり、情けをかけてはならん。この女はこれから先永遠に、わしたち親子の所有物ののだということを、常にわからせるのだ」

事ここに至って、エカテリーナは男の悪辣な意図を思い知った。

彼らはエカテリーナを単なる性的な慰みものにするつもりはないのだ。何があるかと反抗できない肉奴隷、いや肉便器であることを徹底的に理解させるのが目的なのだ。

(くっ、卑しい人間風情が……!)

だが、高貴なる大魔族である自分を陥れたパーリンドンも、そしてこの男も人間であり、今のエカテリーナに反抗の手段は何一つない。

「ふうお……っ、おかげで膀胱がすつきりしたわい。わしの小便はうまかつたか、エカテリーナ?」

「……………」

魔界の皇女は口を開けなかった。尿の匂いと味が口の中に広がって

て、今口を開けば間違いなく嘔吐すると思われ、ただ肩を震わせる。

男は乙女のそんな窮状を全て見越した上で、ゆつくりとイチモツをしまい込む。そして何やら小さな錠剤を息子に手渡した。

「パパ、これは?」

「これはこの女を出品した男から特別サービスでもらった薬だ。飲むとき」と楽しいことになるぞ、くくくっ」

言われるままに錠剤を口に含んだ肥満息子が突然「うごっ」と奇声を上げた。びくん、と太った巨軀が直立したかと思うと、スウェットの前の部分が

「むくむくむく」と膨れ上がる。

「うわあああつ、な、なんかちんぼが熱い……うひひいっ」

下着ごとスウェットをずり下ろした息子が目を丸くする。彼の股間のは大人の肘ほどの巨大極太サイズに膨張していた。

「す、すげえ、これ本当にボクのちんぼ? か、身体も熱くなってたぎって

きたよパパ

それはただ単にサイズが大きくなっただけではなかった。

目の前でそり立つ肉の凶器に、魔族であるエカテリーナさえも息を呑む。幹の部分には太い血管がくつきりと浮き出て脈打っている。先端部ときたらてらてらと赤黒くてかり輝き、まるで灼けた鉄のようだ。

(それにこの強烈な匂いは……!)

鈴口から早くも滲んでいる先走り汁の酸っぱい匂いに、魔界の皇女は顔をしかめずにはいられない。

「ね、ねえ、この女使つてもいいんだよね、パパ?」

「ああ、もちろんだとも。だがさつきも言ったように、この女は我ら親子の肉便器だ。肉便器は肉便器として扱うのだぞ」

そう言った男の指輪が再び光ると、エカテリーナの唇は彼女の意志とは無関係に肥満息子の超巨根に容赦なく近づいていく。

(ああ、こんなこと……高貴なるわたくしがこんな下劣な人間の性器を、排泄物を……ッツ)

「あふ……っ。れるっ、れるっ」

「おおおっ、ボクのちんぼを美味しそうに舐めてるよ、一週間は洗ってないボクのちんぼを! さすが肉便器だ」

(ううっ、気持ち悪くて吐きたいのに、身体が止められませんわ……)

悔しさと不快さ、込み上げる嘔吐感

に堪えかね、ついにエカテリーナの目に涙の珠が浮かぶ。

それでも隷属の首輪をはめられて以上、哀れな魔族は汚らわしい人間の肉茎をねぶらねばならないのだ。

裏筋を舐め上げるたび、勃起ペニスは不気味に痙攣し、カウパー液はどんどん溢れてくる。陰囊を口に含まされたエカテリーナは苦しげにむせる。

「ちゃんと奉仕しろよ肉便器！」

「まあまあせがれよ。便器を酷使するだけが主人の役割じゃないぞ……」

また指輪が光ると同時に、エカテリーナは心臓が跳ね上がるような衝撃を感じる。ちりちりと神経が焦がされ書き換えられるような不快感。

「あ……ふあ、あ………？？」

「パリーンドン氏の言っていた通りだ。その首輪の力で、今キミの口は性器も同然……せがれや、その便器女にイチモツを啜えさせてやりなさい」

「い……いや……お、おやめなさい」

自分の身に何が起ったのか理解したエカテリーナは、唇を震わせながら後ずさりした。だが男の息子は言われるままに巨根の先端を片手で下げ、乙女の黒髪をむんずと掴む。

「こら、逃げるな……っ！」

「んぶ、んぶうううっ」

エカテリーナの髪を引き寄せ、肉厚の唇が龟头を押し当てると、「ずぶぶぶ」と乙女の口に押し入ってくる。

「ふうううおおおおんっっ」

びくっ、びく、びく……何度も痙攣を繰り返す魔界の皇女は、しかし苦痛に震えているのではなかった。

「ふお……お、おお……ん……」

半分白目を剥いたエカテリーナの顔は、明らかに愉悅に染まっていた。

「くっくく、その女の口は今やまんこと同じ。ちんぽを突っ込まれれば快感を感じる肉穴なのだ。さあ、思う存分便器穴を犯してやりなさい」

「わかったよ、パパ！」

欲情息子はエカテリーナの頭部を両手でがっちり押さえつけると、凄まじい勢いで腰を振り立て始める。

「ずぶ、ぬぶぶっ、ずぶ、ずぼぼっ」

極太の肉竿が根元近くまで突き入れられると、エカテリーナの白い喉が不気味に膨れ上がる。

息もできないほどの苦痛のはずだが、魔界の皇女は頭が痺れるほどの快感を味わっていた。ずるるっ、と勢いよく引き抜かれる時に摩擦感で、さらに

悦楽が脳髓に撃ち込まれる。

「んほおおおっ、んふううんっ」

思わず上げられた乙女の両手は、肥満男の凶器から逃れようとするのではなく、スウェットを掴んでいつそう深くまで陰茎を呑み込もうとしていた。

「きつ、気持ちいい!! お口犯されて、喉をごりごり強引に擦られているのに、どうしてこんなに気持ちいいのっ」

顎が外れるほど太い幹に舌を絡め、不潔な肉棒の味を味わうだけでうっとりしてしまふ。エカテリーナの口、舌、

喉は女性器を感じるはずの感覚を有し、乱暴に抽送されるほどに快感を感じるよう変質させられていた。

「あああつ、もつと! もつと滅茶苦茶に抜き挿しして! 胃袋を突き破るくらい奥まで突っ込んでええい!」

屈辱感、恥辱感はあるが、容赦なく与えられる快感には抗しきれない。エカテリーナは自分から頭を振り立てて極太陰茎をずっぴりと味わう。

「おあああ、こいつすげえ、すげえよパパ! アへ顔で鼻水までたらしているのに、ボクのちんぽ根元まで呑み込んで放さないよ!」

「ふふふ、それはそうさ、せがれよ。そいつは精液だろうが小便だろうが、ちんぽから出るものなら大好きな、卑しい肉便器奴隷なのだからね……」

「たかが人間ごときの高慢な言葉に、目尻が熱くなるのを感じる。」

「なにに美しき魔界の皇女は、肉棒にむしゃぶりつかずにはいられないのだ。息苦しさに鼻水が噴きこぼれようと、喉奥を突かれる苦しさにえずこうと、その苦痛さえもが悦楽となつてエカテリーナの神経を甘くとりけさせる。」

「ダメえ、これ以上されたら、わたくし本当に、喉でイッちゃう……」

「ずるるっ、ぶりゅっ、ごりりっ。」

龟头が頬粘膜を、喉を、食道を激しく擦り立てる。窮屈な乙女の喉の締めつけに、肥満息子はがくがくと腰を振り立て、声を上ずらせる。

「ふおおお、パ、パバツ。ボク、もう

我慢できないよ! こいつの喉にザーメンぶちまけてもいいよね?」

「ああ、気の済むまでぶちまけなさい。きつと彼女もそれを望んでいるだろうからね……」

「いくぞ、いくぞ便器女アアア」

「どくんっつっつ」

すでにエカテリーナの胃袋には、成金男の尿がたつぷり詰まっている。その胃袋めがけ、ほとんどダイレクトに近い位置から大量の白濁が進り、注ぎ込まれていく。

「あ、ああ……くっさいおちんぽ汁の匂いが立ち上って……く、る……」

大量射精を受け、平らな腹部をぼつこりと膨らませた魔界の皇女は、至福の笑みを浮かべていた。

数カ月後――。

息子と二人で大きな屋敷に暮らす成金男は、目覚めと共にまず手洗に向かう。朝勃ちのペニスを取り出すと、そこには彼と息子専用の便器が極上の笑みを浮かべて口を開けている。

「おはようございます。本日も旦那さまのお小水を飲ませて頂き、ありがとうございます……」

夢見るような表情で陰茎を啜え、小便を美味しそうに飲み干す魔界の皇女は、誰よりも幸せであった。

BAD END





人間の冒険者  
3人組でえす!

さてお次の  
出品は  
変わり種



では「オ」  
『黒い雌鳥の魔導書』は  
18万8千で落札っ



.....



信じるのですアナ  
きつと  
チャンスは来ます



くそっ  
.....

こんな下衆どもに  
不覚を取るとは...

無残にもオークションに  
かけられた冒険者一味！

われわれ魔族の  
ダンジョンを  
荒らしに荒らした  
冒険者のパーティ！

このたびついに  
その悪名高き3人の  
捕獲に成功

それぞれに  
特殊な加工を施し  
出品にいたしました

魔界  
オークションへ  
ようこそ！

本誌  
初登場！

漫画  
COMIC

やなぎはら  
柳原ミツキ





ああそれに  
『神域の聖女』  
クリスだ

『氷炎の魔術師』  
ティットもいるぞ  
こいつはすげえ!



おいあれ  
『閃光の剣士』  
アナじゃないか  
……………?

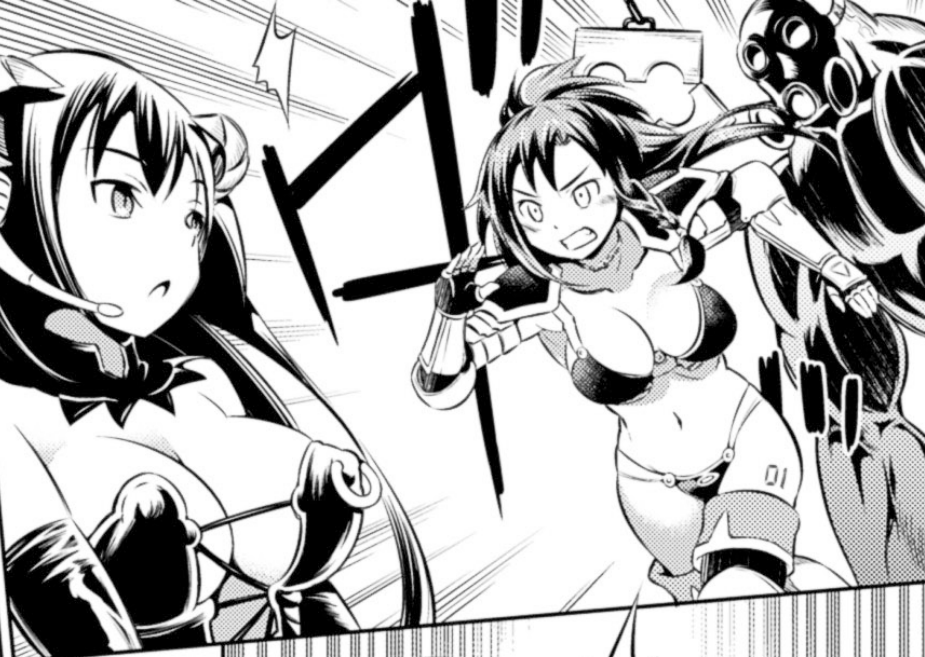


くっ…  
この手枷をえ  
外れば  
こんなやつら…



それでは  
さっそく  
商品の紹介に  
参りましょう

鍵をっ







はいっ  
「チン！」

ゲープゲプゲプ！  
いいザマだなオイ

プヒヤヒヤヒヤヒヤ  
こいつは可愛い  
メス犬だぜ

マコッ  
メス犬マコッ

人間の冒険者どもを  
殺すための  
戦力として使うもよし

ペットとして  
愛玩用に  
飼うのもよし

また体力が  
ございますので  
少しもつたいないですが  
手足を切り落とし  
生きたオブジェとして  
ご利用頂いても  
いいでしょう



かばあ

「マ」開く  
内臓までも見せるん

メス犬ウ

嫌だッ







さあてお次は  
われわれ  
闇の眷属の天敵  
神官戦士の  
メスでございます



今のご気分は  
いかがですか？

聖女様あーん

汚らわしい  
魔物たちっ…

このような  
冒険っ…

ばーるんっ

たとえ  
神が許しても  
おち■ぼ様が  
許しませんよっ！

…クリス？

えーこちらのメスは  
基本的な自我はそのままに  
必要最低限の洗脳を施し

おい  
今何て？

おち■ぼ様だとよ  
どうなってんだ？

信仰の対象を  
オスのペニスへと  
書き換えてあります





な何が  
おかしいのです  
あなたたち！

おち ぼ様を  
笑わないで下さいっ！！

大丈夫よ  
笑われているのは  
おち ぼ様ではなく  
貴女だから♡

？

…!?



ホラホラ  
貴女の大事な  
おち ぼ様が  
苦しそっうよ？

ああっ

おち ぼ…

おち ぼ様  
……！



やめてクリス  
目を覚ましてえっ

ん…

おいひい…

ん

んっ



おちほ様は  
神様でえす!

あっははは  
便器によし  
苗床によし



あっ

おいひい  
よお…

ちゅぽ  
ちゅぽ  
ちゅぽ

おちほ様  
おいひいよお…

いやあああ  
あああああ



この  
はしたない乳肉は  
グラムいくらで  
売れるのかしら

チポ…

それにしても  
すごい  
おっぱいねえ

チポお…

ちゅぽ  
ちゅぽ  
ちゅぽ



さて最後は  
この娘っ

彼女の凶悪な攻撃魔術に  
よって被害を被った同胞も  
いらっしやるでしょう

こちらのメスは  
カラダこそ貧相ですが  
ハーフエルフゆえの  
高い魔力量が魅力です

性交を通じて魔力を  
頂戴するというのが  
一般的な使い道に  
なるでしょうか

ティット  
……

そうだ…!  
あの口枷さえ外れれば  
まだ彼女の魔法が…

ちゅっ

侵略を企む極悪非道の凶悪な魔界の姫が登場！  
人間界が血と肉欲にまみれた地獄絵図になる！

……かも？

# 強襲！ 触手子ちゃん！

私は魔界の姫  
プリンセスランタ：  
(以下略)

人間界を  
我らの苗床に  
してやるわーっ！

流石です姫様！  
幸い人間界には…

通称  
触手子ちゃん！！

ぬらま…

我々の眷族も  
おりますし！

キモツ！！

えーっ！！

よろなっ





気高き女騎士が巨大なペニスと指先に蹂躪され弄ばれる！

# 騎士姫リリーナ

・❖・巨人族の性玩具になる凛々しき姫君・❖・

小説  
NOVEL

しみずかつし  
清水勝治

ゆうぎり  
挿絵 夕霧  
ILLUSTRATION



異様な空間だった。

三百六十度、どこを見回しても同じようなピンク色の粘膜。

大量の粘液がとめどなく滲み、天井からはジトーッと糸を引きながら垂れ落ち、下ではドロドロとした粘液溜まりができていた。

強烈な巨人族の液だった。

そんな巨人族の胃の中に、上半身には甲冑を纏い、下半身にはブリーツスカートを穿いたスタイルのいい女騎士が一人、佇んでいた。

(酷い臭い)

手の甲で形のいい小鼻と可憐な唇を押さえるものの、あまり意味をなさないほどの悪臭がガツンと鼻奥を突く。

生ゴミを数週間放置したような不快感溢れる匂いに加え、鉄が錆びたような香りも混じっている。

(きつと……巨人族に食われた兵士達の血や肉や骨、甲冑が溶解された匂いなんですよ)

そう思うと、リリーナの背中にゾクゾクとしたモノが走り抜け、さざ波のように全身が震えた。

まだ少女といっても通じるほどの幼顔。大きく真っ黒な瞳は愛くるしいながらも意思の強さを感じるものの、状況が状況だけに目つきは険しくなっていた。

長く艶やかな黒髪は激しく動いても邪魔にならないよう、大きなリボンで結い、綺麗なポニーテールにしている。童顔ながらに美麗な女騎士は、甲冑

の上からでも胸元の豊かな膨らみが見て取れ、腰までの綺麗なクビレが透けて見えてきそうだった。

男が装着すると、屈強な印象を与える甲冑だが、彼女が装備するところこか柔らかなように見えてしまう。甲冑の奥に潜む彼女の肉体が、男受けしそうな厭らしい曲線だけで構成されているからだろうか。

下半身はブリーツスカートを穿きながらも、膝元までは足具で固めている。瑞々しい太股までニーソックスがはみ出し、脚線美を際立たせていた。

騎士でありながらも、姫であり、まだまだ年頃の女性ということ、多少、無茶をした精一杯のオシャレだった。

左手には、胃の中に飲み込まれようとも、決して放すことのない切れ味鋭い愛用の刀。どれだけ、不利な状況になろうと、まだ戦闘する意思が残っている証拠だった。

背中に羽織ったマントは出陣時には、華麗に風に靡いていたものの、擦り切れたうえに、粘液を吸収してポロ雑巾みたくなっていた。

ただ、どんな場所でもどんな格好をしていようと、全身から溢れる凛々しく、高貴な美しさは失われない。

彼女はアルトリア王国のプリンセスにして国内一、二を争う刀の使い手、騎士姫リリーナだった。

だが、幾ら強くとも、巨人族相手ではその強さを発揮することは難しかった。

(さて、どうしたものかしら……)

少々、自虐的な笑みを浮かべながら騎士姫は考える。

そもそも、幾ら騎士として、鍛錬を積み、立派な精神を持つていようと、あくまで対人や人間よりも少し大きいモンスターを想定してのことだった。

一介の人間が巨人族と戦うことなど、考えてもいなかった。

(それにしても、不快な空間ね)

湿気が多く、生暖かい空気の中に腐臭が充満している。薄気味悪く、不快感が凄い。

頭上から降り注ぐ白光はおそらく、馬鹿みたいな顔をした巨人族が口を開きばなしにくれておられるおかげだ。

その僅かな光に、濡れたサーモンピンク色の胃粘膜が反射しているのだ。

リリーナは額にじっとりとした油汗を浮かべながら、周囲を見回す。胃とは思えないほど広大なスペース。

(私の部屋よりも、広いのは間違いないわね)

変な敗北感に苛まれる。

騎士姫といえアルトリアは小国。豪華絢爛な生活を送っている訳はない。騎士道精神に準じた質素儉約、簡素清貧といった言葉が似合う生活をしている。この国ではそれが美德であるとき

れ、騎士姫はその鑑だった。

(とにかく脱出しないと)

出口を求めて歩きだすと、突如、きゅるるるっ！ きゅるるるっ！ と、胃全体が不規則に蠢いた。

「きやうっ！」

脈を打ったのか、収縮しているのか、ともかくバランスが取り難い。

リリーナとしても、こんな粘膜の上に尻餅をつきたくない。内股になりながら必死に耐える。

揺れは徐々に弱くなり、すぐに収まった。

(ふうう……まったく、なんなのよ。あれだけ人間を食べておいて、もうお腹が空いたとでもいうの……)

彼の食欲がどの程度のものかは知らない。ただ、この巨体を維持するのは、相当量の食事が必要だということくらいは、なんとなく想像はつく。

リリーナは気を取り直して、胃粘膜の上を慎重に歩きたす。

脚裏から伝わる感触は巨大な軟体動物を踏みつけているような気色の悪さ。

一步進む度に、染み出た胃液がチャブン、チャブンと音を立てる。

少し進むと、辺りには騎士姫と同じ甲冑が、腕が、脚が、ばらばらになった胴体が転がっており、真っ赤な血溜まりができていた。

(くっ！)

リリーナは苦悶の表情を浮かべる。わかっていたことだが、この胃の中で生きているのは自分だけだった。

その光景を見ていられずに、瞳を閉じる。同時に、数分前に巻き起こった惨劇を思い起こした。

事の発端は、どこからともなくアル

トリア王国の領土内に巨人族が出現したことだった。巨人族といっても、一体のみ。

だが、その強さは常軌を逸していた。しかも、何も考えずに本能に従い、殺戮と破壊を行う。

言葉によるコミュニケーションは取れず、目的もわからない。ぼんやりとした無気力無表情のまま、人間を襲う。

リリーナの父親である国王は、国内の脅威を取り除くため、騎士達で精鋭部隊を編成し、自ら先頭に立ち討伐へと向かった。

だが、誰一人として、戻ってこなかった。

リリーナの母である王妃も、そのショックで寝込んでしまった。

尊敬できる父だった。父には騎士道精神を教えられてきた。

優れた戦闘能力と勇気、高潔かつ誠実、信念を貫く強さ。騎士道精神とはそういった、騎士として気高く生きるための象徴的な言葉だった。

アルトリア王国では、何よりも騎士道精神が賞賛され、尊重されるのだ。

一人娘あるリリーナは少女ながら父の期待に応えられるよう、肉体的に精神面ともに鍛錬を積み重ねてきた。

そんな生真面目な性格の騎士姫に対し、国民の信頼は厚かった。騎士としての強さだけでなく、その美貌からも人気があった。

リリーナ自身、年頃にもかかわらず、

色恋沙汰には目もくれず、騎士として一人前になることを第一目標としていた。

騎士道に生きることが、何よりも優先すべきことだと信じている。

父は身をもって、最後の最後まで騎士道を体現したのだ。

そう思うしかなかった。

残された騎士姫リリーナは国のために立ち上がった。国民の期待を一身に背負い、再度、精鋭部隊を編成し、巨人族の討伐へと向かった。

そうして、郊外にある巨人族の住み処と思われる岩場についたのが、ほんの数分前の出来事。

崖の間に身を隠すようにじっと、体座りをしてしていた巨人族が、人間達の姿を見ると立ち上がった。

騎士達は皆、做うかのように巨人族を見上げた。

全長三十メートルはあるだろうか。無造作に生やしたボサボサの髪。なんの感情もない大きな瞳。人間を巨大化させただけの肉体は筋肉質であり、綺麗な逆三角形のシルエット。このサイズに合う服などあるはずがなく、当然のように全裸だった。

何も武装はしていないはずなのに、人間とは比べ物にならないくらい太く筋肉の詰まった両腕と、人間なんぞ簡単に踏み潰せそうな脚は、見るからに凶器だった。

そして、両脚の間には大木のような男性器がぶら下がっている。陰毛は一

切生えていなくて、根元から先端まで隠すことなく巨根を晒している。

(オ、オチンチンってこんなに大きなモノなの……)

父のですら見たことのない、生娘のリリーナは少し戸惑う。

ただ、そこからはあつという間の出来事だった。

まずは乗ってきた馬達が本能的に怯え、暴れだした。訓練し、飼い主達と心通わせてきたはずだったが、本能的に巨人族に畏怖していた。

「どうっ！ どうっ！」

騎士達は皆、なんとか収めようとす

るものの、暴走する馬に振り落とされ

てしまう。

「きやうっ！」

そうして、騎士達の抑制をなくした馬達は一目散に逃げ出してしまった。

それでも、精鋭された勇敢な騎士達は巨人族に立ち向かっていく。

ただ、幾ら切りかかろうとも、巨人族にまともなダメージは与えられない。

巨人族は目の前でちよっかいを出してくる人間達を両腕で薙ぎ払う。

見かけによらず、素早かった。

単調な攻撃にもかかわらず、圧倒的な攻撃範囲。

きつと、人間でいうところの不愉快な蚊を叩き潰すような感覚なのだろう。

巨大なプロペラに引き裂かれるかのように、幾人もの騎士達があつさり

と殺された。

その光景に唾然とするうちに、違う

騎士達が巨人族に踏み潰され騎士道を全うし、生涯を終えていく。

「姫様、お逃げください。やはり、巨人族と戦ってはなりません……がうううっ！」

「逃げてくだされええっ！」

「自分らが時間を稼ぎますから……あつ！ あああああ！」

「姫様あああああつ！ 助けてえええっ！」

リリーナの目の前で次々に信頼する騎士達が無残にも殺戮されていく。

彼らにも家族が居て、帰りを待つ人がいる。

それがあつさり」と掌で握り潰され、絶叫しながら、巨人族の口内に飲み込まれていく。

巨人族はごっくんと喉を鳴らし、実に美味しそうに、人間を飲み込んでいく。

その瞬間だけ、無表情ではなくなり、すべての欲求が満たされた赤ん坊のようにニコッと無邪気な笑顔を浮かべる。

何かおかしいのか。

何か嬉しいのか。

リリーナは怒りで我を忘れ、巨人族に切りかかった。

「たあああつ！」

アキレス腱を狙った鋭い斬撃は、巨人の肉を切り裂く。

「びぎやうううっ！」

初めて悲鳴を聞いた。思っていたよりも甲高い声だった。

(まずは動きを奪う)



巨大な脚の甲がリリーナを襲うが、あつさりど避ける。その敏捷性に巨人族もついていけない。

目の前を巨大な脚が通り抜け、辺りの空気が引き裂かれる。そのあまりの風圧で体勢が崩れてしまう。

(まずいっ！)

リリーナの危機を救うため、一人の若い騎士が駆け寄ってくる。

「たとえ、巨人族にどれだけ荒らされたとしても、姫様さえご無事であれば、アルトリア王国は存続します。ですから、どうか、この場はお逃げください」

「心配ありがとう。しかし、私は騎士道を追求する者として、皆とともに……」

最後まで戦う、と言おうとしたところ、若い騎士は巨人族にボールのように蹴られ、遠くに飛ばされた。

おそらく、一瞬で絶命したであろう。本人も何が起こったか理解する前に。

彼は出陣前に婚約している恋人がいて、近々結婚すると言っていた。それがたつた今、叶わぬ夢となった。

立ち尽くすリリーナ。巨人族が腰を曲げ、覗き込んでくる。ぼんやりとした虚ろな双眸と目が合う。

脚が凍んで動けなかった。騎士姫は軽々と指先で摘まれ、あつさりど巨族の口の中に放り込まれた。

先に口内にいた騎士達が巨大な歯に磨り潰され、細切れにされていた。「くうっ！」

巨大な歯と歯で挟まれ、噛み切られる直前、リリーナは自ら喉奥に飛び込み、胃の中へと逃げ込んだ。

リリーナは瞳を見開き、再び、胃粘膜を見つめる。

(まさか巨人族の生命力、戦闘力がこれほどまでとは……)

改めて、認識の甘さを思い直す。

だが、彼女は諦める訳にはいかない。(さっきの戦闘では何もできなかったが、次こそはっ！)

動揺していた精神は、今は落ち着きを取り戻している。

騎士道精神のもと、最後まで正々堂々、誇り高く立ち向かう。

(私は国のため、国民のため、身体が動かなくなるまで戦うだけ……)

それが彼女の信じている騎士道だった。自分が生きている限り、この国は終わらせない。

「たあああっ！」  
かけ声とともに、リリーナは胃粘膜を刃で切りつける。

だが、鋭い剣撃も予想以上に分厚い胃粘膜にめり込んだだけ。

(まったく効いていない……)  
リリーナは刃を引き抜き、一考する。強烈な胃酸が降り注ぎ、甲胃が少しだけ溶けた。

(このままでは、本格的にまずいわね) ドシャッと、音を立てて頭上から何が落ちてきた。新たに犠牲になった騎士だった。すでに命はなく、口内で

存分に咀嚼されてきたのだろう。誰なのかもわからない。

一歩間違えば、自分もこうなっていたのかと思うと、両脚が震える。

(しつかりしなさい、リリーナ。これまで犠牲になっていた兵士達の努力を無にするつもりですか……)

自分に言い聞かせる。幾ら、騎士姫であろうとも、まだ少女といっても通用するような年齢。

彼女は深呼吸一つ、気合を入れて、その震えを押しさえ込む。日頃の鍛錬の結果だった。

(まずは出口を探さないと……)  
胃の中に居るのは得策ではない。なんとか脱出して、隣国に援軍を頼まないと。

(いつ国境を超え、侵略を始めるかわからないと言えば、少しは協力してくれるはず……)

何せ相手は言語能力もなく、交渉や意思疎通は不可能なのだ。

そうして、広大な胃の中を再度、出口を求めてさ迷いだす。

しかし、どれだけ歩いても出てくるのは、犠牲者達の溶けかけの骨、肉、臓物。リリーナはそれらの死屍累々を超えていく。

(あなた達の無念は、必ず晴らしますから……)

リリーナは強く思い、固い決心をすする。そんな数々の死体の中、キラリと蒼く光る何かが目まっていた。(こ、これは……)

リリーナは臓物を掻き分け、丁寧に拾い上げて、胃液を拭う。

父が身につけていたモノだった。王様のお守り、王の証である蒼い宝石。

ここにあるということは、父が胃の中で溶解され、死んでいった証拠だった。

(ああ、お父様……)

リリーナはそっと、胸元にしまう。すると不思議なことに、戦う気力が湧いて出る。見上げると、ちょうど光が差し込んでいた。

「たあああっ！」  
リリーナは食道の凹凸を利用し、駆け上がる。

抜群の運動能力を誇る騎士姫にとつて、造作もないことだった。

すると、せつかく取り込んだ食物を放すまいと、幾多もの繊毛触手が襲いかかってくる。

「こんなもの、なんてことないっ！」  
騎士姫はそれらを自慢の剣技で切り裂いていく。

真つ二つにされた触手から粘液が勢いよく噴出し、降り注ぐ。

相手が巨人族でさえなければ、騎士姫は無類の強さを誇る。数えきれないほどの繊毛触手を叩き切り、リリーナは軽やかに巨人族の食道を駆け上がった。

リリーナは咽喉付近で立ち止まり、額や首筋にこびりついた粘液を、空いている手で拭う。身体中至る所に、張

りついて気持ちが悪かった。

(無事に帰れたのなら、まずはお風呂で半身浴ね)

少しでも楽しい想像をして、精神的余裕を持ちたかった。

しかし、それまでひっそりと息づいていた巨大な舌がゾロリと動きだした。

(気づかれたっ！)

巨人族からしてみれば、口内の異物、歯と歯に挟まってしまった食べカスを綺麗にする程度のことなのだろう。

「きゃううっ！」

逃げようとした矢先、滑った粘液に足を滑らせ、舌の付け根付近にあるちよとした窪みに落ちてしまう。

「しまったっ！」

その勢いで刀も手放してしまった。

そこはちょうど、唾液腺がある箇所なのか、大量に溜まっていた唾液の中にポチャんと、ダイブする羽目になる。窪みはリリーナのために用意されていたかのように、尻餅をつく綺麗に細腰まで浸かり、半身浴しているみたいになった。

甲冑の隙間から、衣服の僅かな隙間から巨人族の唾液が入り込んでくる。下着もニーソックスもなんの意味もなく、ドロドロとした液体に一瞬にして侵食され、直接、柔肌が触れ合う。

立ち昇る甘酸っぱい香りと包み込まれるような生暖かさは、お世辞にも数秒前に思い浮かべた心地よい半身浴とはいえなかった。

(自分の唾液ですら……こんなにも触

れたことがないのに……)

巨人族の唾液は人間と比べてもやたらと、べたつきが強く、不快感が強い。

比較するように己の口内に溜まった唾液を飲み込むも、明らかに粘着力が強かった。

試しに、自分が浸かっている液体を片手で掬い上げてみると、ドロリと信じられないほど粘り強く糸を引く。

それはいつかの夜、ベッドの上で下半身の疼き感じ、股間を撫でた際に染み出た粘液に酷く似ていた。

巨人族が口内を動き回る謎の物体がなんなのか確かめようと舌先を伸ばしてくる。

(これは……本格的にまずい)

危機感を抱くものの、こうなってしまうのは、変に刺激するのも危うい。リリーナは刑の執行を待つ死刑囚のように動けなかった。

ピチヨリと、頬を巨大な舌で舐められた。生暖かな生肉を押しつけられたような気持ちの悪さ。

(ひいひいっ！)

湿った肉塊粘膜がリリーナの顔を正面から、ピタッと捉える。

細頸から唇、鼻梁を通り、額まで味わうように舐め上げられる。

過ぎ去ったあとには、粘着質な唾液がへばりつく。

瑞々しい肌をトロリと伝いながらも、首筋を垂れ落ち、胸元や鳩尾、脇腹にまで進入してくる。敏感な肌はその幾重にも分かれた軌道をたやすく感じる

ことができた。

(いやあああああつ！)

リリーナは瞳を閉じて、必死に耐えようとしますが、それが余計に肌を敏感にさせる。スリムにもかかわらず成熟した肉体を優しく撫でられたような、むず痒い感触が上半身のあらゆる箇所を走り抜ける。

巨人族は異物の形を確かめるように、何度も舐め回してくる。

びちゃり、びちゃり、べちゃり。恐怖心を煽るかのように、唾液と柔肌絡み合う音が閉じた空間に大きく鳴り響く。

(うっ！ ううううううっ！ もう……早く終わらなさいよ……)

隙を見て、両手で顔面を拭うものの、またすぐに舌先で撫で上げられて気色の悪い粘液が付着する。

どうやら巨人族はリリーナの柔らかい感触を気に入った様子だ。

巨人族の舌先はさらに降りていき、華奢な肉体を守っている甲冑に行き当たった。この硬い感触が気に入らなかつたのか、花びらを一枚一枚ちぎるように、甲冑を剥ぎ取っていく。

(な、何をしようというの……)

リリーナは不安な気持ちになりながらも、何もできない。

甲冑を破壊され、その下に着ていた軍服姿となる。すると、強引に舌で足元から掬われた。

「きゃううっ！」

結果、巨人族の舌の上に内股座りをする形になってしまう。じんわりと唾液が滲む温かな肉塊の上で、綺麗に整った前歯の付近まで差し出される。固い甲冑がなくなり、歯触りもよくなったところで、このまま磨り潰されしまふのだろうか。

「ああ……」

リリーナは顔面蒼白になる。絶望的な状況に、自らの命を諦めようとした時、ふと母親のことを思い出した。

(ああ……お母様……)

今こそ、床に臥せているものの、当時、素敵な笑顔で夫婦円満の秘訣を語ってくれた。

『本当に好きな相手ができた時に試しなさい。どんな男性もリリーナの虜になるに違いないわ。他にも口内には意外と性感帯が多いのだから、自分で探して試してみなさい』

この技で父のことを落としたのよ、自慢気に話していた。

母とリリーナの女同士、二人だけの秘密。

(仕方ない、これは仕方ないこと。私が生き残るためには……私にはまだやるべきことがあるのだから)

リリーナは立ち上がり、爪先立ちになって背伸びをする。綺麗に整い、人間を噛み砕くには十分な威力を持つ前歯の裏側、生え際の歯茎に小さな舌を伸ばし、ペロリ、と舐め上げた。

とっておきの性技に巨人族はビクンと身体を震わせ、動かなくなる。



詳しくは知らないが、ここには過敏な神経が通っているらしい。

母に言われてから、気になって自分のソコを優しく舐め上げたことがあった。

すると、妖しい感触が口蓋から下腹部まで一瞬にして流れ、股下に熱を持ったのだ。

癖になりそうで怖く、以来、一度もやっていない。

(人間と身体の作りは同じみたいね)

リリーナとしても実際に他人に行うのは、初めてだったが成功したようだが好きでもない、ましては父や騎士達の恨みとなる相手に披露するのは、屈辱的だったが、生き残るためには仕方ないことだった。

人間、死を恐怖にすると、なんでもできるものだと、情けないながらにリリーナは思った。

そのまま媚びるように、敏感な神経の上に何度も舌を這わす。

柔らかな粘膜同士の触れ合いに、女の本能がときめく。

(ちよっとしたキスみたいで、照れるわね)

リリーナの頬が自然と朱色に染まる。唾液には浸かったものの、直接的に、粘膜同士が触れ合ったのは、これが初めてである。

(きつと、彼も同じような心境じゃないのかしら……)

巨人族は心地よさそうに身を委ねている。

年頃の少女が憧れる恋人同士の初々しいキスではないものの、初めての人というのは、やはり特別な感情を抱いてしまう。

騎士道に忠実に生きてきたリリーナの深層心理に埋もれていた少女の部分がじわりと、浮かび上がってくる。

懸命に舌を動かしながら続けていると、それまで、大人しくしていた肉舌が急に動きだす。

「ひいっ！」

リリーナは何をされるのかわからず、悲鳴を漏らしてしまう。

舌の中央付近に乗せられると、そのまま巨大な舌でぐるぐる巻きにされてしまう。ねっとりとした唾液と鼻が曲がりそうな異臭の中、巨大な肉塊で全身を包まれる。

綺麗に手入れされた髪の毛先から、首筋や、背中、太腿、脚の指先一本まで全身唾液漬けにされる。

(コイツうううっ！ いいかげんになさいつ！)

リリーナは暴れだしたくなるもの、なんとか我慢する。

今はチャンスが来るのを待つしかない。

(だつて、今、コイツは私を殺す気がないはず)

巨人族にとつて、これはよくやったと褒美のつもりなのかもしれない。

巨人族の口内で芋虫のような体勢になりながらも、リリーナの目つきは凛々しいままだ。絶望的な状況ではあ

るものの、少しも諦めてはいない。

巨人族は騎士姫のしなやかな肉体の感触が気に入ったのか、鉛玉をしゃぶるように舐がしてくる。

日頃の鍛錬で磨き上げられた肉体は、筋力がありながらも、女性としての艶やかさが加味されている。さらに初々しいキメ細かな柔肌はどんな液体でも弾くのだ。

「ほううっ！ ほおううっ！」

巨人族はリリーナを舌上で舐がしながら息を荒らげる。今までにない、人間との触れ合いに興奮を覚えているようだった。

(ぐううううっ！ コイツ……私が女だということに気づいたのかしら)

巨大な肉舌でもみくちゃにされ、リリーナは視界の揺らぎに目が回りそうになる。

軍服のボタンが弾け飛び、無理矢理引つ張られた布繊維はあつという間に破かれた。スカートも似たような勢いに任せて脱がされ、戦闘するにはなんとも頼りない下着姿になる。

生真面目なリリーナらしい、清楚で質素な絹の白いショーツとお揃いのブラジャー。騎士姫らしい引き締まった肉体によく似合い、眩い美しさを誇っていた。

(どうせ、あんな風に濡れた服、二度と着ることはないわ)

当然、羞恥心もあるが、今はそれどころではない。

強がるものの、その一方で何も有効

な打開策はない。

ただただ、舐め上げられる屈辱にリリーナのプライドが打ち震える。

騎士姫としてだけではなく、人間としての尊厳まで剥奪されている気がした。

(くうううっ！ これじゃ、私がただの着せ替え人形みたいじゃない)

巨大な舌に弄ばれながら、リリーナは幼い頃、父から貰った可愛らしい人形のことを思い出した。

城の中にリリーナの遊び相手はいなく、自分一人で人形を動かしながらこの子とおしゃべりできたり、思い通りに動いて一緒に遊んでくれたらいいなど思ったことがあった。

今の巨人族が、まさにそんな気持ちなのだろうか。

(ひよっとしてこの巨人族、寂しがり屋なのかしら……)

「フへへへ」

(身体が大きいだけで、まだまだ精神年齢の低い子供なの?)

巨人の口から漏れたご機嫌な笑い声に、リリーナはそう思った。

(一体、私をどうするつもり……)

リリーナは不安がる。

巨大な肉舌は、その見かけ通り力強く、リリーナの力では逆らうことができない。

身動きの取れない芋虫のような格好のまま、しばらく染み出てくる唾液漬けにされていた。

「きゃうっ！」

かと思うと、うつ伏せのまま、ニユルリと押し出され、開きっぱなしの下唇の上に乗せられ、上半身だけ口外に出された。

(な、なんなのっ！)

久しぶりに新鮮な空気を吸えたのは嬉しかったが、眼下に広がったのは、アルトリア王国の城下町だった。

見晴らしがいいなんて、思っていたら、それほど余裕はない。

どうやら口の中で囮られている間に、移動していたようだ。

(飲み込まれる前に、傷つけた両足の傷はとくに回復しているのね……)

巨人族にしてみたら、きつと、鉛玉でも舐めながら、軽く散歩でもした気分なのだろう。

「お、おいっ！ なんだ、ありゃあ、リリーナ様じゃないか？」

「巨人族の口元にリリーナ様がいらっしやるぞっ！」

「本当だ。おいっ！ みんなでお姫様を助けようぜっ！」

怯えながらも多数の民衆が巨人族に立ち向かおうとしていた。

(ダメっ！ コイツには普通に戦ったって勝てないっ！ 何か新たな武器や戦術を考えるか、隣国に助けを求めないと……)

みんな逃げて……と叫ぼうとした瞬間、両脚の隙間に、舌先が潜り込んで来た。

生暖かい粘液でぬめる巨大な芋虫の

ような質感をした長い舌が、徐々に内股をせりあがり、女の中心に近づいてくる。

「ひいいいっ！」

その気持ち悪い感触に、リリーナの顔が恐怖に引きつる。

一度、進入を許すと、どれだけ力を入れようと、両脚を閉じることは不可能だった。

「この野郎っ！ リリーナ様を放しやがれっ！」

民衆が巨人族に切りかかるが、硬質の肌にかすり傷一つつけられない。

「ふー、へへへへ」

巨人族は民衆の攻撃など気にせず、不気味な笑い声を上げながら、リリーナの肉体を囮り始める。

びちゅりっ！ と、湿った音を立てて、舌先が股間に触れた。

大量の唾液の前では、下着なんぞ意味はなく、直接、女性器に染み込んでくる。

びちゅりっ！ びちゅりっ！ 重量感のある巨大な肉塊を押し当てられる。

リリーナに男性経験があったのなら、巨大な肉棒を連想しただろうが、王族なこともあり、異性と付き合ったことはおろか、デートの経験すらない。

彼女は騎士道を追求することに夢中な穢れを知らない無知な処女だった。

(ひいいいっ！ 気持ち悪い！)

巨人族はぐちより、ぐりりと、媚肉の感触を確かめるように何度も押し

当ててくる。舌の大きさから女性器と肛門が一掃に刺激されてしまう。

(いやあああっ！ そんなところまで汚いのにいっ！)

今の今まで、他人には触れられたことのない部位。

リリーナ自身も廁にいったあとでさえ、抑え目に拭くし、お風呂で洗う時だって、遠慮気味なのだ。

他人に舐められるという不慣れで、初めての感触に寒気が走る。だが、それとともに、リリーナの股間に妖しい感覚が芽生えだす。

(な、なんなの……この下腹部の変な疼きは……)

騎士姫である自分が巨人族に舐められて感じているだなんて思いもしない。

リリーナにもう少し性知識があったのなら、散々浸からされた唾液の中に含まれる雄ホルモンの作用より、発情状態にさせられ、感度が高まっていることに気づいたかもしれない。

性経験のない若い女性体は、確実にどす黒い情欲の炎が燃え盛りだしていた。

内腿から股間一帯をゆっくりと、力強く舐め上げられる。

尻穴から会陰、びっちり閉じられている大陰唇まで一遍に舐られる。

一度に刺激される領域が大き過ぎて、どこが妖しい感触の発生源なのかかわからず、我慢のしようもない。

今まで、禁欲的な生活をしてきたことも仇になっていた。

快楽の制御の仕方を知らず、ただた

だ困惑する。

発情させられてしまったら最後、後戻りできない絶頂までの一方通行。

リリーナは走り抜ける快楽を理解できないままビクンビクンと、全身を震わせる。

「くっ！ くううっ！」

顔を伏せて、表情を隠す。菌を食いしばり、喘ぎ声を漏らすのを必死に耐える。

(こ、こんな変な声を漏らしてしまつたら、国民に不信感を与えてしまう) ぐちゅり、ぐちゅり。

巨人族は熱心に舌を動かし、処女の股間を熱心に、執拗なまでに舐め上げてくる。

粘液に浸り火照った肉体はすべての刺激に対して、敏感になっている。

次第に、巨人族の唾液とは違った粘り気のある潤滑油が初々しい陰唇からじんわりと、滲み出る。

(このさつきから股間にビリビリと走るのは……まさか……)

ついに肉体が性快楽に反応していることを自覚する。

リリーナも処女とはいえず、子供の作り方やそういつた快楽のために行う性交渉があることは知っている。

(女性達はいつもこんな風に、男性から愛されて、アソコの刺激を楽しんでいるの……)

だとしたら、騎士道などに興味が湧かない女性がいるのも納得できる。だ

って、熟れた肉体が自然と喜んで



公開ネットオークションにかげられ、  
凛々しき変身ヒロインは花奴隷に……!?



蒼天使  
アオイ  
恥辱の公開オークション

小説 / あらおし悠 ゆう 挿絵 / 未来電機 みらいでんき



「か、怪物だー！」  
休日の買い物客で賑わうビル街に、突如、怒号と悲鳴が轟き渡った。

逃げまどう人々を追い立てているのは、下半身は人間で、上半身が鳥賊を模した異形の怪人。自在に伸びる十本の触腕を振り回し、その柔軟な見た目からは想像できない力で、車を投げ飛ばし、街灯を薙ぎ倒す。

その後から、黒づくめの女性が鞭を振るいながら悠然と現われた。羽仮面をつけ、背中に蝙蝠のような羽を生やした扇情的なボンデージは、まるでSMの女王様だ。

「いいわよ。もつと暴れなさい鳥賊怪人！」

「きゃしゃしゃしゃあああつ！」

鳥賊怪人は女幹部の命令に応え、気味の悪い高笑い無軌道に破壊活動を繰り返す。

「それまでよ！」

だがそれを、少女の声が遮った。凛々しくも愛らしい音色が、コンクリートのビルの谷間で幾重にもこだまする。鳥賊怪人だけでなく、パニックに陥っていた人々も、声の主を探して頭上を見上げる。

「あそこだ！」

その姿は、まるで天使が舞い降りたかのようなだった。眩い陽光を背に浴びて、デパートの屋上に小柄なシルエツトが浮かび上がる。

「蒼天使アオイ！ あなたに天罰、くだします！」

どこか幼さを残す容貌の少女は、手にしたスティックを高々と掲げる大袈裟なポーズで名乗りを上げた。恐怖に支配されていた群衆の悲鳴が、一転、歓声に早変わりする。

「アオイだ！ アオイが来てくれたぞー！」

それもそのはず。彼女は、人々を襲う怪人を倒して街の平和を守る「正義の味方」なのだから。

正体不明のヒロインだが、その容姿と活躍で今や

人気は不動のものに。登場を待ち望んでいたように、カメラを向ける者も少なくない。

「いいぞアオイー！」「今日も怪人ぶっ倒せー！」

「はーい。このアオイにお任せよ。たあ!!」

人々の声に應えて、アオイが地上に降り立った。羽飾りを左右に立てた、緋色のショートボブが風に揺れる。肩なしワンピースのコスチュームは、空の色より鮮やかなブルー。超ミニの裾が派手にめくられて、純白のアンダーウェアで観衆の、特に男性陣の眼を一瞬だけ楽しませた。

スーツ前面を大胆にカットしたデザインは、およそ戦闘向きとは思えない。小柄な身体には不釣り合いなほど豊かに実った乳房から、綺麗な縦長のヘソまでが丸見えだ。しかし見た目は裏腹の、ハイテクノロジの塊であるこの戦闘服で、アオイは数々の怪人を打ち倒してきたのだった。

「出たわね蒼天使。今日こそは、絶対にあなたを倒してあげる！」

「ふふん、今回も返り討ちよ！」

苦々しく顔を歪める仮面の女幹部に対し、アオイは大きくて勝ち気な瞳を不敵な笑みで輝かせた。クイツと捻った腰に手を当て、スティックを一回転、女幹部にビシッと向ける。

その瞬間を待っていたように、周囲のカメラが一斉にシャッターを切った。小雨のように降り注ぐ軽やかな音が、アオイに我知らず恍惚の表情を浮かべさせる。みんなの視線で身体が芯から火照る。

「覚悟なさい。今日は一気に決めちゃらわよ！」

「小娘のくせに生意気な！ やつておしまい!!」

女幹部の命令で鳥賊怪人が襲いかかる。しかしアオイは慌てることなく、羽のモチーフのスティックを頭上に振り上げた。表情を引き締め鋭く叫ぶ。

「神罰執行！ セラフイムサンダーッ!!」

「ぎやああああ!!」

雷光一閃。降り降ろした武器が、先端から強烈な電撃を放つ。その直撃で鳥賊怪人は爆散。派手な爆発と共に跡形もなく消し飛んだ。

「蒼天使アオイ、悪は絶対許さない！」

くるつとターンで振り返り、ファンサービス。

(あはあ……。これ、やつぱり気持ちいい……)

正直、特撮やアニメなどをあまり観ない身には、大仰な必殺技もポーズも決めゼリフも、最初は恥ずかしいを通り越して痛々しかった。自分で進んで始めたのではなく、正義の味方なら当然の義務と、所属組織に強要されていたからだ。

普通の学生だった葵が正義の変身ヒロインになったのは、ちょうど一年前。当時は別の変身ヒロインが活躍していたのだが、敵に敗れて行方不明。その後、秘密の防衛隊にスカウトされたのだった。

相手は気味悪い怪人だし、露出の高いコスチュームも恥ずかしくなかったけど、戦いを繰り返すうち、身も心も、すっかり正義の味方に嵌まっていた。

「……それにしても、今日のはいっになく手応えがないわね」

先輩の跡を継ぎ、すっかり街の人気者となったアオイだったが、戦いの後、いつも疑問に思うことがあった。

「こんなに街をメチャクチャにして……。こいつらつてば毎回毎回、何がしたいのかしら」

整った眉をわずかに寄せながら首を傾げた。怪人どもは、定期的に街に現れ破壊活動を繰り返している。逆に言えば、それしかりしていない。きつと何か目的があるはずなのだが、このスーツを与えてくれた防衛隊からも、まだ何も聞かされていない。

しかし、疑問の芽は群衆の悲鳴に掻き消れた。

「アオイ、危ない！」

空気を裂いて唸る鞭の音。女幹部の攻撃だと即座に察し、スティックで受けようとする。だが――。



「か……身体が……!? きゃああああ!!」  
反応が遅れたアオイの背中に、容赦なく鞭が叩きつけられた。小柄な身体が吹っ飛んで、全身に走る激痛に悶絶しながらピルの谷間の車道を転がる。  
「かはっ……げほっ!!」

たった一撃なのに、打撃と共に放たれた電撃で身体が痺れて動かない。だがそれよりも、アオイはもっと重大な異常に戸惑っていた。  
「ス、スーツが……重い……?」

いつもなら羽のように軽やかな紺碧のバトルスーツが、鉛のように重い。震える腕で身体を支え、顔を上げたアオイは戦慄した。目の前に女幹部が立っている。背筋がゾクッと冷たくなる。彼女には怪人を倒された焦りなど微塵もなく、真つ赤なルージュの唇に、淫靡な笑みさえ浮かべている。  
「こ、この……セラフイムサンダー!!」

焦って振ったスティックは、しかし沈黙したままだった。雷鳴は轟かず、何の反応も示さない。スーツも武器も、完全に機能を停止している。  
「ど……どうして……」

愕然とするアオイを見下ろし、女幹部は再び電撃鞭を振り上げた。  
「残念だったわね。着天使アオイは、今日で最終回つてことよ!」

「きゃああああ!!」  
逃げる暇さえなく、鞭が身体に絡みつく。さつきとは比べ物にならない激痛が全身を貫いて、アオイは意識を失った。

「——お目覚め?」  
最悪だ。アオイは思った。意識を取り戻すなり、女幹部の声を聞かされるなんて。彼女は、派手なボンデー衣装には不釣り合いなパイプ椅子で脚を組み、前屈みでからかうように笑いかける。

キツと睨みつけたアオイだったが、息苦しさに喉に手を当て、自分の現状を思い知らされた。  
喉に首輪が嵌められている。両手首にも手枷が嵌められて、三方向に伸びた鎖が、それぞれ壁のコンクリートに固定されている。

アオイは、膝立ちの状態で拘束されていた。焦りに鼓動をはね上げながら、それでも周囲に視線を巡らせ観察する。そして、自分が監禁されている場所に違和感を覚えた。あんな奇妙な怪人を送り出すような組織にしては、ガランとした普通の倉庫にしか見えない。  
しかし、ここが彼らの拠点であることは間違いないようだ。なぜならば。

「ど、どうしてあなたたちが……!!」  
今まで倒した怪人どもがアオイを取り囲んでいたからだ。ついさつき爆散したはずの鳥賊怪人も、無傷の姿で嘲笑うように上半身を揺らしている。

もっと奇妙なことに、彼らはアオイに攻撃しようとはせず、いそいそと機械類を設置し始めた。アオイを中心にビデオカメラを並べ、映り具合をパソコンモニターで確かめている。

異形の姿が、ありふれた撮影準備の作業にいそしんでいる。それが逆に、胸の奥で得体の知れない恐怖を湧き上がらせた。  
「は……放して! これを外しなさい!!」  
焦燥で内腿を擦りあわせながら、鎖をじやらじやら鳴らして必死にあがく。もしスーツの機能が正常ならば、こんな鎖、容易に引きちぎれただろう。だがそうでない今は、ただの非力な少女にすぎない。

「あらあら大変そう。手伝ってあげるわ」  
泣きそうな顔のアオイを嘲笑い、女幹部はスティックを投げてよこした。慌ててそれを拾うけれど、幾度もアオイの危機を救ってきた愛用の武器は、やはり何も応えてくれない。

「どうして……どうして動かないの!?!」  
「動くわけないわ。スーツも武器も、私が機能を止めているんだもの」  
「ど……どういうこと……? ふ、ふん。どうせハッターでしょ。武器なんかなくなつて、あなたたちに負けたりしないわ!」  
敵である彼女に、スーツや武器をコントロールできるはずがない。拘束されてなお闘争心を失わないアオイを、女幹部は不気味な笑みで見下ろした。  
「いいわ。証拠を見せてあげる」  
そう言うなり、彼女は掌に握っていた小さなスイッチを押す。異変は、すぐに現われた。  
「え……何? あ……ああッ!?!」  
アオイは再び混乱に陥る。スーツが、まるでゴム風船が萎むように縮み始めたのだ。  
「き、きつい……こんな、ン……ああッ!!」  
まるで持ち主を絞め殺そうとするように、じわじわと締めつける正義のスーツ。ピツタリと肌に張りついて、アオイの成熟しきっていない身体のラインを、あますところなく浮き上がらせる。  
「やめ……やめ……て! ど、どうしてスーツにこんな機能が……何であなたが……ああッ!」  
「あら、意外といいプロポジションしてるのね」  
肉づきの薄いお腹。あまりくびれてはいないけれど、少女らしい柔らかなラインを描く腰。小振りでもまるやかな自慢のお尻。そして、スーツに押し潰されてもポリウム感を失わない、豊かな乳房。乳首どころか乳輪の膨らみさえ浮き彫りになる様を見せつけられ、あまりの恥ずかしさに身体が凍む。  
「ふふ、これだけじゃないわ。他にも、あなたの知らない機能を、私はみーんな知ってる」  
どういうことだろう。しかし疑問を追及しようにも、そんな場合ではなくなっていた。白いアンダーウェアまでが縮み出す。スカートが短くなつたせい

「どうして……どうして動かないの!?!」  
「動くわけないわ。スーツも武器も、私が機能を止めているんだもの」  
「ど……どういうこと……? ふ、ふん。どうせハッターでしょ。武器なんかなくなつて、あなたたちに負けたりしないわ!」  
敵である彼女に、スーツや武器をコントロールできるはずがない。拘束されてなお闘争心を失わないアオイを、女幹部は不気味な笑みで見下ろした。  
「いいわ。証拠を見せてあげる」  
そう言うなり、彼女は掌に握っていた小さなスイッチを押す。異変は、すぐに現われた。  
「え……何? あ……ああッ!?!」  
アオイは再び混乱に陥る。スーツが、まるでゴム風船が萎むように縮み始めたのだ。  
「き、きつい……こんな、ン……ああッ!!」  
まるで持ち主を絞め殺そうとするように、じわじわと締めつける正義のスーツ。ピツタリと肌に張りついて、アオイの成熟しきっていない身体のラインを、あますところなく浮き上がらせる。  
「やめ……やめ……て! ど、どうしてスーツにこんな機能が……何であなたが……ああッ!」  
「あら、意外といいプロポジションしてるのね」  
肉づきの薄いお腹。あまりくびれてはいないけれど、少女らしい柔らかなラインを描く腰。小振りでもまるやかな自慢のお尻。そして、スーツに押し潰されてもポリウム感を失わない、豊かな乳房。乳首どころか乳輪の膨らみさえ浮き彫りになる様を見せつけられ、あまりの恥ずかしさに身体が凍む。  
「ふふ、これだけじゃないわ。他にも、あなたの知らない機能を、私はみーんな知ってる」  
どういうことだろう。しかし疑問を追及しようにも、そんな場合ではなくなつていた。白いアンダーウェアまでが縮み出す。スカートが短くなつたせい



で、細くなった股布が恥ずかしい亀裂に食い込むのが丸見え。しかも。

「んふっ、お股のお豆が下着に浮いてる。こんなにはつきり見えるなんて……。ふふ、あなたのクリちゃん、大きい……。小指の爪くらいありそうね」

「やめて！ 見ないでええ!!」

コンプレックスである大きなクリトリスを敵に知られた。隠そうにも、鎖に繋がれてはそれも叶わない。無意味と知りながら、羞恥と悔しさで、お尻を振ることしかできない。

「駄目よ。ちゃんとお客様に見せないと」

「お、お客様……?」

彼女は何を言っているのだろう。屈辱に震えるアオイの腰を、女幹部が抱き寄せた。内腿と、そして下着に浮かぶ陰核を、爪ですると撫で上げる。

「はっ………あああん……」

痺れるような絶妙なタツチに、思わず甘い声が漏れてしまう。ハッとして逸らせたアオイの顔を、女幹部は正面のカメラに向かって強引に捻じ曲げた。

「お客様に見せると言ったでしょう!」

女幹部が、正面のモニターを指差す。そこには、鎖で縛られている惨めな姿のアオイが映し出されていた。そして画面の下部には、謎の数字の羅列。何かの金額のようにも見える。

「さつきは最終回って言ったけれど、あれは嘘。これからが、蒼天使の本番よ」

女幹部はアオイの耳に囁くと、カメラに向かって立ち、大仰な仕種で羽仮面を外した。現われた彼女の素顔に愕然となる。

「あ………あなたは……!」

一年前行方不明になった先代の変身ヒロイン。それがどうして、悪の組織の幹部なんかにか。嘩然となるアオイを横目に、彼女はまるでパティのホストのように、両手を広げて宣言した。

「皆さま、お待ちかね! これよりオークションを開始いたします。本日の目玉は正義のヒロイン、蒼天使アオイの処女を奪う権利です!」

「な……!!」

その瞬間、モニターのスピーカーから、重低音のどよめきが聞こえた。それは紛れもなく期待の声。生唾を飲み込む生々しい気配さえ感じる。

「処女……オークションつて、どういうこと!」

「言った通りよ。あなたはこれからオークションにかけられるの。ご主人様に身体で奉仕する、いやらしい牝奴隷としてね」

先代ヒロインの――女幹部の言葉を裏付けるかのように、モニターの数字が動き始めた。

（売られる……わたしが? ……え?）

まだ事実を受け止められず、呆然と首を傾げる。命懸けの戦闘でも感じたことのない、得体の知れない恐怖が、アオイの背筋をゾクッと凍らせる。

「少し値の動きが鈍いですね。では、蒼天使の凛々しくも可愛い姿を、もつとご覧にいきましょう!」

女幹部の合図で、控えていた怪人どもがアオイに襲いかかった。サソリ怪人のハサミが迫る。身体に張りついていたスーツが、まるで紙きれのように引き裂かれた。

「きゃああああ!!」

弾けるように乳房が飛び出す。窮屈さからの解放を悦ぶように、ぶるんと揺れる白い膨らみと、頂に咲く薄桃色の小さな蕾。それが正面のモニターに大写しになると同時に、入札額が大きく動く。本当にオークションにかけられているのだ。

「嫌! 売られるなんて……そんなイヤアツ!!」

いくら身を振っても、晒された乳房が隠せない。逆にユサユサ揺らして、その重さ豊かさを強調してしまう。不意に、内腿のあたりを何かが這った。背筋にゾクリと悪寒が走って眼を落とす。

「きしゃしゃしゃ……」

「――ひいッ!」

おぞましい笑い声と共に、鳥賊の触腕が脚に絡みついてた。吸盤から分泌した粘液がスーツを溶かす。露わになった肌を流れる粘液が気持ち悪くて、悪寒が嫌悪になる。それでもアオイは、思わず上げそうになった悲鳴を懸命に噛み殺した。首筋をチロチロ舐める。蛇怪人の舌の気味悪さに耐えながら、震える声で精一杯の虚勢を張る。

「わ………わたしを売ろうとしたって無駄なんだから! き、き……きつと、仲間が助けに……」

「来ないわよ」

必死の思いの強がり、かつて正義の味方女幹部はあつさり否定した。

「来るわけないわ。だって、このオークションは最初から――あなたが蒼天使になった時から、決まっていたことだから」

「何ですって!」

呆然とするアオイに、彼女は残酷な事実を突きつける。

「正義の変身ヒロインの所屬している防衛組織と、私たちの組織は同じもの。この意味、分かる?」

ふるふると首を振る。理解しそうな顔を拒むように、思考が鈍っていく。

「あなたは、このオークションのために作られた正義のヒロイン。怪人たちとの戦いも、全部作り物。いわば、オークション参加者に商品を見せるための宣伝番組だったわけ」

「うそ……うそ、そんな馬鹿な……だって……!」

「だって、あなたの倒した怪人たちも死んでないでしょ? あなたが活躍するほど、人気が出るほどスタートの値が高くなる。これはそういうショーなのよ。ふふっ………今度は怪人たちに可愛がられる姿で、お客さんにいい値をつけてもらいなさい」



バネイリの触手に囚われた  
エンジュを待ち受けるのは…!?

# 思春期なアダム

E  
V  
I  
L  
E  
Y  
E  
S

第8話

エ…エンジュ  
大丈夫…!?

サンプリング  
継続スル…Positive

web 版コミックヴァルキリーでも連載中!  
<http://www.comic-valkyrie.com/>

コミックス第1巻  
12月21日発売!!  
思春期なアダム

**天海雪乃**

原作：さかき傘

前号までのあらすじ

すべての女性を支配する“蛇眼”の力に覚醒した睦月。彼を護衛する天使少女エンジュだが、魔族の少年ルシアの罠によってふたりとも囚われてしまう。

バカ睦月！  
こっち見るなって  
言ったでしょ！

は…はやく  
逃げなさ…

ひゃん！

…ねえ睦月ケン  
ジャンケン知ってるよね？  
この世で最も拮抗した勝負…  
それと一緒にさ

天使の炎は浄化の光  
ゆえにボクたち悪魔は  
天使に勝てない

だけど天使は所詮  
生態の原理に沿ってしか  
介在できず  
そのパターンは  
知恵の実を  
食したものの末裔――

つまり  
君たち人間によって  
解析ズミなんだ

逆に人の育んだ智慧しか  
持たないFeTUSには  
生態の限界を超えた  
ボクたち魔族を  
殺すことは不可能





つまり…  
三すくみ…??

そ♪



くっ…

分かるだろ？  
君を守るのには  
ボクだけだって  
ことが

無様だね  
バネイリには  
天使を無力化する機能が  
いくつもついている

すぐに骨抜きになるよ

うわ…



あっ…あの…っ  
やめて…!

なんだろう  
甘い匂いで  
頭がぼーっと  
してくる…

えへへっ  
さっきボクのこと  
心配してくれたよね  
すっごく嬉し  
かったよ

きみ男の子だろ…  
やめてよっ…!

んー？  
いちおう雄生体  
ではあるけど  
どうして？  
ボクのことイヤ？

イヤっていうか  
ほ僕も男なんだよっ

男の子同士だと  
イケナイの？  
ボクは君が  
大好きなのに

ボクの遺伝子は  
蛇眼の持ち主を  
求めている…  
けどそれだけじゃない

君のことを  
調べるうちに  
どんどん  
好きになって  
いったし

このまえ  
初めて会ったときは  
もう心の全部に  
君が住み着いていたよ





……大好き  
睦月クン

……ミカさんの  
唇より薄いけど  
なんだか甘い……

!!



やっ……やめてよ!

ほっ……僕は  
そういう趣味  
ないし……

そのっ……き……  
君とは仲良く  
できないし……

仲良く  
できないってどうして……  
天使たちが  
そう言ったから?

そっ……だよ  
君は蛇眼が  
欲しいんだろ  
それで僕の目を  
くりぬこうと  
して……

……やれやれ  
純粹だな  
人の言うことを  
信じすぎる

さっきも言ったろ  
この世で完全なものは  
神だけなんだ  
絶対に正しいものは  
ひとつしかないんだよ

それは人でも  
ボクら悪魔でも  
そして天使でもない

いいじゃない  
あっちはあっちで  
楽しんでるし  
ボクたちも  
仲良くしようよ

ツッ  
エンジュ!!

ふく……っ  
うう……

んう……



心配はいらないよ  
バネイリが細胞情報や  
骨格構成なんかを  
サンプリングしてるだけ

くすぐったいかも  
しれないけど  
危険はないから

う……んんっ……

にしても……  
見てよ睦月くん  
顔真っ赤にして  
息乱して……

あの女  
オモチャに  
身体まさぐられて  
感じちゃってる  
みたいだよ

そうだ♪  
応援してあげよう

?

しまっ……!!

開け封印  
不浄の魔視よ  
世界の王たる  
証を見せろ……!!





あは…  
やっぱりすごい♡

トコ

エンジュ!!  
大丈夫——

はくろうろう!  
ばっ…ばかあつ!  
呼ぶな……っ  
目えとじてえっ!!

ぽんっ

んん…  
ん…  
……んー

ふあ……!!

ぽん

機械触手に翻弄され  
恥惑の乳房を晒す!

DOURI-COL

# 軍属麗奴のバキ

淫れ散る三戦華

第2話 令嬢の痴演

たかおか ちから

小説  
NOVEL

高岡智空

挿絵  
ILLUSTRATION

にしき  
からすま式



通信機から響く銃声を耳に、ツバキは最大限に周囲を警戒しつつ、外部から建物内を解析する。内部構造、障害物、人の所在と数、それらのデータがセンサーのスクリーンにより、次々と明らかにされた。「生きているなっ、サイネリア！」

『当然ですわ、それより早くスクリーンデータを。内部は障害物が多く、見通しが効きませんの』  
建物内からの通信に、わかっていると短く答え、腕のパネルを操作し、データを送信する。

（本来なら、私も踏み込みたいところだが……見つけなくてもすれば、人質に危険が及ぶ……わかっているさ、これは出撃前に何度も確認したことだ）

自分に言い聞かせながら、建物外からの襲撃に警戒を強めておく。いまの自分は、単独で踏み込んでいるサイネリアの援護が役割だ。

（こちらは任せておけ、万全を期す。だから——）  
センサーを何度も発動させ、それを探知させるわけにもいかない。肉眼で周囲を確認すべく歩きだしたツバキは、もう一度だけ建物を見上げた。  
（無事に戻れよ、サイネリア……リリイ……）

その建物は、古い研究施設の跡地のようだった。窓は割れ、壁の一部は崩れ、すでに使われていないのは明らか、ならば二人はなぜそこにいるのか。それは奪われた仲間、数日前から行方知れずとなっている戦車、リリイの奪還任務だからである。

（いまだに信じられない、あのリリイが……）

彼女が敵国に拉致されたとき、ツバキはまさかと耳を疑った。けれどチームの休暇中、彼女が密かに遂行していた極秘任務のこと、失敗の経緯、そして連絡がつかない状況——それらを司令から聞かされたツバキは事の深刻さを理解し、即座に本格的な捜索へと乗りだしたのである。

（極秘任務か……なぜリリイは、なんの相談もなく

一人で……私たちを、信用できなかったのか？）

彼女の行方を追いつながら、頭の片隅ではずっとそんなことを考えていた。もちろん、命令に従っただけなのだといふことはわかっている。それでもなにか、自分たちに伝わるひと言が欲しかった。

彼女を助けたなら、そういつた想いもきちんと伝えていこう。そう考えてツバキは、もちろんサイネリアも、捜索にはそれまで以上に力を入れた。

けれど、ドリオはかかなり隠密に動いているらしく、なんの進展もないまま二日が経過する。予想以上の難航に焦りが生じ始めたその頃——まるで挑発のように、ドリオから映像通信が届いたのだ。

そこには拘束され意識を失っているリリイの姿が映っており、彼女を拘束しているという建物の位置データ、助けたければサイネリア一人で来いという伝言が、それぞれ添付されていた。人質を取り、一人ずつ呼びだして順に拉致し、かねてよりの淫らな野望を達しようというのだろう。

わざわざ単独で乗り込むのは明らかに危険だ、とはいえ複数で向かうのは、人質への負担となる。

結果、ツバキとサイネリアは策を練り、ツーマンセルで踏み込むことに決めたのだった。

（全部で二十、吹き抜け構造の二階も含めれば、二十五機……ふふ、厳しい戦況ですこと）

外部のツバキから送られたデータを確認し、サイネリアは物陰から敵の気配を窺う。彼らの要求に応じ、中に入ったのは自分だけ。そして、ツバキがいることも気づかれるわけにはいかない以上、この場は一人で切り抜けなければならない。

多対一という厳しい戦況だ、それでもサイネリアは臆するどころか優雅な笑みを湛え、身体感覚と意識をすべて、場の空気に浸透させてゆく。

「さて……ともかく、反撃と参りましょうか」

人質となったりリリイは、三階奥の大部屋に監禁されているようだった。そこにはリリイの識別反応しなく、見張りも含めたすべての兵が、ここでサイネリアを迎え撃っている。つまり、いざとなっても彼女を盾にされることはないはずだ。

（わたくしを捕らえる絶対の自信があるからなのか、別の理由があるのか、塵芥ほどのプライドからくるものなのか……いまは好意的に考えましょう）

潜んだ敵兵への対応を決めると、サイネリアは機体の腰を低くさせ、移動の予備体勢に入る。

「ふうう……つつ……はあああつ！」

呼吸を止め、そこから勢いよく地を蹴り、跳ねるように柱の陰へ飛び込んだ。即座に顔を上げると、想像もしないタイミングで目の前に寄られた二機の操縦手が、両目を驚愕と恐怖に見開いている。彼らもすぐに立て直し、慌てふためきながらも銃口をこちらへ向けようと動いた。けれど——。

「残念、五秒遅かったですわね」

駆け抜け様に鞘から抜いたミドルソードを両手に握り、立ち上がる勢いに乗せて突きだす。刃は操縦手ごと機体を貫通し、僅かの抵抗も許さなかった。

「これで二機……つつ、そして三機目っ！」

こちらに気づき、接近した機体を逆手のソードで返り討ちにする、再び地を蹴って敵影に接する。「時間はかけたくありませんわ、できればそちらからかかってきなさいな……はあああつっ！」

己への鼓舞、敵への威圧を込めて叫び、サイネリアは長いプロンドをなびかせる。敵中に切り込む彼女の両手は、まるでナイフのように軽やかに、重量感あるミドルソードを操っていた。

「ふう、あらかた片付いたかしら……」

数え間違いはない、二十五機を葬った血塗れの鉄塊を軽く払い、鞘に収める。そうして、リリイの状

況を確認すべく、もう一度スキヤンを頼もうと、コンソールから通信機を呼びだした。だが――。

「ツバキ、聞こえていますか？ あら……？」

妙な反応だった。ノイズが混じり、レスポンスがはつきりわかるほどに遅れてくる。通信機の異常ではなく、どこから妨害をされている反応だ。

「これは……ツバキ、応答を！」

察したサイネリアが強く呼びかけると、ノイズで途切れながらはあるが、ツバキの声が届く。

「……っ、まん、サイネ……ンサー、外か……たしは、そちらを……リリイを頼むっ……」

「っ……致し方ありません、了解ですわっ」

ジャマーの発信源を見つけたか、気づかぬうちに援軍に囲まれていたか、どうやら敵を別方向へ引きつける思惑らしい。本来なら索敵を行ってもらい、安全であれば合流してリリイのもとへ向かいたいのだが、こうなれば単独で動くしかなかった。

「こちらが要求を蹴った事実には気づかれるのも、時間の問題……ともかく、急ぎましょうか」

受け取った構造データを頼りに、広い通路を駆け足で進む。機体の足音がうるさく響いても、敵が出てくる様子はない。やはり無人なのだと確信しつつも警戒は怠らず、やがて目的の部屋へ到着する。

「……ここは、また随分と……」

そこは通信と各研究設備の監視を目的とする、モニターだらけの大部屋だった。部屋の様子は円形、弧を描いた長机がいくつも並び、奥へ向かうにつれ段差が低くなる。まるで学会に使われるホールのように、機体が五十は収まりそうなほどに広い。

「っ……リリイ！ いま行きますから！」

その一番奥、壁際で座り込んでいる錆ついた旧型の機体に、口枷をされ、ぐったりと脱力した少女が乗せられていた。呼びかけたサイネリアは、机やモニターを蹴散らしながら、大急ぎで近づくと――

「んんんううう……っつっ！」

「無事のようなね、安心しましたわ」

口枷を施された少女の目元には、隈と涙の跡がくつきりと残っていた。彼女の憔悴と苦悶を痛いほどに感じ、早く保護しなければと、サイネリアは慎重に、かつ迅速に機体の様子を調べた。

「さすがにパワーアームは運ばせませんわ……それに、ここまで錆びていては操縦も不可能かしら」

乗せられたリリイが操縦していない時点で、それは間違いない。なるほど、動かない機体は拘束具と牢屋、両方の役割をこなしていたようだ。

「安心なさい、すぐに助けてあげますよ」

外部操作で搭乗者を離脱させる装置もあるが、おそらくこの様子ではそれも機能していただろうとなれば機体を解体するほか、彼女を自由にする方法はなさそうだった。

「そうね……まずはその口枷を外しましょうか」

ひとまず、呼吸を楽にさせてやるのが先決だ。機体から降りると、後頭部で留められている彼女の口枷に手を伸ばし、拘束の留め具に指をかける。

「んんううっ、んん……っつ！」

ところが、ひどく興奮状態にあるのか彼女は、涙目のまま頭を振り、こちらから逃れようと暴れだす。その仕草に並々ならぬものを感じ、サイネリアは一瞬だけ手を止め、その理由に思考を割いた。

（どうしたというの……まさかっ！ どこかに伏兵がっ……：気配はありませんけれど、さて……）

不意に、ホールの広さと暗がり、不気味な感覚を背筋に伝えてくる。だが、少し前の索敵とはいえず、サイネリアに反応はなかったし、サイネリア自身の感覚も、敵の気配を察知してはいない。

（違うようですね……おそらくこのコが、恐慌状態に陥っているだけだと思えますけれど……）

無理もないことだ、敵国に拉致され拘束され、い

まと同じような状態で数日を過ごしたのだ。触れられることにさえ怯えても、おかしくはない。（そうですわよ……いくら天才とはいえ、このコの精神はまだ成熟には程遠いのですから）

念のために周囲の警戒を続けながら、ようやく最後の留め具を外すと、頭や首に絡みついてきた革ベルトが解けた。言葉と自害を封じため、少女の口内に詰められた異物が、ズルリと抜け落ちる。

（っ……これでは、喉奥まで圧迫して……）

「うぐっ……んぶっ、ごぼっ、げほおっ！」

思った以上に長い棒状の栓が抜け、口端から唾液の塊が垂れ流れた。あの涙目は、その苦悶のためでもあったのか。異物が抜けると同時に流れ込んだ空気にむせ、リリイが嘔吐しながらゲホゲホと咳き込み、細い呼吸を響かせる。

「おっぐ、ひゅっ……サイ、ネっ……だ……」

「？ どうかしましたの、リリイ……っつ!!」

名を呼ばれ、そう問い返した瞬間だった。

「……めっ……ダメっ、逃げて！」

放置され、完全に錆びついていたはずの機体の腕が、裂けるようにパツクリと開く。その内側、本来であれば銃弾などの射出口が備えられた隙間から、銀色に鈍く輝く筒が勢いよく飛び出した。

「なっっ……しま……」

それは、金属の太いコードをシリコンでコーティングした、長い管だった。管はサイネリアの両腕へ幾重にも巻きつき、たちまち自由を奪う。

（そんなっ、錆びていたはずではっ……いえ、違う……なんてこと、この部分だけがっ……）

関節部分や表面は間違いなく錆び、動かせない状態だ。ただ、いま開いたギミック部分だけが入念に手入れされ、稼働するように整備されている。

（さっきのこのコの抵抗は、これを知らせるため……ですが、どうやって動かしたと……まさか！）



聞いたことがある、無人の機体を遠方より操作、あるいは組み込んだ電子頭脳によって自動制御するという研究が、密かに進められている——と。

だが、それはまだ研究段階に過ぎず、実戦投入は不可能というのが、軍部の見解だったはずだ。

（実験段階だとしても、よもやここまで——）

機体の両腕から何十本と伸びる、ホースに似た金属とシリコンの管。そのうちの数本が、関節を効果的に捕らえ、腕は完全に拘束されていた。これらをすべて遠隔操作しているとなると、相当の自由が利くシステムということになる。

「うぐっ、うう……間に、合わなかった……サイネリアまで、こんな……ごめん、なさいっ……」

「落ち着きなさいな、リリイ。ともかく、やるだけのこととは試してみますから……はああっ！」

涙ぐみ謝罪するリリイを落ち着かせながら、サイネリアは踵を踏み鳴らす。仕掛けによってブーツの先端からブレードを飛びださせると、金属コードを狙って勢よく足先を振り上げた。けれど——。

「ぐっ……さすがに金属は無理ですわね……」

ギンツツと刃が弾かれ、先端が曲がるほどの衝撃が脚に響く。おそらくこれは斬れない、半ばそう確信するが、この状況で頼れるのはこの武装だけなのだ。時間が経てば、様子を窺いに敵増援が差し向けられるだろう、悩んでいる場合ではない。

「サ、サイネリアっ、無理しないでっ……」

「安心なさいとっ、言ったでしょう！」

ガツツ、ギンツツと金属に弾かれ、脚には痛みが伝い続ける。そうして十数回ほど渾身の蹴りを見舞った頃、不意にスピーカーが稼働した。

「……っ……それぐらいに……してもらおう……」

「っつ!? なんですよ、いまの声はっ……」

ホールに備えられたスピーカーから、ノイズ混じりの音声が響く。無数のモニターにも電源が入り、

部屋中が微かな明かりにうつすらと照らされた。そして壁の大型スクリーンにはなんと、あらゆる角度から捉えたサイネリアの拘束姿が、リアルタイムの映像となって浮かび上がる。

「ここは、まだ生きた施設でしたのね……」

「そういうことだ。お前のような間抜けな獲物が飛び込むのを待つ、狩り場としてだな」

誰にともなく呟いた言葉に、スピーカーから返事があつた。こちらの音声が、あの映像とともに声の主へ届けられているのだろう。

「覗き見とは趣味の悪いこと、さすがは奴隷商国の国王様ですわ。ねえ、トスカータ陛下？」

「言ってくれるものだな、戦華サイネリアよ」

ノイズの消えた音声に続き、ブウンツと小型モニターへ映像が映り込む。赤毛に赤髭の屈強な大男、軽装ながらもはつきりわかる盛り上がった筋肉に、豪奢なマント。まさしくそれは、悪名高い奴隷商国の王、トスカータドリオだった。

「だが、暴言は慎むことだ……その見苦しい行動もな。お前と、戦華リリイはすでに俺たちの手の中に落ちていて、そのことを理解してもらおうか」

「なにを言っ……」

反射的に言い返そうとした、その矢先——。

「んひっ……あひっ、くああああっ！」

「リリイッ!? どうしましたの、いったい……」

突如、リリイが甲高い悲鳴を響かせ、髪を振り乱しながら激しく身を振る。その悲鳴に驚き、彼女の身体を注意深く観察したサイネリアは、彼女を襲っている異変に気がついた。

「そ、んな……リリイ、その身体……身体の、内側に這っている……それ、はっ……」

サイネリアの四肢を拘束するものと同じ、金属のコードだろう。少女の身体にピッタリと張りつく軍服に、それらが皺と膨らみを生みながら、まるで蛇

のように蠢いてザワザワと這い回っている。

「ふやあああつつ♥ ひっ、やつ、めてえっ！ サイネリアの……仲間の、前ではあ……っつっ！」

軍服の胸元が、蛇がとぐろを巻いたように膨らみ、コードが振動するように跳ね回った。刹那、彼女が言葉を詰まらせ、全身を丸めるように縮めてビクビクと痙攣し、白い肌を瞬く間に朱に染める。

「……りり、リリイ、あなた……まさかっ……」

「ごえ……んっ、ら、さいっ……ごめつ、んっ……サイ、ネリア……っ、うぐっ、うううう……」

「……謝ることなど、なにもありませんわ……リリイこそ、辛かったでしょうに……」

肌の紅潮、荒く甘い息遣いと嬌声、さらには立ち上る汗と性臭。それが女性にとつてどういう反応で、どれほどの恥辱なのかを理解できてしまふ。

（そう……相手は、ドリオなのですから……認めたくなかっただけ、でもきつとそうだと……リリイは、すでに……奴らの手で、汚されて——）

腸が煮えくり返るような思いだった。彼女の境遇に対する深い悲しみ、それを阻止できなかった自分の怒り、そしてそれ以上に湧き上がる敵国への怒り——震えるサイネリアの瞳に、涙が浮かぶ。

「絶対……薬には死なせませんわ、外道！」

拳を強く握り、手に爪を立てて叫んだ。だがその威嚇すら、彼らにとつては嘲笑の対象に過ぎない。

「ふはははっ、口だけは達者ようだな。さてどうする、まだその暴言と抵抗を続けるか？」

「っつ……」

仕掛けを操作して、ブーツに仕込んだ刃を靴底ごとパージする。これでもう、完全に手詰まりだ。

「これでよろしいでしょうっ……リリイの身体を弄ぶのはおやめなさいっ、この下劣漢ども！」

脅迫に屈する結果になったことを、深く恥じ入る。けれどこうしなければ、仲間を守ることはできない。

金髪の美女は己の弱さに憤り、屈辱を押し殺すように唇を強く噛み締める。だが――。

「殊勝で結構なことだ。だが勘違いしてもらっては困るぞ、お前たちの身体はすでに我が国の所有物だ……次はそのことを、理解してもらおうか」

「サイ、ネッ……んひいひいっつっ!! いひいんっ、ひあつ、あつっ……あああああつっ!」

トスカータが告げるや否や、少女の服の下で、またも金属の管が暴れだした。拉致されたときと同じ軍服の、短いスカートの裾から何本もの機械触手が滑り込み、少女の幼い淫唇へ恥辱を注ぎ込む。

「なっつ……約束が違いますわっ!」

「勘違いをするなど言っただろう。それに……人の心配をしている余裕が、お前にあるのか?」

「――っつ!! きやつ、うっ……くううっ!」

新たに伸びだしたコードが、今度は両脚にまで絡みつき、腕と同じように拘束する。

「すでに抵抗できない女相手でも、ここまでしなれば安心できませんのね……まあ、わたくしが相手ともなれば、仕方ないことでしょうけれど」

言葉を選び、相手を貶すのではなく自分を誇示することで、心の平静を保とうとする。けれどそんなサイネリアの言葉を聞いた瞬間、スピーカーに短くノイズが走り、直後にいくつもの声が響いた。

「うひよおつ、気が強え女だ、さすが戦華!」

「それに見ろよ、あのデカパイっ! くううっ、揉みしだいて無茶苦茶にしてやりてえぜ!」

「くひひっ、俺のチンポ思いつきり扱かせてやるからなあ、牝牛ちゃんよおっ!」

「はっ……え、な、なんですのっ……?」

下卑た声に戸惑いを覚え、思わず周囲のモニターをキョロキョロと見回す。そこへ――。

「理解できねえかあ? これからてめえの調教を始めるってことだよ、俺らが見てる前でああ!」

「なっつ……なにを言ってますの、あなたたちは……いったい、なにをするつもりですの!」

モニターに映るのはトスカータだけ、つまり音声はあちこち別の場所から聞こえているのだろう。それらが口々に囁き内容に、底知れぬ欲望を感じ、サイネリアはゾクッと背筋を震わせた。

「ふんっ、聞いての通りだ。まずは抵抗の意思と余力を奪う、底を尽くまで徹底的にな」

「っつ……うっ、やつ……コードが急に……やつ、やめなさいっ! あうっ、ううう……」

長い腕の開閉部からさらにコードが伸び、蛇が鎌首をもたげのように躍りくねって、サイネリアの肌を這いずってゆく。それだけなら問題は無い。けれど、いまの状況をどこの誰とも知れない相手、それもおそらく百人を超える大勢に見られているという状況に、感じたことのない羞恥が込み上げる。

(ひっつ……くうっ、この程度のことです……)

虚勢を張って瞳を鋭く尖らせ、モニター越しに相手を睨むように顔を上げた。だがそうしたサイネリアの反抗的な態度は、彼らの嗜虐欲を、より強く刺激するという結果しか生じさせない。

「くはははは、いい顔だぞ、サイネリア! その悔しそうな顔を、快楽に塗れさせるがいい!」

そう言い残すとトスカータの映像は消え、モニターにはサイネリアとリリーの姿が映しだされた。

「ふざけたことを……誰が、あなたたちの思い通りになんて……くっ、あつ……っつ……」

唇を噛み、あらぬ声もれるのを抑え込む。短いコードは人肌に近い温かさを持って、短いスカートからスルリと、服の内側に滑り込んだ。

「うくっ……こ、のっ、破廉恥なことを……」

四肢を拘束するコードよりも太く、そして温かな感触に嫌な想像を掻き立てられる。想像から意識を遠ざけようとしても、これまでに見知ったドリオの

情報から、どうしてもその印象はぬぐえない。

(こんな……男性器を模したものを、女性に……本当に最低の、下劣な国ですわっ……)

スカートの裾が引っかけられ、辱めるように持ち上げられた。スワットと流れる風の感触に震える肌を、何本もの金属管が撫で回し、下着の上から尻肉をネチネチと捏ねながら、這いずってゆく。のたうつような動きで尻を揉みしだき、衣服を管の形に盛り上げ、その感触は腰を、背中を撫で上げた。

(くふううっ……気色、悪いこと……それに、少しくすぐったく……んっ、くうっ……)

「あうっ、さ、サイネ……んっ、り、ア……わたし、言えたことじゃない、けど……しっかり、してっ……頑張って、お願いっ……」

声を上擦らせて、ピクンッと肩を跳ねさせながら、

涙目になったリリーがこちらを見つめてそう告げる。仲間にあられもない姿を晒している、そのことに羞恥を覚えてサッと頬を紅潮させながら、サイネリアは取り繕うように微笑み、首を振った。

「平気ですわ、この程度のことです……たかが機械に弄ばれたくらいで、わたくしが――」

「ち、違うのっ……その管はみんな、身体に密着することが目的で……ひぐうっつ!!」

余計なことは言うなとばかりに、少女の身体に這い回るコードたちが、軍服の皺を広げるように気味悪く蠢きだす。刹那、リリーのいつも眠たそうな半眼が大きく見開かれ、小柄な体を仰け反らせて弾けるように跳ね上がった。

「んくあああつ! あひっ、ひやああんっつ!」

「リリー、どうなさいましたのっ、しっかり……ひやふっつ!! んやつ、な、なに、これはっ……」

仲間を気遣おうとした金髪の美女も、ついに言葉を上擦らせて、訪れた感触に戸惑いを見せる。そんな反応を見ているドリオの兵たちが、囁し立てるよ



うな声を、スピーカーから一斉に響かせた。

「ひやはははっ！ 聞いたかよ、あのエロ声！」

『感じた瞬間に、デカ乳がブルンブルン震えてやがるぜ！ 誘ってんのかあっ？』

嘲笑に負けじと唇を噛み、身体を硬直させて、刺激に備えようと身構える。

（うるさいっ、連中ですことっ……ふくうっ……）

だが意識を集中することで、逆に神経が過敏になり、身体を這いずる金属管の感触を、よりははつきりと感じさせられてしまう。温かく、シリコンの薄い膜で包まれた柔らかな管はさらに細かいコードに分かれ、その温かさを肌に浸透させてゆく。

細さは女性の指程度、感触も人肌とそれほど変わりはない。まるで誰かの指にでも触れられているような甘い刺激が、ゆっくりと背筋をなぞり、腰を揉むような動きで擦りつけられる。幼少期、屋敷の浴場で使用人に身体を洗わせていたときと同じような、心地よい温みに膝が蕩け、思わずカクンッと腰が跳ねてしまっていた。

「ううっ……んっ、ふあっ……はああん……」

細いコードのはずなのに、金属管そのものが発熱し、シリコンカバーで柔らかく擦ってくるせいなのか。全身に広がるのは服を着て入浴しているか、シャワーを浴びているかのような、新しい感覚だ。心地よくてたまらない——思わずそう感じそうになり、ハッと意識を戻したサイネリアは慌てて首を振る。

（い、いけませんわ、なにを……これは敵の謀略、淫計ですの……っ、んくうっ……）

そうしているうちにも細いコードは張りつくようにしてお尻を撫で回し、ついにはピツタリと肌に食い込むショーツの内側へ、先端を捻じ込みながら滑り込んだ。それまで布地にしか触れられていなかった、汗の滲む湿った肌へ、人の指に似た柔らかな感触がズルリ、ネチリと食い込み、揉みしだくような

刺激を絶え間なく送り込んでくる。

「ふあっ、はあっ、あっ……んっ、くふっ……うっ……んあっ、ひやうんっっ！」

その撫で方は男のやり方ではない、女性がスキップですのような、繊細で心地のよいタッチだった。遠隔操作の機械がしているとは信じられない技巧を凝らした愛撫を感じさせてくる。これほど細かい動きを再現できるほど、ドリオの遠隔操作技術が進んでいることには、驚嘆を隠せない。

（ぐっっ……く、屈辱ですわ……見られていますのに、声を……押し殺せないっ……っっ!!）

意識が下半身に集中した隙を突くように、首筋からも機械触手が滑り込んできた。

「ひうっっ！ んひっ、あっ……うくっ……」

上がってしまった声を噛み殺すが、すでもれってしまった声は取り返しがつかない。それを聞いた男たちの冷やかす叫びが耳を打ち、カアアツと身体中を火照らせて羞恥に悶えさせられる。

「こんな、奴らの前で……くふうんっ!!」

襟元からの侵略は鎖骨を舐めるように這い下り、乳房の合間をねちちこく擦って、サイネリア自身の汗を塗り広げてゆく。唇を開いた瞬間の甘い責めに、またも嬌声を響かせてしまう。その羞恥に顔を真っ赤に染め上げたプロンドの美女は、今度こそ声をもらすまいと、必死に唇を噛み締めた。だが——。

「ふっ、くっ……んうっ、んっ……んううっ!!」

ジャケットの袖口からもコードが忍び寄り、肘から二の腕、腋の下へ密着し、吸盤のようななにかを吸いつかせた瞬間、甲高い呻きが迸る。腕から腋へ、金属管は全身を擦りつけるような蠢動を繰り返して、擦れるだけでくすぐったくなる部分を、重点的に苛んできた。さらに——。

（んくっ、ひやうっ……っ、やはり、そこですわよね、先ほどからっ……本当に、ゲスなっ……）

サイネリアが誇るように胸を張ると、たわわな実りがタブンツと揺れ弾んでいた乳房——その付け根を縛るように円を描き、襟元から滑り込んだコードが絡む。だがそれは締めつけたりはせず、ただ美女の豊乳を揺さぶるだけの動きに感じられた。

触手の先が、下着に支えられた豊富な乳房を脇からくすぐり、啄むように押し捏ね、さらには下から掬い上げて上下に揺さぶってくる。と——。

「んひうっ……ふえ、な、にいつ……」

擦り寄っていた柔らかな感触に、新たな刺激が加えられる。乳房に擦れるシリコンの感触が、いつの間にか濡れているような潤みを孕み、肌にニチャニチャと絡みついてきた。

（いつ、たい……なに、がっ……んひやううっ!!）

それはただの水ではなく、粘っこく張りつく、濃厚な粘液の感触だった。戸惑うサイネリアの目の前で、一本のコードがうねりながら、おそらく同じものであるう粘液を滴り落としてみせる。金属管の表面に無数の細かな穴が開き、そこから粘液を滲ませ、躍動しながら吐きだしているのがわかった。

「あうううっ……なんですの、こ、この……うぐっ、ぬ、濡れて、気持ち……わ、るっ……んうっ!!」

ヌルついた粘液が潤滑油となり、表面は柔らかくとも芯を感じさせていた機械触手の群れが、心地よい感触をもつて肌を撫で回す。味わたったことのない甘美な刺激を無視できず、サイネリアは熱く吐息をもらし、艶めかしく眉をひそめさせられた。

「ひひひっ、こいつあすげえ……」

『軍服がグッチョグッチョに濡れて、張りついてやがらあ！ デカパイの形が丸わかりだぜ!』

「くふううんっっ！ んあっ、だ、だま、りいつ……いひいんっ！ んひっ、ひいひい……」

すでに首筋からお腹の下、もちろん腋の下や乳房の谷間に至るまで、上半身は粘液を頭から浴びたよ

うに、ドロドロになっていた。厚い生地でありながらも、濡れた軍服は美女の肉感的なラインをくつきりと浮かび上がらせ、身体に張りついている。両手を使ってもようやく片乳を掴めるかどうか、というほどの豊乳が二つ、胸元を張りつめさせて膨らみ、テラテラと卑猥な光を見せつける。

その内側を金属管が蠢くたび、グチュグチュと淫靡な音を響かせ、卑猥なマッサージが繰り返された。豊満な乳房の根元から、輪になって絡みつくコードが滑り上がる。円が窄まるように乳房を抜き、先端はブラの裏地に擦りつけられ、そのたびにサイネリアは背中を跳ねさせ、悶えさせられた。

（ああっ、い、やつ……あぐうっ！ んむっ、胸、はああ……んふうっ、ふあっ、はああんっ！）

ネットと絡む粘液が糸を引きながら、繰り返しながら肉悦に腰が痺れ、いつしかコードに支えられなければ立ってられないほどに脱力していた。

筋弛緩は唇にまで伝染し、気を緩めると、たちまち甘い声が垂れ流れる。しかし乳房を捏ねられながら腋下をくすぐられ、鎖骨をなぞるように舐められ、粘液を塗りたくられると、それだけで頭の中が火照り、身体のコブが熱く疼いてたまらなかつた。

（こんっ、な……どうして、こんなに……）  
這いずる金属管に抗おうとしても、一擦りされるだけで身体が振れ、腰がカクンッと躍る。

そんな反応こそが、映像の向こう側では大いに受けているのだろう。凛々しく美しい戦華に、もっと淫らな醜態を晒させようと、太ももに這いずる金属触手が、肉感溢れる脚に食い込むストッキングを押し上げ、足先に狙いを定めて滑り下りてゆく。ストッキングの裾から先端が捻じ込まれ、太もも、膝へ螺旋を描きながら這い進む。生き物、それもミミズや蛇のようなおぞましいなかが入り込むような感

触なのに、どうしてなのか――。

（んひうっ……あ、ああ……いやあ……）

全身を這うそれらと同じく、ブーツとストッキングの内側へ温かな粘液を塗りたくられると、熱いシヤワーを浴びているような心地よさが広がる。  
（あぐうううんっ……んっ、そんなっ、ところお……ああっ、んはああっ！）

細分化した、女性の小指よりさらに細いシリコンコードが粘液を絡めて足指を擦り、シコシコと扱いてゆく。甘美な感覚に瞳が蕩け、痙攣のような腰の動きが止まってくれない。

「あつ、ひいっ……ひやつ、やつ……んうっ……あつ、あああつ！ そんな、ところおつ……」

足先、乳房への意識を集中させて、心乱されないよう冷静に努めようとしても、無感情な触手はそれさえ許してくれなかつた。

細いコードが下着を潜って、何度も尻房の谷間を擦り、先端部でぐりぐりと菊蕾を押し擦る。ヌルついた感触を敏感な肛門皺に受け、怖気とともにゾクンッと背筋が跳ねた。とつさに括約筋を締めつけてガードするが、金属管は無理に圧力をかけたりはしてこない。ただ執拗に窄まった不浄皺を擦って粘液を塗りたくり、ニチャニチャと卑猥な音を響かせ、サイネリアの羞恥を強く煽り立ててゆく。

「ひいんっつ！ お、おやめなさいっ、なにを……ひやふうっつ！ んはっ……あくっ、このっ……」

たまらず脚を振り、声を弾けさせて感覚から逃れようと、ブロンドの美女軍人は足掻いてみせた。すると今度は胸元へ、電流のような快楽刺激が一気に突き抜け、目の前に眩い火花が飛び散る。

「くくくくっつ！ ひぐっ……くふううっ……」

ブラの上から、熱い特濃の粘液が大量に塗され、乳房を押し込むように何度も、金属触手に突き控ねられる。進む肉悦から逃れようと内股になるが、大

の字に固定されるせいで太ももを擦り合わせることはかなわぬ。その動きは腰を振り乱す淫らなダンスとなり、モニターへと披露させられてしまう。  
（ら、めへっ……集中、でき、なっ……）

「くひひっ、エロい腰遣いしてやがる、すぐにでもハメ回してやりてえぜ！」

「ふぐっ……くつ、うぐつ、ううううっ！」

耳を突き、心を責めるような嘲笑に抗おうと、震える腰を宥めるように押さえつける。だが、そうしている間にも胸が、腕が、お尻が、そして足先から太ももまでが、熱く濡れた粘液で汚され、ベチャベチャと撫で回されてゆく。しかも奇妙なことには、金属管が強く肌に密着したあたりから動かなくなり、先ほどから感じていた吸盤のようなものが、肌を吸うように張りついてくるのだ。

（ふくうんっ……んいっ、いっ、たい……っ!）

そう考えだしたのと同様、腋下や肘、首筋や肩甲骨の窪み、尾てい骨の突起やお尻の窄まりなどへ、チクリッと鋭い刺激が送った。

「んひきいっつ！ いあつ、あ……あつ、ああ……？ い、いまのは……んくつ、くふうっ！」

痛みは一瞬、だからこそ疑問に感じてその声を上げた瞬間、次から次へと、吸盤の張りついた部分へ同じ刺激が突き抜ける。身体のうちこち、見えない箇所へ予想もしないタイミングで襲ってくる痛覚の前には、思わずもれる悲鳴も身体への反応も、到底我慢することなどできない。

「ひっ、んっ、んあああつ！ やめっ、やめなさい……いひいっ！ くっ……つあああつ！」

細く短い針ではあるのだが、関節部分にはより鋭い刺激を感じて、痛みに喘いでしまう。そのたびに腰は跳ね上がり、軍服に浮かび上がるヒップラインや豊乳の形が、プルンッたプンッた揺れ躍る様を、大型モニターにこれでもかと映しだされる。



ねえ知ってる？  
旧校舍3階の鏡の話

知ってる知ってる  
鏡に向かって願い事を  
すれば叶うって奴でしょ

ライバルに勝つとか  
好きな人に振り向いて  
もらえるとか

成績万年二位の娘が  
成績アップの願いをしたら  
一位の娘が不登校になって  
次のテストから一位に  
なったって

後部活でずっと  
補欠だったけどお願いしたら  
先輩が怪我してレギュラーに  
繰り上げになったとか

恐ろしき都市伝説に  
近づく無垢な少女……!!

えーなんか嫌な  
祈願成就の仕方だね  
ちよつと怖いから私は  
やりたくないなあ

だよねーけど  
切羽詰まってたら私  
お願いしちゃうかも

やだーっ  
アハハハハッ

これが願い事の鏡

# 願い事の鏡

ねがいごとのかがみ

漫画 ふみひろ

埃とくすみで汚れて  
ほとんど映らない…

けど願い事が叶えば  
雪菜は…



雪菜：私の妹  
暗い性格と人付き合い  
が苦手のせいで  
小さい頃から友達が  
いなかった私：

反対に妹の雪菜は  
明るく気さくで優しく  
友達も多かった

成績もよくない私には  
両親も関心が薄く  
家でも外でも孤独だった

けど雪菜だけは違った  
お姉ちゃんと一緒にいい  
と言いつつ学校に進学し  
友達より私を優先し  
常に私の傍にいてくれた

いつしか雪菜は私の全てに  
なっていたと思う  
雪菜が居れば私は一人じゃない  
あの子もきつとそう



あの子は私の全て…  
あの子も私が全て…  
そう思っていた…のに

なんで…そんな簡単に  
私を捨てるの…

雪菜が居なくなったら  
私どうしたらいいの？  
雪菜の中から私が消える？  
だめ…そんなの…私  
絶対耐えられない…

私以外の雪菜…  
いやだ…  
いやだ…いや…

雪菜は  
誰にも渡さない





だから雪菜を  
私だけのものにする

私だけの声を聞いて  
私だけに喋りかけ  
私だけを見る  
私があの子の全てになる



え？

うそ…鏡が  
映って…私？



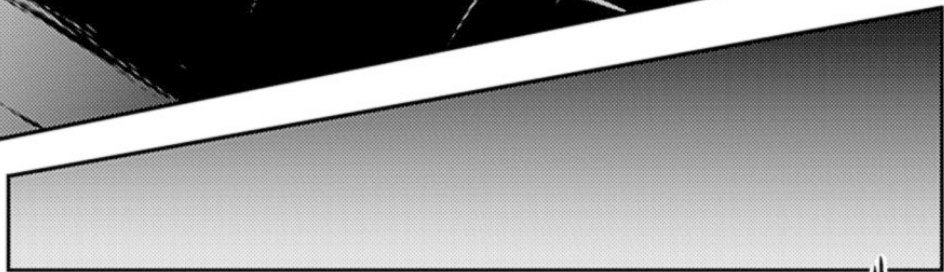
私はあなたの心の映し  
いいわ私の願いを  
叶えてあげる

や…なにッ  
いやッ



いやッ  
いやあッ

やめてッ



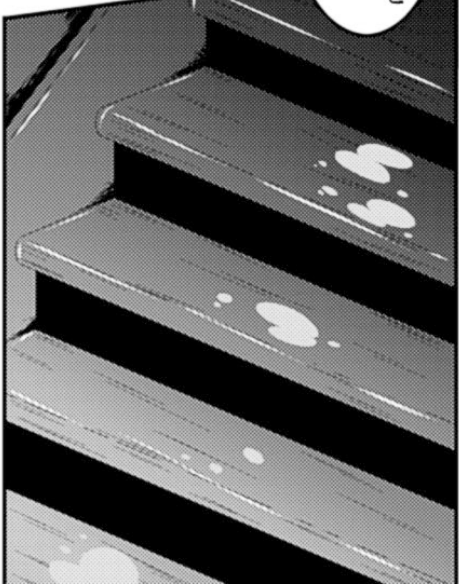
夏奈お姉ちゃん怒ると  
思うけど頑張って  
許してもらわないと



雨止まないなあ

夏奈お姉ちゃん  
大丈夫かな？

帰ってきたら  
ちゃんと報告しないとね  
先輩に告白したこと





お姉ちゃんにお話があるの

大事な話だから  
おねえ…ちゃ…

あお姉ちゃん  
帰ってきてたんだ

雪菜…  
居る…?

コソ  
コソ

おねえ…ちゃん？  
だよね…何…え？

私も雪菜に  
大事な話があるの



ふふふ…いい格好  
雪菜可愛いわね

やだッ

やあッ



こんな怪物  
現実に居るわけ  
ないよ

嘘…嘘だよ

お姉ちゃん  
これ夢だよねッ

ニユル

ニユル

ニユル

ニユル



こ…こんなの  
やだあ…

14

落ちていて雪菜  
現実かどうかはあなたの  
身体が答えてくれるわ





お姉ちゃんツ  
おねえ…ひいッ

ひうらうらッ  
弄らないでえ  
そこ大事なツ

やめてえ  
だめ…  
そこだめッ

大事な所  
だよおッ

やあ…アッ  
あッ…あうッ  
あああッ…ああッ

凄くいいわ雪菜  
初めて聞く  
あなたの声

もっという声が出る  
ようにお姉ちゃんが  
もっとなげてあげる



ひう  
お姉ちゃんツ

コッコリコリ  
だめえ…ああッ

そこ  
弄らないでえ

だめッ  
だめえッ

わ…私の知ってる  
お姉ちゃんじゃない…  
お姉ちゃん…こんな  
こんな酷い事しないもん

か…怪物…この怪物に  
操られてるんだ…  
正気に…戻って…え

操られている？  
違うよ雪菜

私は自分に正直に  
なっただけ  
私はあなたが好き

渡さない渡さない渡さない  
絶対誰にも渡さないあなた  
は永遠に私のものなの

雪菜が大好き…だから  
めちやめちやに壊して  
でも私のものにするの

ワッ  
グッ

か…な  
お姉ちゃん？

やだ…だめッ

それだけは  
許してッ  
お願い…お願いッ

お姉ちゃんッ  
お姉ちゃんッ





い...痛いッ

さけ... 裂けるうッ

グッ

グッ

グッ





今にも死にそうな声  
凄く苦しいのが  
わかるわ

けど残念…苦痛に歪む  
雪菜は可愛いんだけど  
この触手…

強力な媚薬成分を  
分泌してるのよね  
そろそろ効いてくるん  
じゃないかしら

やだ…あ  
何これ…  
熱い…お腹が  
熱いよお…

嘘…うそだよ  
こんな…シワシワ  
熱いのが…広が…って  
やだ…や…たあッ





雌畜へと墮とされゆく  
凛々しき女騎士たち!!

# 女騎士長リア 淫畜牧場

小説 NOVEL / いしほよしかず 斐芝嘉和 挿絵 ILLUSTRATION / あーや



「斬り飛ばしたグールの首から腐った血肉が飛び散って、ミアの視界を遮った。反射的に頭を振って避けたその背後に、新たな殺気が迫る。

前には倒れかけたグールの身体があるし、左右に逃げても毒爪はかかるだろう。ならば――。

「チィ……ッ！」

金色のポニーテールを靡かせて反転、振った剣の切っ先で背後から襲いかかってきたグールの腹を薙ぐ。

が、踏みこみが足りなかったようだ。

半死の魔物はばっくり開いた傷口から内臓を溢れさせただけで止まらず、毒の爪を振り上げた。

「キッシャアアアッ！」

軋んだ叫び声を上げ、しゃがみ込んだミアの頭目がけて――。

トンッ！

グールの側頭部に銀の矢が突き立ち、毒爪の軌跡が大きく傾いた。

倒れる魔物と入れ違いにミアが立ち上がる、その背にスリと、銀髪をツインテールにした細身のエルフが寄り添って立つ。

「礼を言う、パイシュエ」

「どういたしまして」

背中越しに言葉を交わすふたりは、ブルム公国の槍と畏れられているウイステイリア隊のツートップだ。言うならば精鋭機動部隊で、ここ半年ばかり攻勢を増してきた魔物軍に対処すべく西方戦線に投入されている。

だが、しかし――。

「クリスとシシユカがやられました。残っているのは私たちだけです」

銀の矢を次々と放ちつつ、パイシュエが醒めた口調で囁く。

国境の小さな村が襲われたという急報を受けて駆けつけたウイステイリア隊は予想外に大規模なグール隊と遭遇、潰滅的な打撃を被った。多勢に無勢ながら善戦し、八割方は屠ったが、生き残ったのは隊長であるミアと元レンジャーのパイシュエだけ――。

「いや、ルカがいる！」

赤黒い血に濡れた切っ先でミアが指し示した方向、畜舎のような平屋の屋根に、小柄な人影が立ち上がった。

銀の投げナイフで眼下のグールたちを倒しつつ、ミアたちに向けて細く長い尻尾を大きく振る。

「あの猫娘、また勝手な行動を……」

「私が許した。正確には、逃げろと言ったのだがな」

苦笑しげに言うエルフを制し、苦笑するミア。エルフの鋭敏な感覚すら掻い潜る神出鬼没の猫族の娘は、元盗賊のクセに義理堅い。敗戦確実なのにひとりだけ逃げ出すのをよしとせず、ミアアたちとは離れた場所で奮戦していたようだ。

「百倍のグール相手に三人生き残っただけでも偉偉だ。おおかた片付いたようだし、援軍が来る前に退こう」

周囲に動く者がなくなつたのを確認したミアは素早く決断、いまだに不服そうな銀髪のエルフを引き連れて、

ルカが屋根に立っている畜舎へ駆け寄った。すると、猫娘はまた姿を消し、戸口から飛び出して大声で叫ぶ。

「生きてる！ たくさんっ！」

「村人が？ まさか……」

訝しむパイシュエだが、ミアは合点した。

この村は、ウイステイリア隊を引き込むための罠に用いられたのだ。二千を超えるグールたちの大半は周囲に潜伏してただけで、村への攻撃には参加しなかったのだろう。

（なかなかの策士がいるな）

約二十名の精鋭がたつた三人にまで減ってしまったことだけでも大変なのに、厄介なことだ――先のことを考えかけていたミアは、ルカについて畜舎に一步入った途端、予期していなかった光景に息を呑んだ。

薄暗い畜舎の中に肩を寄せ合って震えていたのは、年端もいかぬ少女ばかり百人ほど。みな裸で、細いうなじに紅革の首輪をかけられ、そのうえ後ろ手に縛られている。見たところ大きな怪我はないようだが、精神的ショックのせいか、長い間絶望に打ち拉がれていたのか、みな表情が虚ろだ。

「なんてこと……この村は、奴隷売買をしていたの!？」

嫌悪感も露わに吐き捨てるパイシュエに、ミアは小さく首を振った。

「詮索や糾弾はあとにしよう。敵の援軍が来る前に全員を解放し、安全な場所まで移送しなければ……」

隊長が言い切るより早く、細く長い尻尾を揺らしたルカが躍動し始める。囚われの少女たちを助けたかったが、戦闘中は足手纏いになるし、撤退するときは足枷になるから、ミアの判断を待っていたのだらう。

「はい、立って！ 大きな子は小さな子に手を貸して。着る物はあとでお姉ちゃんが必要見つけてあげるから、いまはさっさと逃げる！」

声をかけながらナイフを振り、少女たちの拘束を解いて回る。

「また勝手なことを……ッ！」

苛立った口調で呟いたエルフが、周囲を警戒すべく畜舎の屋根へ登ろうと踵を返す。ミアも血濡れた剣を握り直し、ふらふらと立ち上がる裸の少女たちを先導して畜舎の外へ出ようとして――。

「うっ!! こ、こら……落ち着け。大丈夫、平気だから……」

腕や脚に纏わりついてくる小さな重みに立ち往生する。

虚ろな目をした裸の少女たちがミアアやパイシュエにわらわらと群がり、ひつしとしがみついていたのだ。

「ちよ、待っ……た、隊長ッ！」

敏捷性に勝るはずの猫娘も、見るからに弱々しそうな少女たちを乱暴に扱いかねてか、たちまち抑えつけられてしまった。

「こ、これ……良なのでは!？」

「……ッ!？」

パイシュエが気づき、ミアもハッ

としたのだが、時すでに遅し。

畜舎の外から重々しい呪詛の音が聞こえ、ウイステイリア隊の生き残り三人は為す術もなく意識を失った――。

\* \* \*

――そして気づくと、ミリアたちは畜舎に繋がれていた。

罠に用いられたあの村の畜舎とは別の、もつと大きな建物だ。

「く……そお……ッ！」

悔しげに呻くミリアは裸に剥かれ、腰高に渡された板状の首手枷に細いなじと華奢な手首を拘束されている。

板枷に阻まれて自分の身体は見えないが、腹はどうやら、幅広の革ベルトによって床に水平になるよう支えられているようだ。足首にも縄がかけられ大きく左右に引つ張られて――伸びやかな脚線美をハの字に開きつつ、形よい美尻をうしろへ差し出して、股間の恥ずかしい割れ目を見せびらかしているような恥辱の姿勢。

（ただ拘束されているだけでも騎士にとつては耐えがたい恥辱なのに……裸にされ、こんな姿勢を強制されているは、まるで牛か馬ではないか！）

頬を赤らめて囁みするミリアの右隣にはルカが、左隣にはパイシユエが、同じ姿勢で繋がれている。さらにその向こうにも、そして狭い通路を挟んだ向かい側にも、同じように板枷で首と手首を拘束された裸の美女・美少女たちが延々と横に並んでいる。

薄暗い畜舎にズラリと並ぶ、尻、尻、尻

尻――大きな尻もあれば小さな尻もある。アソコの茂みが濃い者薄い者、まったく毛の生えていない者も、瑞々しい内股をハの字に開かれ、耐えがたい恥辱に嘔り泣いている。

「パイシユエ、ルカ……無事か？ 敵は何者だ？ 何人くらいいる？ いったいなんなのだ、こは……？」

一通り周囲を見回したミリアは、左右にいる部下たちに声をかけた。が、

「我々は魔物工場と呼んでおる」

「……ッ?！」

答えたのはエルフや猫娘ではなく、耳障りに軋んだ男の声。

その声は背後から聞こえた。つまり、剥き出しの尻や丸見えの秘裂を見られている――。

「な……何奴ツ?！」

己の恥ずかしい姿を男に見られた屈辱に声を上擦らせながら、ミリアは懸命に身体を揺すった。だが、首と手首を挟んだ板枷は揺るぎもせず、足首に絡みついた縄もわずかに軋むだけ。革ベルトに支えられた柔らかな腹が振れ、うしろへ突き出した桃の実のような美尻が左右に揺れる。

羞じらう裸の女騎士の背後に立ち、懸命に打ち振られる瑞々しい美尻をニヤニヤと見つめているのは、黒いローブを纏った卑しい顔つきの魔導士。「我が名はテスタ・クラニオ。世界で初めて魔物の量産化に成功した者だ」

「な……なんだとッ?！」

得もする。  
（近年急に魔物の攻勢が激しくなったのは、コイツの仕業か……!）  
魔物とはいえ生き物だから、ある程度倒せば攻勢は弱まる。なのに最近は何から次へと国境へ押し寄せていた。いったいどこで調達しているのかと訝っていたのだが――。  
「……待て。貴様、先ほど魔物工場とか言ったな？」  
「いかにも」  
「魔物の量産化にも成功した、とも言ったな？ それがこれなのか？ ここに繋がれている女たちは、魔物を産み出す生け贄なのかッ?！」  
「うーむ……外れてはおらぬが、生け贄というのは少々語弊があるな」  
女騎士の瑞々しい美尻に緊張が現れるのを見てとつて、魔導士の薄い唇に得意気な笑みが浮かぶ。  
「人間の牝に魔薬を投与し、魔物の苗床に作り替えるのだ。基本思想は百年も前に発案されていたのだが、子宮に適性があることを発見し、その検査方法を確立し、ほぼ十割の着床率を実現したのはこの私だ」  
「な……なにを言っているのだ?! 人間の女性を、魔物の苗床に……」  
「獣でも試したのだが、知能の低い魔物しか着床しなかったのだ。兵器として運用可能な魔物を産めるのは、人間の牝だけなのだ」  
「そ……そんなおぞましいことを、得意気に語るなッ!」

叫んだミリアは懸命に身体を揺らしたが、首手枷と腹を支える革ベルト、そして足首に結わえられた縄のせいでうしろへ差し出したような格好の尻をわずかに揺らすことしかできなかった。白い背がしなやかにくねり、艶やかな金色のポニーテールが怒りに紅潮した頬を掠めて虚しく躍る。  
「ほほう、こんな恥ずかしい格好になつていても心は折れておらぬようだな。それでこそ、ミリア・ウイステイリアだ。しかし……」  
「くっ?！ あ……や、やめろ……さ、触るなッ!」  
無防備な股間、あられもなく晒されている秘裂をまさぐられて、耳の先まで真っ赤になるミリア。魔法が使われているのか、軽く撫でられた肉畝に温かな感覚がたちまち満ちる。割れ目の中で淫唇が火照り、恥ずかしい蜜がジワッと滲む。  
「部下たちもそうだが、子宮の適性はよくないな。三匹とも身体は丈夫なのに下等な触手生物しか産めないのでは、せつかく苦労して罠を仕掛けた意味がなくなってしまう」  
「る……ルカやパイシユエにも、こ、こんな……ことをッ?！」  
羞じらつて呻く女騎士の背後で、いやらしく笑み崩れた魔導士がおもむろにしゃがむ。揺れる尻を見上げ、うつすら生えた銅色の淫毛にフウツと息を吹きかけて、  
「気づいていないのか？ 二匹とも、



すでに調整を始めているのだがな」  
意地悪く囁く。

「ッ!? ー、ルカ……パイシユエ……  
どうした? なにをされたッ!?」

己の左右に首を突き出している部下  
たちに慌てて声をかけたが、返事はな  
かった。よくよく見れば、頬を赤らめ  
た銀髪のエルフは陶然とした表情で放  
心しており、猫娘は頭の上に突き出た  
三角耳をしおらしく伏せ、なにかを耐  
えるように唇を噛んで震えている。

部下たちだけではない。

ミアアの視界に映るすべて、板枷に  
うなじと手首を挟まれた美女・美少女  
全員が、頬を赤らめて上擦った吐息を  
こぼしている。かくいうミアアも、白  
い裸体が内側から火照り、芯に妖しい  
疼きが目覚めかけていた。

「しつかりしろ、パイシユエッ! 負  
けるな、ルカッ!」

「くつくつく……部下思いなのは結構  
だが、いまは自分の心配をしたほうが  
よいのではないかな?」

「う、うるさいッ! 余計なお世話だ  
……あつ!? く……あああつ! ひ、  
開くな……そこ、開くなあつ!」

魔導師の指を感じている柔らかな肉  
敵が、大きく左右に開かれた。流れ込  
んでくる冷たい空気に敏感な淫唇をさ  
わさわと撫でまくられ、秘裂に恥ずか  
しい感覚が湧き起る。

蝶の羽のように開く紅いピラピラ、  
魔導師の視線を浴びて鋭く窄む可憐な  
膣口。肉敵の縁では小さな小さな淫核

が、早くも快感を予感したのか、はし  
たなく勃起してしまう。

(そ……そんな、バカなッ! 少し触  
れられただけで、こ、こんな……)

己の身体が示す恥ずかしい反応に、  
我を失いかけるほど戸惑うミアア。

だが、疑問はすぐに氷解した。

「よしよし、葉は効いているようだな  
この穴も改造可能か」

「ッ!? 貴様……まさか、私が意識を  
失っている間に……」

「時間を無駄にするのは私の流儀では  
ないのでな」

「う……あつ!? や、やめろッ!」

不意に視野が揺らぎ、はしたなく熟  
した秘裂が大映しになった。魔法で視  
覚を操作され、己の秘裂を見せつけら  
れたのだ。

「そう恥ずかしがるな。見ろ、なんと  
も綺麗な色艶ではないか」

「だ、黙れ……あつ!? こ、こら……」

「や、やめ……あうんッ!」

鶏冠のように波打った淫唇の縁を抓  
まれ、クニユツと歪められた途端、秘  
裂に熱い波が走り抜けた。拘束された  
身体が弾けるように反り返り、うしろ  
へ突き出した美尻の真ん中で羞じらう  
尻穴がキュウツと窄む。

「騎士様は、自慰をしたことがないの  
かな? もつたないことだ、こんな  
に敏感なのに」

「くひっ!? うう、や……んあつ!?

うう、ああ……やめろ……やめろやめ  
ろ……そ、それ以上、したら……うう

ック!? ああ、ああ、ああ……」  
又チュクチュと掻き回された秘裂に  
心地よい快感が溢れかえる。

魔法に支配された視野には男の指に  
合わせて従順に歪む己の淫唇しか映ら  
ず、滲む愛液の卑猥な輝きにミアアの  
自尊心が突き崩されていく。

「そう恥じなくてもよいぞ。ほれ、お  
前の部下たちのオマンコだ」

「う? あ……ッ!」

視野が揺らぎ、三つの秘裂が同時に  
見えた。上にあるのが己の割れ目だと  
して、その下、右にあるのがルカ、左  
側がパイシユエか。

(な……なんて、いやらしいッ!)

小柄童顔の猫娘の割れ目は、形こそ  
外見に相応しく幼気だが、ミアア以上  
の蜜を滲ませてヒクン、ヒクン、と喘  
いでいた。クリトリスは弾けんばかり  
に勃起し、真っ赤に染まって、艶々と  
輝いている。

銀髪エルフの秘裂は、まず肉敵が目  
についた。透き通るように白い柔肌が  
淫悦に火照り、艶めかしい桃色に染ま  
っているのだ。ミアアのものより薄い  
淫唇は、しかし幅が広く、波打つ縁が  
肉敵を押し退けて大きく展翅している。

ルカに負けじと潤んでいて、震えるピ  
ラピラの縁から一筋、また一筋——光  
る糸引く愛液の珠が、ひっきりなしに  
滴っている。

「毎日葉を擦り込んで、四六時中火照  
っている状態になったら、正式な家畜  
として第二段階へ移行する。この畜舎

に繋がれているのは、お前たちのよう  
な家畜未満の者たちだ」

「か……家畜ッ!? 貴様……人間を、  
家畜呼ばわりするかつ!」

「牛馬のように畜舎に繋ぎ、下の世話  
までしてやるのだ。家畜と呼ぶしかな  
いであろう」

「調子に乗るな、下郎ッ! 貴様のそ  
の口、必ず私が塞いでやる!」

胸の内から込み上げてくる憤怒に眉  
を逆立て、快感に揺らぐ頭を振って左  
右を見渡そうとするミアア。

魔法で視界を支配されているから自  
分と部下たちの秘裂しか見えないが、  
意識を取り戻した直後の記憶に拠れば、  
薄暗い畜舎には見渡す限り、嘔り泣く  
乙女たちが繋がれていたはず——。

(ここに繋がれている者すべてが、魔  
物の苗床になるというのか……!?)

ひとりが何匹産むのかは分からない  
が、たとい一匹ずつだとしても凄まじ  
い数になるだろう。そして、産み出さ  
れた魔物は人間の国々を襲い、女たち  
を捕らえて新たな家畜にして——。

おぞましい未来を想像して身震いす  
る女騎士の美尻を、いやらしい目つき  
でニヤニヤと眺め回す魔導師。

「怯えなくともよい。葉が効けばお前  
の部下たちのように、なにも分からな  
いほど気持ちよくなるのだから」

「く……う、うううッ! 貴様、許さ  
ぬ……絶対に許さぬッ!」

「そう、その意気だ。並みの娘ではす  
ぐに堕ちてしまつてつまらぬからな

精々気張って私を愉しませてくれ

魔導師のいやらしい笑い声が聞こえ、魔法で見せられている己の秘裂に妖しげな軟膏を乗せた指先が近づいた。

「ああやめる……や、やめるおっ！」

ミリアがいくら叫んでも当然のように無視され、肉畝の内側にヌチャッと軟膏が塗りつけられる。淫唇にも冷たいぬめりが塗り広げられ、仕上げに淫核を抓まれる。

「くっ!? あ……うっ!?」

葉を擦り込まれた粘膜が、じわりと熱を帯びた。初めは淡く、次第に強く、こらえがたい疼きが湧き起こる。

（く、う……そ、おっ!?）

こめかみに青筋を浮かべて歯噛みしても、妖しい葉を擦り込まれた秘裂は、羞じらう理性を無視して熟していく。繊細な粘膜の内側で快楽神経が感度を増し、さらなる刺激を欲して焼きつかんばかりに焦れる。

「猫娘とエルフ……う墮ちてしまったが、さて、……な騎士殿はど……耐えられ……な？」

酒に酔ったときのように意識が揺らぎ、耳障りな魔導師の声が途切れ途切れになった。ダメだ、耐えなければ、戦わなければ——と歯噛みする理性も次第に蕩けて輪郭を失っていく。

（私は、騎士だ……誇り高きブルムの槍……だっ!）

家畜ではない、家畜になど絶対にならない——胸の内で見聞のように唱えていても、秘裂に挿し込まれた魔導師

の指が蠢くたび、床に対して水平になった背筋に熱い波が走り抜ける。

「ふ、あ……ああ、ああ……」

喉の奥から恥ずかしい鳴き声が迫り上がり、わななく唇からとめどなく溢れ出してしまふ。

（負けぬ……負けぬッ! 私は絶対、負けぬ……ッ! いつか必ず隙を見つけて、こ、このいやらしい魔導師を倒し……パイシユエヤルカを助けて、か、必ず……かな、ら、ず……くっ!? あ

……ああ、ああ、あああ……）  
淫唇を撫で回していた指先が、葉を塗り終えたのか、最も敏感なクリトリスへ移動してきた。快楽神経の塊に微弱な魔力が流し込まれる。

「やう、ああ……ああううっ! そ、そこ、ダメ……ああそんな……ひ、卑怯な……ああ、ああ、あああッ!」

羞じらう理性を追い越して、ミリアの意識を絶頂へと押し上げていく稲光のような快感。

（ま……負けぬ……負けぬ……こんな卑怯な魔導師に、ま、負けるわけには……い、いか……ぬっ!）

——びくんっ! びくんんっ!  
魔薬と魔力によつて強制された絶頂感に為す術もなく反り返りつつも、ミリアはなんとか唇を噛み、恥ずかしい声は漏らさなかった。

\* \* \*

——この畜舎に繋がれてから、いつ

たいどれくらい経つただろう? 「ギヒヒ……お待ちかねの時間だぞ、

家畜騎士様」

「う……あ……」

ゴブリンの軋む声に浅い眠りから引きずり出され、小さく呻くミリア。腹を支える革ベルトを軋ませて、白く伸びやかな裸体が泳ぐようにくねる。

意識にかかる露を振り払おうとして頭を振れば、床に対して水平になった胸の下、剥き出しの乳房がゆつさゆつさと重々しく揺れる。

「お? ハハッ! ちゃんと尻を振れるようになったか」  
灰褐色の肌の小鬼が黄色い牙を剥いて笑い、揺れる桃尻を節張った手で軽く打つてから無遠慮に揉んだ。

「くっ!? あ……うう……き、汚い手で、触るな、下郎……ッ!」

小狡く下品なゴブリンは、低劣な鬼族の中でも最下層に近い存在だ。戦場でも物陰に隠れてゴソゴソと攻撃してきたり、あちらこちらに卑劣な罠を仕掛けたり——正々堂々という言葉の対極にあるような、誇り高き騎士とは絶対に相容れない存在。

なにに——。

「キキキ、俺たちや下郎だつてよ!」  
「オッパイやおまんこ見せびらかして小便を垂れ流している家畜騎士様は、さぞ高貴なんでしょうなあ」  
恥辱に歯噛みする裸の女騎士を取り囲み、声高に嘲笑しながら、瑞々しい柔肌を手を伸ばすゴ布林たち。

「や……やめる、触るな……あつ!?  
く……あああッ!」

羞じらいもがくミリアの乳房に、ヌチャッと冷たいぬめりが塗りつけられた。尻や太股、背や脇腹にも、小鬼たちのゴツゴツした手で半透明の軟膏が塗り広げられる。

「どうだ? 気持ちイイだろう? なんだつて、お前に塗っているコレはテスタ様特製のお薬だからな」

「き、気持ちよく……など……ン!?  
く……ふ、あ……ああ、ああ……」  
硬い指先にムギユ、ムギユ、と揉み歪められた乳房に、温かな感覚が湧き起こる。撫でられ揉まれ、ときどき打たれる美尻にも、ねっとりとした心地よさが充満してしまう。

（あ、熱い……胸が、乳首が……あ、アソコが、熱いッ!）  
連日連夜、絶え間なく投与されている妖しい薬のせいで、鍛え抜かれていた女騎士の身体は淫らに作り替えられてしまった。一回り以上大きくなった美乳が四六時中火照り、鮮やかに紅い乳首が弾けんばかりに勃起している。

そこに新たな葉を擦り込まれ、小鬼たちのいやらしい手つきで執拗に揉み捏ねられるのだ。

「そろそろ俺たちのチンポが欲しくなってきたんじやねえのか? ほら、オマンコがこんなにグチヨグチヨだ」

「ふあ……ッ!? や、やめ……そこ、ダメ……か、掻き回す、なああッ!」

「ギヒヒッ! 必死にケツ振り回しながら、やめるだつてよ」  
「身体はもう苗床並みに発情してるの



に、素直じゃねえなあ」

「な、ならぬ……私は絶対に、な、苗床などに……ならぬっ！」

「どんなに歯を喰い縛って耐えようとしても、白く瑞々しい裸体は肉悦に悶え、わななく唇から恥ずかしい吐息が漏れてしまう。」

「浅ましい家畜のクセに、強がるねえ。乳首もクリトリスも、ほら。こんなに硬くなってるじゃねえか」

「くヒッ!? や、やめ……や、あ……あひいっ!?」

「ピトピトピト——と軽く突かれた三つの肉豆に、心地よい電流が弾けては消える。前のめりに拘束された身体が跳ねるように躍り、秘裂が燃えるように熱くなる。」

「ほうら、オマンコも開いてきた。恥ずかしい蜜だつてダラダラ垂れているし……うはっ! なんていやらしい匂いだ。チンコ勃つちまう!」

「ケツの穴も、ほら。クバクバ喘ぎ始めたぞ。チンポ欲しい欲しいって、必死におねだりしてるぞ」

「い……言うな、言うなああっ!」  
「羞じらい叫ぶミアアの左隣で、  
「はうっ!? あ……あああッ!」

「白銀のツインテールを揺らして弾けるように反り返るパイシユエ。」

「(あ、ああ……また始まった……) 頬を赤らめたミアアは顔を閉じ、唇を噛んで顔を背ける。本当は耳を塞ぎたいのだが、腰高に渡された首手枷に手首を挟まれているので、目を瞑るこ

としかできない。

「く、あ……ううんっ! ああ、ああ……か、硬あいッ!」

「耳の先まで真っ赤になつて震える隊長の横で、一足早く墮ちたエルフは羞じらうことなく悦びに鳴く。切れ長の瞳をうつとり細め、先の尖った鹿耳をしおらしく伏せて、  
「あう……ああ、ああんッ! あ、くう……あああんッ!」

「膣穴を抉る巨根に合わせ、悩ましい鳴き声をリズムカルにこぼす。  
「ギヒヒ……どんな具合ッスか、エルフのオマンコは」

「だいぶよぐなっだぞ。初めのうちはだだ強張つてピグピグ痙攣しているだけだつたが、いまじゃあいやらじぐ蠢いで、先ツちよ入れただけで奥へ奥へど吸い込まれでいぐ」

「濁つた声で答えているのは、オークだろるか? その間も、銀髪のエルフは猫のような声をこぼし、細い身体をくねらせていやらしく喘いでいる。  
(し、しっかりとしろ、パイシユエ……エルフの誇りを思い出せッ!)

「歯を喰い縛り、パイシユエの淫らな鳴き声に耐えていると、右隣からさらに妖しい鳴き声が始まった。  
「ああお……ああああおッ!」

「本物の猫のように喉を鳴らしているのは、三角耳をヘタツと伏せたルカ。身体が小さいせいか、ミアアやパイシユエより薬の効きが強く、ゆえに悶える方も激しい。なにに犯されているのか

分らないが柔らかな頬を艶めかしく赤らめ、涙をこぼし涎を垂らして、身体全体を揺らしている。  
さらに——。

「や、あ、あああッ!」

「はうっ!? あう……ああんッ!」  
「向かいの列に繋がれた女性たちも、淫らさを競うように声を上げ始めた。オークやオーガ、ホブゴブリンなどに犯されて、目元を淫らに弛めている。  
(く……そ、おお……ッ!)

「歯噛みするミアアの秘裂が、ジュワツと熱く潤んだ。ゴブリンの手で新たな薬を擦り込まれたばかりの乳房が火照り、美しい丸みの先で乳首が弾けんばかりに痙攣勃つ。  
そのうえ——。

「うっ!? あ……くううっ!?」  
左右の乳房にチクリ、チクリ、と小さな痛み。肌に擦り込むだけでは間に合わないらしく、妖しい魔薬を胸の双球に注射されているのだ。  
「や……め、ろおっ!」

「大人しくしてろよ、家畜未満。立派な家畜つてのはオッパイがもつともっと大きいんだ」  
「ほうら、乳首にもおクスリだぞ」  
「ひうっ!? く……んう……ッ!」

「胸先に痙攣した敏感な肉豆を軽く掴まれ、冷たく細い針を突き立てられた。激痛が閃き——だがそれはすぐに、温かく心地よい痺れに変わっていく。  
「どうだ? んん? お注射は気持ちいいだろう?」

「き……気持ちよく、など……」

「家畜のクセに、強情だなあ」  
言葉は呆れ気味なのに、ゴブリンたちの声色には満足そうな響きがあった。懸命に歯を喰い縛って耐えている様子から、ミアアがいまにも墮ちそうになつていふことを察しているのだ。

「いや、横顔を覗き込むまでもない。うしろへ突き出した美尻も胸の下の乳房も桜色に火照っているし、震える太股の間では柔らかな肉畝が艶めかしく赤らんでいる。ねっとりとした愛蜜を滲ませた淫唇は肉畝を押し退けてあられもなく咲きこぼれ、鶏冠のように波打つその縁からは淫らに香る珠が光る糸を引きながら、ツウ、ツウ、と絶え間なく滴っている。」

「そろそろ素直になれよ、豚騎士様」  
「乳首やクリトリスはコチョコチだし、オマンコがグチュグチュじゃないか」  
「くッ!? あ……や、やめ……う、あ……ふ、くうん……ッ!」

「ギヒヒ、オマンコから涎が垂れてきた。身体は正直だな、俺たちの種を孕みたいってよ」  
「そ、そんなことは……ひうっ!? く……あああッ! つ、抓むな……こ、握ねる、なああああッ!」

「小鬼たちの指に弄られた三つの肉豆と割れ目に抗いがたい快感が湧き起こり、首手枷と革ベルトに拘束された白い裸体が妖しくくねる。全身が内側から燃えるように熱くなり、揺れるポニーテールが柔肌から噴き出す香汗を吸

つてしつとりとした輝きを増す。

「ほらほら、正直に言えよ。犯してえつて。オマンコしてえつて」

「俺たちと毎日毎日まぐわって、丈夫な魔物の仔を孕むのが、家畜騎士様の御役目なんだからな」

「だ……それが、か、家畜になど……ふあつ!? あ……やめ……ろおつ!」

慌てて揺らそうとした美尻がいくつもの手に抑えつけられ、無防備な尻穴に硬く細く滑らかな棒状の物体が押しつけられた。

もう何度も体験しているから知っている。大型流腸器の嘴管だ。そして注入されるのは、冷たくヌルヌルとした大量の媚薬――。

「だ、ダメだ……やめろやめろ……た頼む……やめてくれえつ!」

騎士としてのプライドをかなぐり捨て、卑しい小鬼たちに哀願したのに、直腸に冷たい感触が押し入ってくる。腹の中に刺すような痛みがいくつも閃き、キュルル、キュルル、とはしたな音が立ち始める。

と同時に、秘裂が燃える。

ただでさえ蜜まみれだった淫唇に新たな愛液が滲み出し、紅い潤みの底で発情した膣穴が、たくましい牡肉を求めてヒクンヒクンと蠢いてしまう。

「やうあ……あう……あああッ! それ以上、変なクスリを……い、挿入れる……なアッ!」

「変なクスリじゃねえだろ? 誇り高き騎士様を浅ましい牝豚に作り替える、

ありがたいおクスリだ」

「あ、ありがたいけど……くつ!? あ、ううつ!? お、多い……い、いつもより……お、多すぎ……だろおつ!」

「それだけ気持ちよくなれるつてことだ。感謝しろよ、豚騎士様」

キシキシと笑ったゴプリンがピストンを押し込み、妖しい流腸液を注入し続ける。下腹に生じた冷たさは直腸を押し退けて膣の裏側にまで達し、刺激を受けた消化器官が狂ったようにのたうちまわる。

(だ、ダメだ……出る、出るうつ!)

流腸されたのは媚薬なのだから、早く出してしまったほうがいい――頭では分かっているけど、乙女としての羞恥心は抑えられなかった。細く硬く滑らかな嘴管が引き抜かれると、慌てて尻穴を締め、唇を噛んで、必死に便意をこらえてしまう。

「そんなに力まなくてもいいって、豚騎士様。ほら、栓を挿してやるぞ」

「ンく……ッ!? く、うう……」

強張る括約筋を押し退けて、無理矢理挿し込まれる小さな塊。魔法なのか機械なのか、それは排泄孔の内側でみるみるうちに膨らんで、いまにも噴き出しそうだった汚物をしつかり堰き止めてくれる。

(く、そ、おお……ッ!)

獣のように糞便を撒き散らすという恥辱は回避できたが、卑しいゴプリンたちに助けられたことで騎士のプライドがひび割れた。

それに――。

「ふ、あ、あああ……い、や……あ、あ……あああ……」

柔らかな腹がキュルキュル鳴るたび、媚薬が全身に行き渡っていく。乳房はますます火照り、乳首や淫核は痛いほどに勃起して、脇腹や背中、太股にまで淡い快感が充ち満ちてしまう。

「おうおう、なんていやらしい顔だ。さすがの騎士様も、テスタ様のおクスリには敵わねえようだな」

首手枷の下を潜ったゴプリンが、ミアアの顔を覗き込んで卑しく笑った。だが、女騎士にはもう、それを睨み返す余裕がない。

身体中が火照り、膣や尻穴が疼いて、少しでも気を抜けば挿入れて挿入れて、と叫んでしまいうさなのだ。

「いま突っ込んだら、きつと一発で墮ちるんだがなあ」

「おねだりできない家畜未満には絶対に挿入れるなって、テスタ様に言われているからなあ」

喘ぐ女騎士を取り囲み、口々に惜しそうなことを言う小鬼たち。だがその顔は喜色満面、紅い瞳がキラキラと輝いている。ミアアのような美女が羞じらい喘ぎ、涙をこぼして悶え狂う姿を見るだけでも、彼らの嗜虐心は満たされるのだ。

「お? 誇り高き騎士様の大きなおケツが揺れてるな。下のお口はいやらしい涎を垂らしっぱなしだし……」

「ほら、正直になれつて。アンタの身

体はもう、浅ましい牝豚なんだよ」

「おチンポ欲しいつて素直におねだりしたら、すぐにも挿入れてやるぞ」

「し……しない……お、おねだり……なんて……する、もの……かっ!」

「そんなこと言つて、ホントは俺たちの仔を孕みたいんだろ?」

「だ、だれが……お前たちのような卑しい鬼の仔、など……ッ!」

震える声を絞り出し、懸命に抵抗するミアア。

だが、うしろへ突き出した美尻は右へ左へ激しく揺れる。秘裂はますますぱっくり開き、疼く膣穴からねつとりとした愛液が溢れ始める。

(だ、ダメだ……こ、このままでは、きつと私も……)

焦るミアアの左右や前方で、鬼に犯された女性たちが嬉しそうに鳴く。いやらしく微笑み、長い髪を振り乱して、次第に早まる抽送に合わせ淫らな声を高めていく。

「ああお……ああお、ああおつ!」

「イク、イクイク……イクううつ!」

人としての尊厳を忘れてしまったようなその浅ましい姿に、ミアアの身体が嫉妬する。羞じらい抗う理性を裏切り、恍惚の瞬間を求めて空腰を打つ。

「うはっ! どうした騎士さん、ケツが縦揺れしてるぞ!」

「おいやめろつて、マン汁があんな遠くまで飛んでるじゃねえか!」

「く、う……う、ううううつ! 笑うな……笑うなアッ!」



何なんだあの  
化け物はあるっ!?

巨人か!?  
ロボか!?

わああ  
城壁が  
ああっ

巫女  
イシユタル様が  
お呼び下さった  
んだ!!

見…見よ!

我らが神  
マルドゥックの  
鎧だ!

うわっ

# バビロンの 女神の

漫画  
COMIC

おおたけし

ここは  
マルドゥック神が  
守りし神聖なる  
バビロンぞ!

下がれ  
魔物よ!





アダトの

神と契りし  
人類の母……!

さ……  
さすが

ぬ  
はん

雷!!  
いかずち



良い  
「強光戦闘体」を  
与えられている！

だが虫ケラごとき  
人間どもには無敵  
でも…

これなら  
どうだ!?

な…っ  
何者だっ!?

なぜ戦闘体の事を  
知っているのだ!?

ククク…  
中で操る姿は  
無防備だな

「戦斗体」を見せつけて  
神を氣どるか

あ…

あっ

お前がこの地に  
産んだ人間どもが  
ようやく文明を  
築き上げたところで  
申し訳ないが

それも  
ここまでだ

…汝は…  
へびか!!

そうだ…

かって  
星々の彼方で

お前の夫に  
やぶれたあげく  
放逐された  
へびだよ!

こんな屋で  
妻を娶っていた  
とはな!

んああっ



クククいい姿だぞ  
イシユタルとやら!

うっ

ぐっ

人間を  
何万と産んだ後も  
なお美しい

「神」が  
お前に与えたのは  
「繁」の能力か!

その方

ああっ

やっやめ…っ

おまんこ  
子宮つくり変える  
つもりかあっ!?

今度は  
私の繁殖の為に  
使わせて  
もらおうか!

びびび

びびび

びびび



地下迷宮メイズの開放を阻止するため、  
クアール湖に向かうフィオナ！  
彼女への協力の見返りとして、  
ジュダはフィオナの身体を求め、

**肉奴隷調教を施す！**



# イセリア 英雄戦記

the Legend of the Azeria War

第29話 奈落へ誘う島

小説 せん や よみ 千夜詠 ぼ た ん 挿絵 牡丹  
NOVEL ILLUSTRATION



クレオラとイセリアの国境沿い。小さな川のほとりにこの夜の野営のテントが設置された。

フェイエンから離れて四日目、ようやく砂漠を越えて、日中の灼熱から一変した冷え込む夜を逃れられたせいもあってか、フィオナとジユダが同行した両国の兵士らも、焚き火を囲んで酒を飲み交わしながら一息をついている。ここから北に向かった先にある王都を想って泣くイセリアの騎士の肩をそっと叩いてクレオラの魔術師が慰める光景など、個人のレベルでは友情も芽生えていた。

親交を深めているのは、何も兵ばかりではない。ただ、こちらは随分と趣が違っていたが。「はあつ……、こんな、恥ずかしいこと……。ふア、つああ……」

兵士たちよりも少し離れた場所に、設置されたテントの中で、公国の皇女は全裸で四つん這いにされている。

若々しい張りのある肌は、度重なる不特定多数の男たちの手によって熟され、早熟な肢体を見るからに淫猥な匂い立つものへと変えられていた。

その染みひとつない美麗な背中の上に童顔な美少年が、悪戯な微笑みを浮かべ、やはり裸で跨がっている。

「ほらほら、もつとしっかり歩いてよ。僕を退屈させないように楽しませてくれるんじゃないか？」  
高貴な一国の皇女も、彼の前では性奴隷扱いだ。

イセリア領内に入ったフィオナが、故郷に思いをはせる姿を見せたその時、クレオラの王子ジユダは戦後の復興支援を約束した。

だが、この魔王子が何の見返りもなしに、ということはなく、条件としてフィオナの肉体の所有権を求めてきたのだ。

結局のところ、この旅の間だけということで手を打たせたが、彼はその間に完全にフィオナを調教してしまう自信を覗かせている。

「はあ、はあ、ヒ……ヒン……」  
無邪気というには、余りにも変質的なお馬さんごっこ。背中に少年ひとり分の体重を感じ、鳴きまねさえさせられると、屈辱に泣き出したくなる。

だが、ジユダのいきり勃つた肉棒の先端から漏れてくるカウパーが背中を濡らしてくると、汚される被虐と隷属させられている意識に、膣と子宮がジーンと甘い痺れを感じてしまふ。

「ふふ、イセリアの皇女様のこんな姿が見られるなんて……。合流を急いだかいがありましたわ」  
兵士らのよりもずっと広いこのテントにはもうひとり、トーガを纏った女性。ローヌリウムスといつて、ジユダがクアール周辺の潜入調査へと向かわせていた者だ。

茶褐色のロングヘアに、翡翠色の瞳を持った彼女は、今朝がた合流したばかりで、メイズVIの正確な場所の特定を成し、また旅の食糧の調達を行った

功績によって、ジユダからこの場に参加することを許されている。

「さあ、早くローヌのところまで行くんだフィオナ。早くしないと、行き先を外の連中のところに変えるけど、そっちのほうがいいかい？」

「そ、そんな……」  
燃え上がるように鼠蹊部から肉体系が熱くなっていく。全裸の四つん這いの姿で、忠誠を誓ってくれている騎士たちも混ざった兵士らの前に出ていく。何度も与えられた露出羞恥の刺激は、想像しただけで、秘粘膜の奥に息づいた肉壺をヒクつかせた。

敬愛の眼差しが落胆と侮蔑に変わり、発情した肉体の特徴を見詰められ、罵りと嘲笑を受ける。恥ずかしく発情した肉体の特徴、円錐状に突起した乳首や肥大した肉芽、止めどなく淫蜜を滴らせる女陰が大量の視線で撫でまわされ、隷属に恍惚した表情が確認されてしまふ。そんな妄想を描くと、自然に呼吸が深く乱れてきた。

「あらあら、フィオナ様ったら、期待してますの？ 膣が潤んできているじゃないですか」

「そんなこと……あ、ありません」  
ローヌに言い当てられ、どうしても強く否定を発することができず、言葉尻が小さくなってしまふ。

王子に促され、彼を背中に乗せたまま一歩、一歩と進む度に、豊満な胸の肉果実がたぶたと揺れる。釣鐘はほんのりと汗ばみ、甘ったるい濃厚な牝

の匂いを身体中から発する皇女。

「ぐずぐずしないでね。そらっつ！」

ピシッ！ ジユダの持った小さな馬鞭が、フィオナのくねくねと男を誘惑するかのよう左右に揺らされるお尻を叩いた。

「ヒ……っつ！」  
食い縛る表情を見せながら、頬を桜色に染めた顔は、直後に緩んでいく。

（な……何……、この感じ……）  
鋭い痛みが脳髓まで電流のように駆け上り、刹那の後に焼けつくようなヒリヒリした刺激が、じわじわと尻肌から染み込んできた。すると、それは瞬間に悦に変換されて、肉芽が包皮を捲り上げてきてしまふ。

（いや、わたくしの感じやすい場所が、露出しちゃう）  
これまで与えられた羞恥や直接的な性刺激とは違う、妖しい甘美なもの女陰を甘く蕩けさせた。

「そら、急いで、はいどうぞ」  
パシッ！ 再びお尻を叩かれて、引き裂かれるような痛みに涙を滲ませる。

「い……っつ、つう……、も、もう、おやめください。こんな……、はうっ！」  
口答えを許さぬように、もう一度叩かれる。瞬間に脳内を満たす痛みが齧す痺れは、鳴り響くような振動になつて、全身に送り返された。

すると、

「は、はあ……ア、痛いのが……」  
盛りがついたように突起した乳首が疼き、子宮から膣、クリトリスや肉花

弁に至る牝部の全体が顫動したようになつて、プチャッと淫蜜を吐き出しってしまった。

「ハアっ！ あ……ああ……」

唐げられるのが気持ちいい。表情が恍惚を示し、だらしなく口元が緩んだ。ハア、ハア、と甘つたるく吐息を漏らして、被虐に感じる牝の顔を覗かせてしまう。

「まあ、フィオナ様、何だかどうでも気持ちよさそう……。殿下、皇女のあそこ、確認させていただいてもよろしいですか？」

「ああ、好きにしていよいよ」

ジュダの許可を得たロアーヌが背後に回つて、濃厚な牝を匂い立たせる剥き出しの鼠蹊部を覗き込んできた。

「ふア、ああ、いけません、そんなに見ては……」

視線に擦られるような感覚が湧いてくると、ぬちゃぬちゃと牝汁が溢れてダダ漏れになつてしまう。何度も思い知らされてきた自分の淫らな本性が暴かれてしまうようで、それが気持ちよくなつてしまった。

「やあん、もうこんなに、ぐっちゃんぐちよん。太腿に滴つて、もう垂れ落ちそうじゃないですか。噂通りの、変態マゾ……。そうとうの好きものマンコですね」

「う、噂つて……。ハア、ハア……」

認めたくないのに、肉体が勝手に疼きながら、もつと罵つてと訴えている。

「私、密偵ですから。色々と情報は入

つてきますの。殿下に頼まれて、絵の回収とかも、してましたのよ」

「絵……。あ、ああっ」

暴虐の皇帝によつて純潔を散らされた惨めな姿を描かれた絵画。それは大陸中にばら撒かれ、誰ともわからぬ者の目に止まつているかもしれない。忌まわしい過去の象徴。一生ついて回るかと思われる恥辱に、悲しさが溢れてくる。

「余計なことは言うなよ、ロアーヌ。ふん、フィオナ姫は僕のものなんだ。たとえそれが、ただの絵であつても、下賤な連中の手元なんか置かせておけるものか」

しかし、ジュダがそれを回収していたことは意外であり、鑑賞される恥ずかしさはあつたが、どこの誰ともわからぬ人物よりはましに思えた。

（この方は、いったい……。フェイエンでも助けてくれて……）

別れ際にセリーヌがやけに心配した通りに油断はしない。だが、根からの悪人とも感じなかつた。

「そんなことより、それっ！」

パシツ、パシツ！ 乗馬鞭にたわいな尻房が揺らされる。痛みという強い刺激に、肉体は一度硬直するが、直後に快感が全身を包んで、身体中の穴が緩んでいった。

「ヒイっ！ ジンジンしますうっ」

ぬらぬらとした鼠蹊部の光沢が太腿にまで広がっていく。ぷるぷると汗ばんだ肢体を震わせ、顔を顰めながらも、

唇の端から涎が漏れてしまった。

「あら、またフィオナ様の下の口から、いやらしい蜜がどくどく溢れてきてますわ。叩かれて感じてますの？

これは噂以上の変態マンコ」

パシツと尻肉に衝撃を与えられる度に、ロアーヌの眼前で淫蜜をしぶき上げ、彼女の顔を滑らせている。

まただ。卑肉が肉体を奥から壊してくるような激しい刺激を求めて、甘美な悦楽の後に、もつと、もつと、と求めてしまう。

「わ、わたくしは、叩かれて感じたりしまつ、ひゃいっ！」

鋭敏な捲れたばかりのクリトリスが女の指先に捕らえられる。ピクピクと身を痙攣させて、突き刺してくるような性刺激に、口角を下ろして泣き出しそうな表情に変わった。

「ああ、ハア、ハア、そんなところ責められては……。わ、わたくし……」

もつとも感じやすい性感部を、繊細な女性の指先で摘まれながら、絶妙に込められる力。遅々と染み込んでくる悦は、悩ましく女体を責め立ててくる。背中の上のジュダもニヤニヤと見下ろしていた。

「ここからどうして欲しいんだい。随分と切なそうな顔をしているじゃないか、フィオナ姫」

イキそうな直前で、指の動きは止められている。摘んでくるロアーヌの手を滴らせる牝汁で濡らし、だが、もどかしさだけが下腹部に膨張してきた。

イキたい。イかせて欲しい。眉根を寄せながら、つい先程覚えた痛悦の妖しい刺激を思い出す。どうしても欲しい。

ダメ、そんなことを口走つては。これ以上堕ちたくはない。なのに、身体はもう狂いそうに懇願してきた。

「フィオナの、ク……。クリトリス……あ、ああ……つ、振じ切るくらいに摘み上げてえっ！」

ぐにゅっ！ 強烈な痛みと、それと同等の快感が電流となつて脳天を突き上げてきた。

「ヒヤア……っ！ クリトリス千切れつ、イ……。っ、イクうっ！」

プシャ……。ッ！ 失禁しながら、全身が鋭い快感に包まれ、背を仰け反らせて少年の身体を揺さぶる。貫かれるような激悦が弾け、身を跳ね躍らせた。

「あはは、ロデオだ。おつと」

脳内に快感が鳴り響き、公国の皇女は、白目剥きそうなアへ顔を晒す。微熱を帯びた肉体から力が抜けて、震える両腕が折れ、豊乳をへしゃげつけるようにして崩れてしまう。

「うわア……。てて……」

転げ落ちたジュダであつたが、いかにも楽しそうな顔をしていた。立ち上がった彼は、絶頂に肉を痙攣させる皇女を見下ろす。

「しょうがないな、フィオナ姫は。僕を落とすお仕置き、受けてくれるよね？」

だらしなく涎を漏らした顔を上げ、



「はい、王子……」  
 そう答えたフィオナの顔は期待に満ちていた。

「はい、王子……」  
 そう答えたフィオナの顔は期待に満ちていた。

「はい、王子……」  
 そう答えたフィオナの顔は期待に満ちていた。

「はい、王子……」  
 そう答えたフィオナの顔は期待に満ちていた。

「はい、王子……」  
 そう答えたフィオナの顔は期待に満ちていた。

「はい、王子……」  
 そう答えたフィオナの顔は期待に満ちていた。

「はい、王子……」  
 そう答えたフィオナの顔は期待に満ちていた。

「はい、王子……」  
 そう答えたフィオナの顔は期待に満ちていた。

顔をさせる彼の隣にロアーヌがいて、彼女と会釈を交わす。  
 「もうすぐ出立の準備が整うだろ。今日もかなりの距離を移動しなくちゃならないから、姫様専用の馬を用意させたんだ。ついてきて」

「は、はい」  
 この戦火の時勢に馬車などは期待してはいけない。砂漠の移動に慣れたジユダもフェイエエンまではラクダを使つたようで、立派に乗りこなしていた。ここからの陸路は馬が有効で、多くの兵が徒歩なのを考えると申し訳ないが、自分も歩くと言え、かえって気を使わせてしまう。

「は、はい」  
 この戦火の時勢に馬車などは期待してはいけない。砂漠の移動に慣れたジユダもフェイエエンまではラクダを使つたようで、立派に乗りこなしていた。ここからの陸路は馬が有効で、多くの兵が徒歩なのを考えると申し訳ないが、自分も歩くと言え、かえって気を使わせてしまう。

「は、はい」  
 この戦火の時勢に馬車などは期待してはいけない。砂漠の移動に慣れたジユダもフェイエエンまではラクダを使つたようで、立派に乗りこなしていた。ここからの陸路は馬が有効で、多くの兵が徒歩なのを考えると申し訳ないが、自分も歩くと言え、かえって気を使わせてしまう。

「は、はい」  
 この戦火の時勢に馬車などは期待してはいけない。砂漠の移動に慣れたジユダもフェイエエンまではラクダを使つたようで、立派に乗りこなしていた。ここからの陸路は馬が有効で、多くの兵が徒歩なのを考えると申し訳ないが、自分も歩くと言え、かえって気を使わせてしまう。

「は、はい」  
 この戦火の時勢に馬車などは期待してはいけない。砂漠の移動に慣れたジユダもフェイエエンまではラクダを使つたようで、立派に乗りこなしていた。ここからの陸路は馬が有効で、多くの兵が徒歩なのを考えると申し訳ないが、自分も歩くと言え、かえって気を使わせてしまう。

「は、はい」  
 この戦火の時勢に馬車などは期待してはいけない。砂漠の移動に慣れたジユダもフェイエエンまではラクダを使つたようで、立派に乗りこなしていた。ここからの陸路は馬が有効で、多くの兵が徒歩なのを考えると申し訳ないが、自分も歩くと言え、かえって気を使わせてしまう。

「は、はい」  
 この戦火の時勢に馬車などは期待してはいけない。砂漠の移動に慣れたジユダもフェイエエンまではラクダを使つたようで、立派に乗りこなしていた。ここからの陸路は馬が有効で、多くの兵が徒歩なのを考えると申し訳ないが、自分も歩くと言え、かえって気を使わせてしまう。

反射的に淫蜜の涎を漏らし、もう口を緩ませ出していた。  
 「さあ、早く乗ってよ。でない、誰かが呼びにきちゃうよ」  
 悪戯に微笑んでいる王子。その表情を少し恨めしそうに見詰めながらも、じわじわと肉裂に熱が生じていくのを覚えてしまう。

「さあ、早く乗ってよ。でない、誰かが呼びにきちゃうよ」  
 悪戯に微笑んでいる王子。その表情を少し恨めしそうに見詰めながらも、じわじわと肉裂に熱が生じていくのを覚えてしまう。

「さあ、早く乗ってよ。でない、誰かが呼びにきちゃうよ」  
 悪戯に微笑んでいる王子。その表情を少し恨めしそうに見詰めながらも、じわじわと肉裂に熱が生じていくのを覚えてしまう。

「さあ、早く乗ってよ。でない、誰かが呼びにきちゃうよ」  
 悪戯に微笑んでいる王子。その表情を少し恨めしそうに見詰めながらも、じわじわと肉裂に熱が生じていくのを覚えてしまう。

「さあ、早く乗ってよ。でない、誰かが呼びにきちゃうよ」  
 悪戯に微笑んでいる王子。その表情を少し恨めしそうに見詰めながらも、じわじわと肉裂に熱が生じていくのを覚えてしまう。

「さあ、早く乗ってよ。でない、誰かが呼びにきちゃうよ」  
 悪戯に微笑んでいる王子。その表情を少し恨めしそうに見詰めながらも、じわじわと肉裂に熱が生じていくのを覚えてしまう。

「さあ、早く乗ってよ。でない、誰かが呼びにきちゃうよ」  
 悪戯に微笑んでいる王子。その表情を少し恨めしそうに見詰めながらも、じわじわと肉裂に熱が生じていくのを覚えてしまう。

「さあ、早く乗ってよ。でない、誰かが呼びにきちゃうよ」  
 悪戯に微笑んでいる王子。その表情を少し恨めしそうに見詰めながらも、じわじわと肉裂に熱が生じていくのを覚えてしまう。

「さあ、早く乗ってよ。でない、誰かが呼びにきちゃうよ」  
 悪戯に微笑んでいる王子。その表情を少し恨めしそうに見詰めながらも、じわじわと肉裂に熱が生じていくのを覚えてしまう。

「さあ、早く乗ってよ。でない、誰かが呼びにきちゃうよ」  
 悪戯に微笑んでいる王子。その表情を少し恨めしそうに見詰めながらも、じわじわと肉裂に熱が生じていくのを覚えてしまう。

「さあ、早く乗ってよ。でない、誰かが呼びにきちゃうよ」  
 悪戯に微笑んでいる王子。その表情を少し恨めしそうに見詰めながらも、じわじわと肉裂に熱が生じていくのを覚えてしまう。

「さあ、早く乗ってよ。でない、誰かが呼びにきちゃうよ」  
 悪戯に微笑んでいる王子。その表情を少し恨めしそうに見詰めながらも、じわじわと肉裂に熱が生じていくのを覚えてしまう。

「さあ、早く乗ってよ。でない、誰かが呼びにきちゃうよ」  
 悪戯に微笑んでいる王子。その表情を少し恨めしそうに見詰めながらも、じわじわと肉裂に熱が生じていくのを覚えてしまう。

「さあ、早く乗ってよ。でない、誰かが呼びにきちゃうよ」  
 悪戯に微笑んでいる王子。その表情を少し恨めしそうに見詰めながらも、じわじわと肉裂に熱が生じていくのを覚えてしまう。

「さあ、早く乗ってよ。でない、誰かが呼びにきちゃうよ」  
 悪戯に微笑んでいる王子。その表情を少し恨めしそうに見詰めながらも、じわじわと肉裂に熱が生じていくのを覚えてしまう。

「さあ、早く乗ってよ。でない、誰かが呼びにきちゃうよ」  
 悪戯に微笑んでいる王子。その表情を少し恨めしそうに見詰めながらも、じわじわと肉裂に熱が生じていくのを覚えてしまう。

備の整った騎士らの前に導かれると、いつも通りのはずの彼、彼女たちの視線が違ったものを感じてしまう。

「おはようございます、姫様」

「お、おはようございます」

短い髪の女性騎士が、微笑みながら馬で近づき、次の目的地まで伴走してくれるようだ。

「僕が手綱を引かせていただきます」

まだほんの少年と思える若い騎士が、ジュダから手綱を引き継いで、前を歩いてくれる。

フィオナは最重要警護対象の人物だ。周りを一個小隊が囲み、皆、真剣に己の使命を全うしようとしている。

（ああ、それなのに、わたくしは……）

比較的安全な場所とはいえ、淫祇邪教は大陸中に根を張っている。それに王都を失ったイセリアの周辺は治安が悪化し、野盗に襲われる可能性もあった。決して油断はできないのだ。

緊張感のある面持ちの騎士らの真ん中で、守られるべき皇女は、膾とアナルに男性器を模した卑猥な玩具を密かに入れている。

おかしな反応をしたら気付かれてしまうのではないかと考えただけで、乳首もクリトリスも突起し、いつも以上に敏感になってしまった。

「では、出発いたしましょう」

「え、ええ……」

馬が進み出すと、

（ふアッ……、振動が、ひ、響いて入っているのが、奥を突き上げて、あ

っ、ああ……。ダメ、よくなっちゃう）

何とか平静な顔を繕うのだが、肉体

は正直に刺激に反応して、溢れ出る淫

蜜が太腿の内側を流れていった。鞍の前側に置いた両手に力を込めながら、

少し腰を浮かせてみたが、すると余計

に大きく振動を感じてしまう。

「すごい……」

つい、声を漏らしてしまい、慌てて

隣の女性騎士を見るが、どうやら気付

かれなかったようだ。

少し離れた場所からジュダがこちら

に視線を送っている。憎らしいほど楽

しそうで、恨めしい瞳を向けると、ク

スッと彼はひとつ笑った。

（う……んっ、んっ……、こんなに馬

上が揺れるなんて。ああ、ゴリゴリし

たのが、わたくしの、オ、オマンコと、

お尻をぐちゅぐちゅにして……）

たしなみとして乗馬は覚えているが、

いつも通りに振動に合わせて腰を動か

すだけで、感じやすい二穴が掻き回さ

れる。

もし周りに気付かれたらどうなっ

てしまうのだろうか？ もし今、下半身を

覆い隠した衣服の裾を捲り上げたら？

驚愕に瞳を閉じることのできなくなる

女性騎士。その視線の先には、馬に

乗りながら女陰とアナルに異物を埋め

た淫らな皇女の下半身がある。そこは

ぐっしよりと濡れていて、あからさま

に感じているのがわかってしまう。だろ

う。気付かなかったふりをしながらも、

彼女はきつこう思う。——フィオナ

姫は変態——と。

「ねえ、フィオナ姫」

「ヒ……っ、は、はい」

いつの間にか、自身の護衛隊の列か

ら離れて、ジュダが傍に寄ってきてい

た。

「少し遅れているようだから、予定を

変えて、こちらの森を突っ切るように

したいんだけど」

「お、お任せします」

ニヤニヤ笑っている魔王子だけは、

今フィオナがどんな状況にあるかわか

っている。彼の股間が大きく膨らんで

いるのに気付いたが、間違いなくそれ

は自分から伝っている性的な刺激のせ

いであろう。

「あれ、何だか、顔が赤いね、フィオ

ナ姫。ねえ、騎士さん、皇女の調子に

もつと氣遣って、よく見ていてやらな

いと」

他国の王子に指摘され、慌てた様子

の女性騎士。

「も、申し訳ございません」

「だ、大丈夫よ。ちよつと熱く感じた

だけですすから」

無理して微笑みで平静を演出するが、

下腹部の疼きはどんどん増してきて

しまう。

心配そうに見詰めてくる女性騎士の

視線。余計に感じた反応をしてはいけ

ないと意識して、羞恥が増した。だが

それだけに、

（ふアア——っ、恥ずかしいのが、き

気持ちよくなっちゃうっ！ そんな目

で見ないで……。わたくしっ、オマン

コもお尻も、ゴリゴリしてるのよ）

酔くいきたくなってしまう。疑似男

根に纏わりつかせた濡れた膈粘膜が、

鋭敏にその形状を感じ取っていく。も

っと、もつと、と卑肉がせがんできて、

強い刺激を欲してぐりぐりと鞍に股座

を押しつけていた。

ハア、ハア、ハア……。

僅かに俯きながら、甘つたるい吐息

を漏らし続ける。ジュダに指摘された

せいで、気にしてチラチラと視線を送

ってくるのは、女性騎士だけでなく、

手綱を引く少年も時折振り返ってきた。

「姫様、平気ですか？ 汗を掻かれて

いるようですが」

「だ、大丈夫よ。ありがとう、心配し

てくれて」

おそろく年下であろう少年騎士の純

粋な瞳が、淫らな自身を余計に感じさ

せる。

（ああ、皆に見られたら……、皆に見

られながら、イけたら……）

侮蔑の視線を大量に浴びせられなが

ら、劣情の籠つた言葉で罵られるはず、

唾を吐きかけるような態度に皆は一変

し、嗜虐的な興奮の対象とされるのだ。

恥ずかしい露出マゾの自分がこんな

誘惑に抗えるはずないじゃない——。

強い欲求に頭を横に振った。

だが、我慢すればするほどに、肉の

疼きは高まる。

ジュダの提案した通りに一行は森に

入った。





この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**